

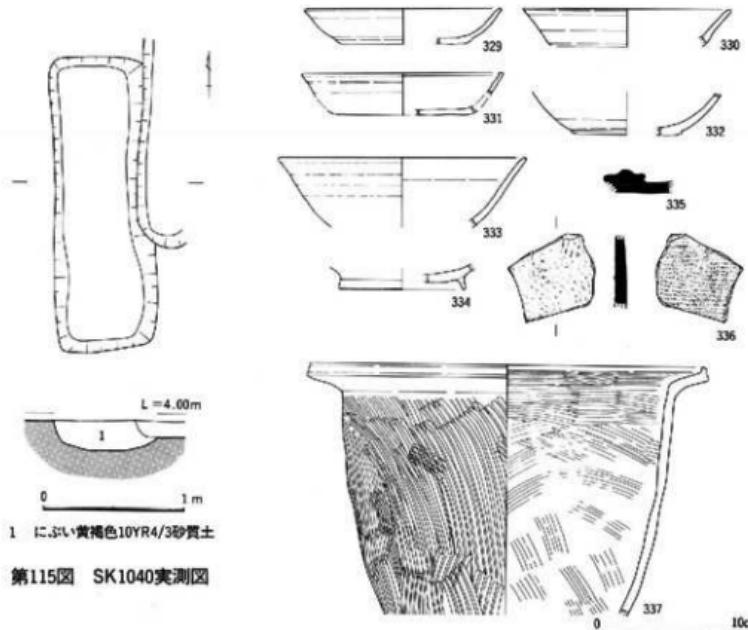
と東側側辺が接して主軸方向を同じくして検出した土坑で、切り合いかから言えば土坑39によって切られている。土坑の規模は長軸2.12m、短軸0.72m、深さ0.20mを測り、土坑39よりやや深い土坑である。土坑の断面形状はやや深いレンズ状を呈し、遺構内埋土はにぶい黄褐色砂質土である。主軸方向は南北を示す。

出土遺物（第116図）

遺構内からは中世遺物片もごく僅か出土しているが、後の混入物と考えられ主体は古代の遺物が占める。

329は赤色塗彩された土師器杯である。329は体部がやや内湾するタイプ、330は体部から口縁部にかけて若干外反するタイプである。331は口縁端部を内側に肥厚させ丸くおさめる。

332は無高台の土師器碗タイプと考えられるものである。口縁部は内向気味に立ち上がり、底部は若干突出する。333は内外面とも赤色塗彩された土師器碗である。体部はやや内湾気味に立ち上がり口縁端部は若干外反させ丸くおさめる。調整は内外面ヨコナデである。334は土



第115図 SK1040実測図

第116図 SK1040出土遺物実測図

師器腕の高台部で、内外面とも赤色塗彩されている。

高台はやや細身で、ハの字状にふんばる形態のものである。

335は須恵器の杯蓋片で、つまみの中央部は上方に突出する。

336は須恵器甕体部片である。外面は細い平行タタキ、内面は同心円状の当て具の痕跡が残る。337は土師器甕で上部は聞くタイプのものである。調整は体部外面は荒いタテハケ、内面上半ヨコハケ、下半部板ナデによりハケをナデ消している。口縁部はくの字状に屈曲させ、端部を上方に大きく拡張し丸くおさめる。調整は内面ヨコハケ、外面ヨコナデである。胎土は砂粒を多く含んでいる。

土坑41（SK1041）（第117図）

1号屋敷地調査区東隅（P-23グリッド）において検出した不整形の土坑である。土坑の規模は長軸1.36m、短軸1.30m、深さ0.18mを測る。土坑の断面形状は浅い逆台形状で、遺構内埋土は褐色系統の砂質土である。

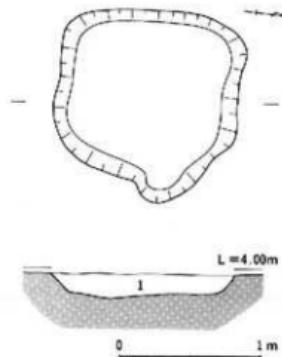
出土遺物（第118図）

338は須恵器杯の口縁部である。体部は若干内擣氣味に立ち上がり、口縁端部は尖り気味におさめる。調整は内外面ヨコナデ、焼成はやや軟質である。

その他、赤色塗彩された土師器杯片・土師器甕口縁部が出土している。

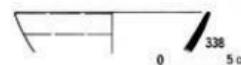
土坑42（SK1042）（第119図）

1号屋敷地（P-22グリッド）調査区東隅において検出した楕円形の土坑である。土坑の規模は長軸1.32m、短軸0.96m、深さ0.22mを測る。土坑の断面形状はレンズ状を呈し、遺構内の埋土は褐色砂質

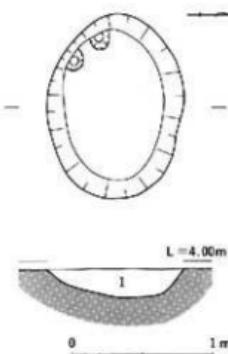


1 オリーブ褐色2.5Y4/4砂質土

第117図 SK1041実測図



第118図 SK1041出土遺物実測図



1 棕色10YR4/4砂質土

第119図 SK1042実測図

土1層である。主軸方向は東西を示す。

出土遺物（第120図）

遺構内からの出土遺物はごく僅かである。

339は赤色塗彩されており、340もおそらく赤色塗彩されたものと思われる土師器皿で口径23cm前後を測るやや大型のものである。口縁端部はナデにより外方に屈曲させ、

内面には沈線が巡る。341・342は尖底の底部をもつ製塙土器口縁部である。端部の断面形状は三角形状を呈し、端部は尖り気味におさめる。調整は外面ナデで、内面には布目痕が残る。胎土には5mm大の砂粒を多く含んでいる。

その他、土師器甕片が出土している。

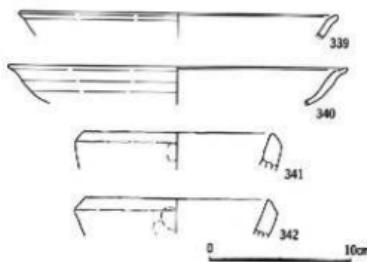
土坑49（SK1049）（第121図）

2号屋敷地北東寄り（L-10グリッド）において検出した南側短辺が丸くおさめた不整長方形の土坑で、北東隅は柱穴によって切られている。土坑の規模は長軸2.36m、短軸0.82m、深さ0.09mを測る浅い土坑である。断面形状は皿状を呈し、遺構内埋土は2層に分層され炭化物を含む褐色系統の砂質土である。第2層は西側側壁に沿って垂直気味に堆積した粘性を帯びた砂質土である。主軸方向は真北より若干西偏している。

出土遺物（第122図）

遺構内からは完形の土師器杯が2点出土しており、土壤墓の可能性が考えられる。

343の体部は底部からやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部を丸くおさめるものである。調整は内外面ヨコナデ、底部は回転ヘラ切り後ナデである。344の体部は底部からやや強く屈曲し外上方に立ち上がるるもので口縁端部は若干外反させる。調整は内外面ヨコナデ、底部は回転ヘラ切り未調

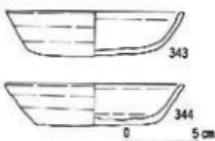


第120図 SK1042出土遺物実測図



1. 地オリーブ褐色2.5Y3/3砂質土(炭化物含む)
2. オリーブ褐色2.5Y4/3砂質土(炭化物含む)

第121図 SK1049実測図



第122図 SK1049出土遺物実測図

整である。343・344とも口径・器高はほぼ同法量を示すが、焼成および底部の調整に大きな違いを見せる。

その他に、須恵器甕片・土師器甕口縁部が出土している。

土坑50（SK1050）（第123図）

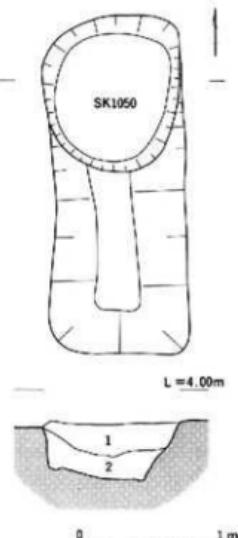
1号屋敷地ほぼ中央部（P-19グリッド）において検出した土坑（SK1051）と切り合う不整円形の土坑で南側半分の掘り方は土坑（SK1051）の底面で検出された。土坑の規模は長軸1.12m、短軸0.98m、深さ0.40mを測り、断面形状はやや深い逆台形状を呈する。底面には壁際に沿って浅い落ち込みが検出された。遺構内埋土は2層に分層され、オリーブ褐色砂質土である。主軸方向はほぼ南北を示す。

出土遺物（第124図）

345～347は口径12cm前後を測る土師器の皿である。口縁端部は外反させる。348～351は土師器杯で、349・351は赤色塗彩されている。口縁の形態からは外反させ、端部を丸くおさめるタイプ348と、直線的に立ち上がり端部を丸くおさめるもの349～351がある。調整は内外面ともヨコナデである。351の底部外面は回転ヘラ切り後丁寧なナデが施されている。

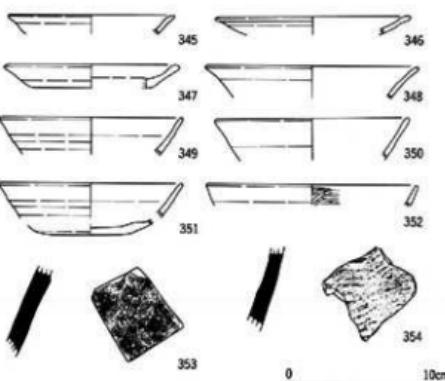
352は黒色土器A類楕の口縁部である。端部は直線的で丸くおさめ、調整は外面ヨコナデ、内面は綿密なヨコヘラミガキが施されている。

353・354は須恵器甕の体部片である。353の外面は平行タタキ、内面は同心円状の当て具の痕跡が残る。354は平行タタキ、内面ヘラケズリ状の強い板ナデが施されている。



1 オリーブ褐色2.5Y4/3砂質土
2 オリーブ褐色2.5Y4/4砂質土

第123図 SK1050実測図



第124図 SK1050出土遺物実測図

る。その他、土師器壺片が出
土している。

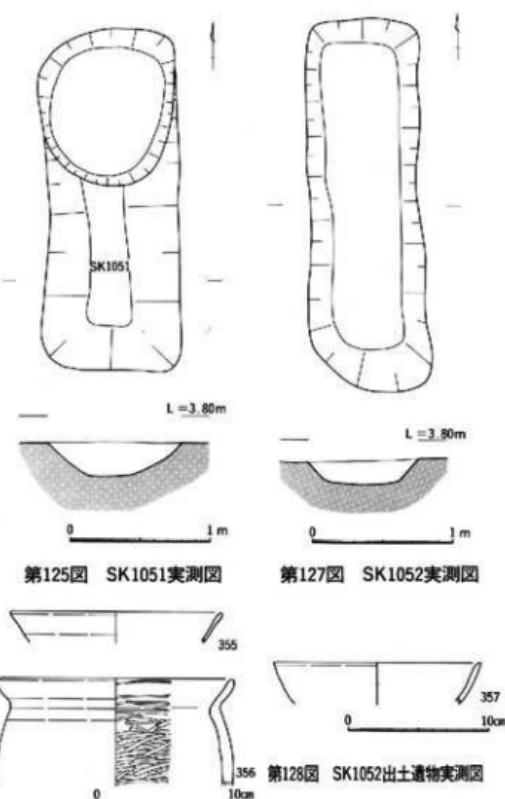
土坑51(SK1051) (第125図)

1号屋敷地 (P-19グリッド) において検出した長方形土坑である。北側短辺部は土坑 (SK1050) を切っている。土坑の規模は長軸検出長1.32m、短軸1.00m、深さ0.24mを測る。土坑の断面形状は幅広のU字状を呈し、遺構内埋土は1層のみである。主軸方向は南北を示す。

出土遺物 (第126図)

遺構内からの出土遺物は非常に少ない。355は赤色塗彩された土師器杯の口縁部である。口縁部は若干外反する。

356は黒色土器の壺で内面のみ黒色処理されている。口縁部は内側気味に立ち上がり、端部は丸くおさめる。調



第125図 SK1051実測図

第127図 SK1052実測図

第126図 SK1051出土遺物実測図

第128図 SK1052出土遺物実測図

整は体部外面ヨコナデ、内面ヨコ方向へのヘラミガキが施されている。口縁部外面ヨコナデ、内面はヨコナデ後部分的にヨコ方向へのヘラミガキが見られる。

遺構内から土鍋片も若干出土している事から遺構の時期は13世紀代まで下る可能性もある。

土坑52 (SK1052) (第127図)

1号屋敷地中央部 (P-19グリッド) において検出した土坑で土坑 (SK1051) に南接し、また同方向を示す南短側辺が不整形な長方形土坑である。

土坑の規模は長軸2.66m、短軸0.88m、深さ0.18mを測る。土坑の断面形状は浅い逆台形

状を呈し、遺構内埋土は1層である。主軸方向は南北を示す。

出土遺物（第128図）

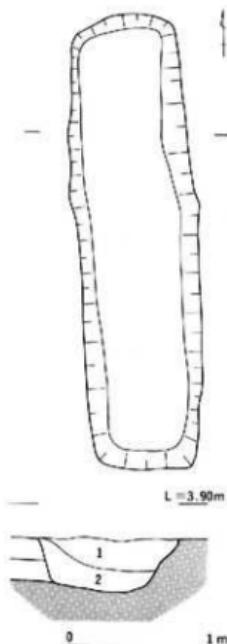
357は赤色塗彩された土師器杯である。口縁部は内彫気味に立ち上がり端部は尖り気味におさめる。調整は内外面ヨコナデである。底部の形状は不明であるが、椀形になる可能性もある。その他、製塙土器片・土師器壺片が出土している。

土坑53（SK1053）（第129図）

1号屋敷地中央部（P-19グリッド）の浅い落ち込みの堆積層下から検出した長方形土坑で、土坑（SK1057-1058）と切り合っている。土坑内からは柱穴と思われる落ち込みがみられるが、土坑には伴わない。土坑の規模は長軸2.26m、短軸0.84m、深さ0.36mを測り、土坑の断面形状はやや深い逆台形状を呈する。遺構内埋土は褐色系統の砂質土で2層に分層される。主軸方向は南北方向を示す。

出土遺物（第130図）

358は黒色土器A類碗である。口縁部は内彫気味に立ち上がり、端部は丸くおさめる。調整は外面、上部ヨコナデで下半にはヨコ方向へのヘラケズリの痕跡が残る。内面はヨコ方向のヘラミガキである。胎土に結晶片岩がみられる事から在地産と考えられる。その他に、土師器片・製塙土

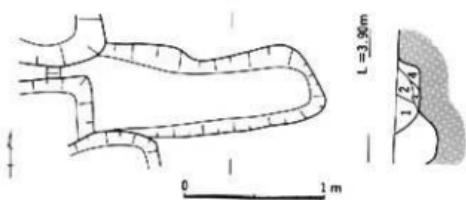


1 オリーブ褐色2.5Y4/3砂質土
2 嘘褐色10YR3/4砂質土

第129図 SK1053実測図

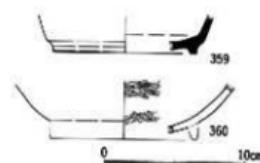


第130図 SK1053出土遺物実測図



1 オリーブ褐色2.5Y4/3砂質土
2 灰オリーブ色5Y5/3砂質土
3 オリーブ褐色2.5Y4/4砂質土
4 暗灰黄色2.5Y4/2砂質土

第131図 SK1057実測図



第132図 SK1057出土遺物実測図

器片が出土している。

時期的には9世紀から10世紀初頭と考えられる。

土坑57（SK1057）（第131図）

1号屋敷地中央部（P-19グリッド）において検出した不整長方形の土坑で、土坑（SK1053・1058・1104）によって切られている。土坑の規模は長軸1.92m、短軸0.66m、深さ0.18mを測り、断面形状は逆台形状を呈する。遺構内埋土は4層に分層され、褐色系統の砂質土である。主軸方向は東西を示す。

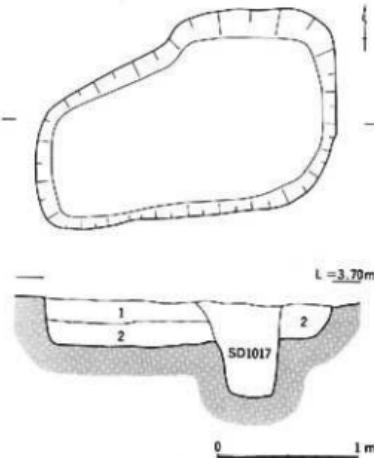
出土遺物（第132図）

359は高台付の杯で、焼成はやや軟質である。360は黒色土器A類腕で、高台部が剥落している。外面は剥離のため調整は不明瞭であるが、ヨコ方向へのケズリと思われる。高台部には接合のための弦線が巡る。内面は不定方向への綿密なヘラミガキが施されている。

その他、赤色塗彩された土師器杯片・摺津C型の土釜口縁部・製塩土器片が出土している。⁽¹³⁾

土坑59（SK1059）（第133図）

1号屋敷地中央部（P-19グリッド）の方形状の浅い落ち内において検出した不整な隅丸長方形土坑で、溝（SD1017）によって切られている。土坑の規模は長軸2.20m、短軸1.46m、深さ0.46mを測る。掘り方は検出面よりやや垂直気味に掘り込まれ断面形状は方形状を呈するが、底面は若干西側に傾斜している。遺構内埋土は2層に分層され砂質土である。主軸方向は東西を示す。



出土遺物（第134図）

361・362は土師器皿である。361は浅い土師器皿で口径12.4cmを測る。口縁端部は緩やかに外反させ下端部を若干下垂させる。調整は内外面ヨコナデで、外底面は回転ヘラ切り後ナデである。外面に僅かに赤色顔料と思われるものが塗彩され

第133図 SK1059実測図

ている。362は口径16.0cmを測る土師器皿で全面赤色塗彩されているものと考えられる。体部は外上方に短く立ち上がり口縁端部は上方に拡張し丸くおさめ、内面に若干肥厚させ沈線状が巡るものである。調整は内外面ヨコナデ、外底面は回転ヘラ切り後ナデである。

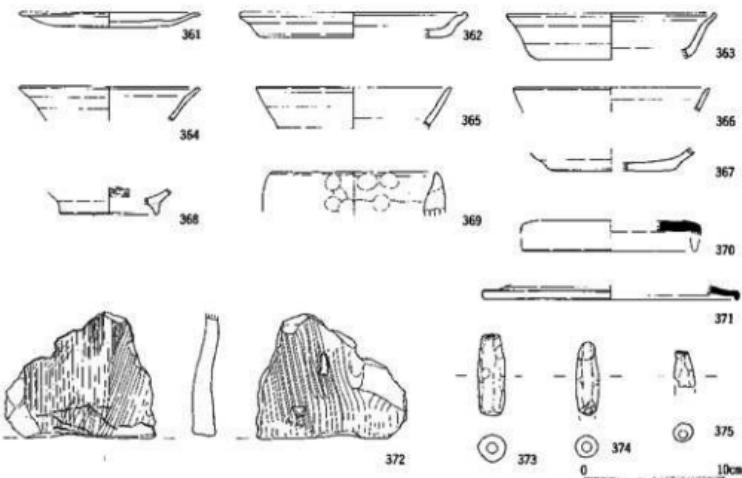
363～367は土師器杯で、363～366は内外面とも赤色塗彩されたものである。363は体部は外上方に立ち上がり、口縁端部を若干外反させた後、上方に拡張し丸くおさめる。内面には強いナデにより沈線を巡らす。内外面はナデ調整である。364は外反させる口縁をもつもので、口縁端部は上方に僅かに立ち上げ、丸くおさめている。365・366は体部が外上方に延び口縁部にいたるもので端部は僅かに外反させる。

367は土師器杯の底部片で外面は回転ヘラ切り後丁寧なナデが施されている。

368は黒色土器A類椀の底部で断面三角形状の高台が付く。体部内底面には綿密なミガキが施されている。

369は口縁部断面三角形状を呈した製壺土器で、胎土に多量の砂粒が含まれている。370・371は須恵器の蓋で、371は端部を下方に曲げや尖り気味におさめている。372は竈片と思われるもので、内外面とも荒いタテハケが施されている。

373～375は管状土錐である。



第134図 SK1059出土遺物実測図

土坑60 (SK1060) (第135図)

1号屋敷地中央部 (P-19グリッド)において検出した円形の土坑である。

土坑の規模は径1.10mを測る。断面形状は浅い逆台形状を呈し、遺構内埋土はにぶい黄褐色

色砂質土1層である。

出土遺物（第136図）

遺構内からは若干の遺物しか出土していない。

376は黒色土器A類楕の口縁部である。口縁部は若干内彎気味で、調整は外面口縁端部のみ横方向のミガキ、内面綿密なミガキが施されている。

377は土師器皿で、内外面とも赤色塗彩されている。口縁部は体部から外上方に屈曲し端部は若干上方に拡張するため内面には沈線が巡る。

378は土師器甕で、体部は長胴形を示すものと考えられる。口縁部は外上方に屈曲し、短部は上部方に拡張する。調整は体部外面荒いタテハケ、内面はケズリ状の強い横方向への板ナデである。口縁部は内外面ともヨコナデ調整である。

その他、遺構内からは赤色塗彩された土師器片・須恵器壺片・製塩土器片が出土している。

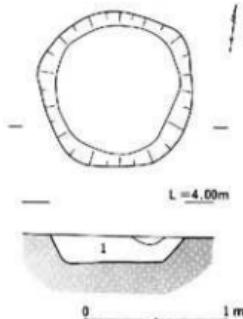
時期は黒色土器が若干新しい様相を示すものの概ね9世紀代と考えられる。

土坑62（SK1062）（第137図）

1号屋敷地ほぼ中央部（P-18グリッド）において検出した隅丸方形状の土坑であるが、土坑61の底面においてプランが確認された。土坑の規模は長軸0.80m、短軸0.62m、深さ0.08mの非常に浅いものである。断面形状はレンズ状を呈する。遺構内埋土は第3層で黄褐色砂質土1層である。主軸方向は若干真北より西偏している。

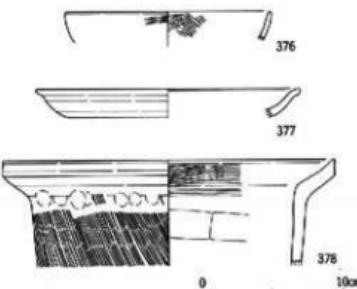
出土遺物（第138図）

379は無高台の須恵器杯である。体部は底部から強く屈曲し、上方に立ち上がりそのまま口



1 に bei 黄褐色10YR5/3砂質土

第135図 SK1060実測図



第136図 SK1060出土遺物実測図

縁部を形成する。端部は尖り気味におさめる。調整は内外面ともヨコナデである。底部は不整方向へのヘラケズリが施されている。380は須恵器杯高台部である。調整は内外面ともヨコナデである。

381～384は内外面とも赤色塗彩された土師器杯である。口縁部の形状から若干外反させ端部を尖り気味におさめるタイプ

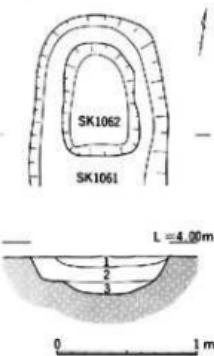
381・382と、端部をやや

肥厚させ丸くおさめるタイプ383がある。調整は何れも内外面ヨコナデである。384は土師器杯底部で外底面は丁寧なナデ調整が施されている。

時期は9世紀代である。

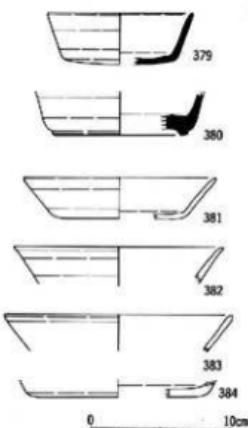
土坑70（SK1070）（第139図）

1号屋敷地中央部（Q-18グリッド）において検出した隅丸の長方形土坑である。北側側辺部は柱穴SP770によって切られている。土坑の規模は長軸2.54m、短軸0.68m、深さ0.32mを測る比較的深い土坑である。断面形状はU字状を呈する。主軸方向は東西を示す。

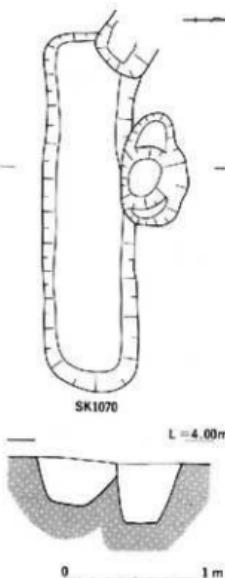


1. に、い黄褐色10YR5/4砂質土
2. 明黄色10YR6/4砂質土
3. 黄褐色10YR5/6砂質土（SK1062）

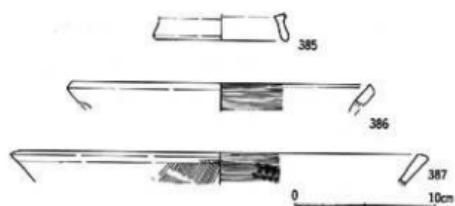
第137図 SK1062実測図



第138図 SK1062出土遺物実測図



第139図 SK1070実測図



第140図 SK1070出土遺物実測図

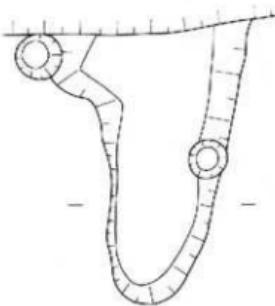
出土遺物（第140図）

遺構内からは若干の遺物しか出土していない。

385は土師器腕か皿の高台部である。比較的高い高台で、端部は肥厚させ丸くおさめる。

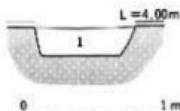
386・387は土師器妻・鍋の口縁部である。386外面ヨコナデ、内面ヨコハケ調整である。387は外面タテハケ、内面ヨコハケ調整である。その他、土師器杯片・須恵器壺口縁部が出土している。

時期的には土師器の高台の形状などから12世紀前後と捉えておく。



土坑91（SK1091）（第141図）

1号屋敷地中央やや南側（S-18グリッド）において検出した不整形の土坑である。西端は溝13によって切られている。土坑の規模は長軸検出長1.94m、短軸1.34m、深さ0.24mを測る。掘り方はやや垂直気味に掘り込まれ、断面形状は逆台形状を呈する。遺構内埋土は1層で炭化物を含む黄褐色砂質土である。主軸方向は東西を示す。



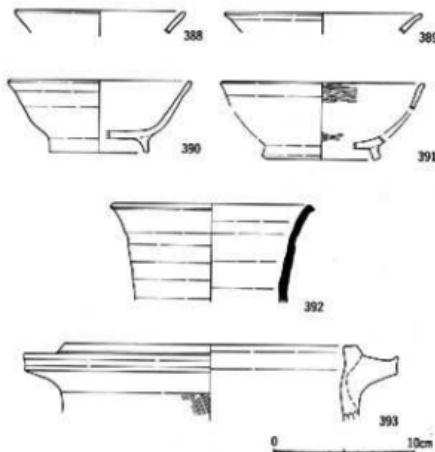
1 黄褐色10YR5/6砂質土(炭化物含む)

第141図 SK1091実測図

出土遺物（第142図）

388・389は土師器杯で388は赤色塗彩されている。調整は内外面ヨコナデである。390は土師器の高台付杯で、体部から口縁部は外上方に直線的に延び端部は尖り気味におさめる。

391は黒色土器A類椀である。口縁端部は若干外反し丸くおさめる。調整は外面ヨコナデ、内面横方向へのヘラミガキである。底部は断面方形状の高台が付き底径は8.0cm程度になる。胎



第142図 SK1091出土遺物実測図

土に結晶片岩を含むことから在地産と考えられる。

392は須恵器壺の頸部である。口縁端部は方形状で外端部は外下方につまみ出す。

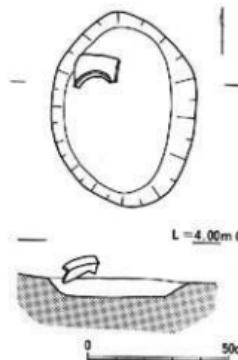
393は摺津型の土師器⁽⁴⁾で口縁部外面直下に水平に延びる厚手の鉢がつくものである。鉢の端部は上方につまみ上げられており、端面には弱い凹線が巡る。口縁部の立ち上がりは低く、断面は丸みをもった方形状を呈する。調整は体部外面タテハケ、内面ヨコナデである。胎土には石英粒・赤色粒を非常に多く含んでいる。その他、土師器杯片・土師器甕片が出土している。

土坑97 (SK1097) (第143図)

1号屋敷地中央部 (Q-18グリッド)において検出した小規模な横円形土坑である。土坑の規模は長軸0.75m、短軸0.56m、深さ0.06mを測り、断面形状は浅い逆台形状を呈する。出土遺物は遺構の上面から検出した。主軸方向はほぼ南北を示す。

出土遺物 (第144図)

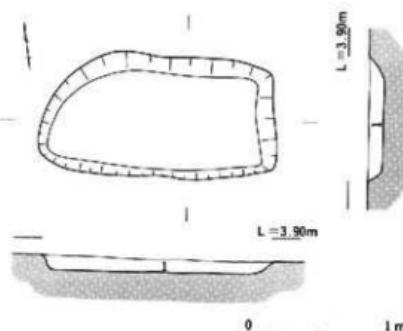
遺構内から出土した遺物は須恵器甕1点のみである。体部は丸みをもち、口縁部は体部から直立気味に短く立ち上がり、端部は内面に若干拡張し丸くおさめる。調整は体部外面格子状タテキ後カキメ、内面同心円



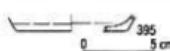
第143図 SK1097実測図



第144図 SK1097出土遺物実測図



1 黄褐色2.5Y5/4砂質土
第145図 SK1098実測図



第146図 SK1098出土遺物実測図

状の當て具の痕跡が明瞭に残る。口縁部は内外面ヨコナデである。焼成はやや軟質である。

土坑98（SK1098）（第145図）

1号屋敷地中央西端部（O-17グリッド）において検出した不整形な長方形土坑である。土坑の規模は長軸1.68m、短軸0.90m、深さ0.11mを測る。断面形状は浅い皿状を呈し、遺構内埋土は黄褐色砂質土1層である。主軸方向は東西を示す。

出土遺物（第146図）

遺構内からは数点の遺物しか出土していない。395は土師器杯底部片である。

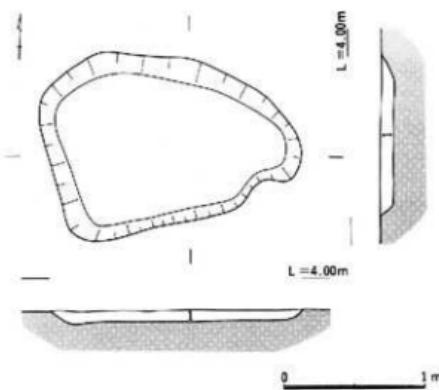
その他、須恵器壺片・製塩土器片が若干出土している。

土坑99（SK1099）（第147図）

1号屋敷地中央西端部（O-17グリッド）土坑98の北側に隣接して検出した不整形な土坑である。土坑の規模は長軸1.78m、短軸1.34m、深さ0.09mを測り、断面形状は浅い皿状を呈する。遺構内埋土は土坑98と同様、黄褐色砂質土1層である。主軸方向は東西を示す。

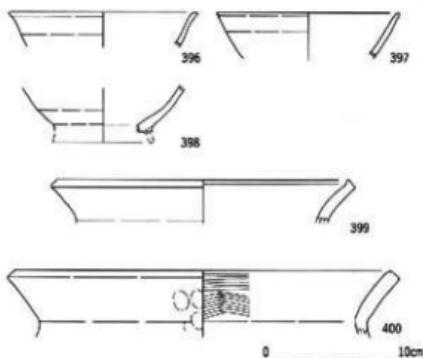
出土遺物（第148図）

396は土師器杯口縁部である。体部は内輪気味に立ち上がり、端部は外方につまみ出す。内外面ともヨコナデ調整である。397は土師器碗口縁部で、体部から直線的に外上方に立ち上がり端部は尖り気味におさめる。398土師器碗底部片で、高台が付くものである。



1 黄褐色2.5Y5/4砂質土

第147図 SK1099実測図



第148図 SK1099出土遺物実測図

399・400は土師器甕口縁部である。399は口径20.8cmを測り、口縁部の形状は外上方に立ち上がり端部上端を若干つまみ上げる。調整は内外面ともヨコナデである。400は口径26.75cmを測るもので、口縁端部の形状は方形状におさめる。調整は外面ヨコナデであるが、ユビオサエの痕跡が残る。内面は幅広のヨコハケ調整である。その他、須恵器壺片が出土している。

土坑105 (SK1105) (第149図)

1号屋敷地中央や北寄り (N-19グリッド) において検出した長方形土坑であるが、溝15によって西側一端が切られている。土坑の規模は長軸1.80m、短軸0.90m、深さ0.08mを測る浅い土坑で、断面形状はレンズ状を呈する。主軸方向はほぼ東西を示す。

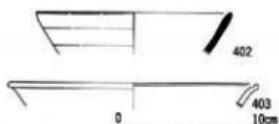
出土遺物 (第150図)

遺構内から数点の遺物しか出土していない。

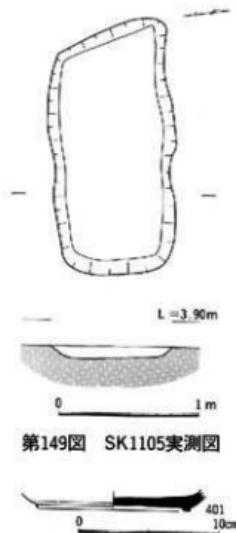
401は須恵器の高台付杯の底部である。高台は断面方形状を呈し、若干凹線状に窪む。その他、黒色土器A類碗片が出土しているのみである。

土坑113 (SK1113) (第151図)

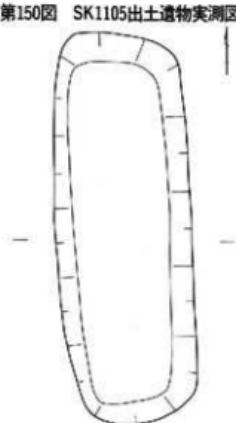
1号屋敷地中央北隅 (J-18グリッド) において検出した長方形土坑である。土坑の規模は長軸2.80m、短軸0.97m、深さ0.02mを測る。断面形状は非常に浅い皿状を呈するが上面を削平されたものと考えられ、遺構内埋土はにぶい黄褐色砂質土である。主軸方向は南北を示す。



第152図 SK1113出土遺物実測図



第149図 SK1105実測図



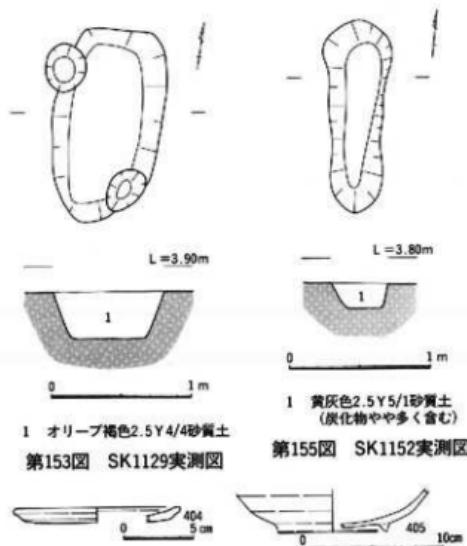
1 にぶい黄褐色10YR5/4砂質土
第151図 SK1113実測図

出土遺物（第152図）

遺構内からは中世遺物も出土しており遺物としては混在している。

402は須恵器杯口縁部である。口縁端部は尖り気味におさめ、調整は内外面ともヨコナデである。

403は赤色塗彩された土師器皿である。口縁部は外反気味に立ち上がり、さらに強く屈曲する。端部は上方へ拡張し、やや尖り気味におさめる。その他、土師器鍋片・瓦器腕片が出土している。



第155図 SK1152実測図
1 黄灰色2.5Y5/1砂質土
(炭化物や多く含む)

第153図 SK1129実測図



土坑129（SK1129）（第153図） 第154図 SK1129出土遺物実測図 第156図 SK1152出土遺物実測図

2号屋敷地中央東寄りにおいて検出した隅丸長方形状の土坑で、土坑128と切り合っている。土坑の規模は長軸1.40m、短軸0.80m、深さ0.24mを測る。断面形状は逆台形状を呈し、遺構内埋土はオリーブ褐色砂質土1層である。主軸方向は南北を示す。

出土遺物（第154図）

遺構内からの出土遺物は細片がほとんどである。

404は土師器皿で比較的浅いものである。口縁部は底部から強いヨコナデにより引き出されたもので、立ち上がりは短く端部は丸くおさめている。

その他の遺物では若干の瓦器腕片など中世遺物も出土しており、時期的には中世に下る可能性もある。

土坑152（SK1152）（第155図）

2号屋敷地西側北隅において検出した不整形な長楕円形の土坑である。土坑の規模は長軸1.38m、短軸0.49m、深さ0.18mを測る。断面形状は逆台形状を呈し、遺構内の埋土は炭化物をやや多く含む黄褐色砂質土である。主軸方向は南北を示す。

出土遺物（第156図）

遺構内からは黒色土器A類碗405と若干の土師器壺片が出土しているのみである。黒色土器A類碗は低い断面三角形状の高台が付くものである。高台径は7.6cmを測る。体部の調整は外外面とも剝離が著しく観取できない。

土坑156（SK1156）（第157図）

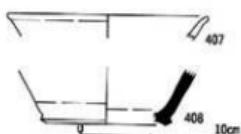
2号屋敷地西側北隅において検出した隅丸長方形の土坑である。土坑の規模は長軸1.74m、短軸0.68m、深さ0.20mを測り、断面形状は逆台形状を呈する。遺構内埋土は黄褐色砂質土1層である。主軸方向は南北を示す。

出土遺物（第158図）

406は土師器杯体底部片である。底部外面は回転ヘラ切り未調整である。体部内外面はヨコナズ調整である。その他、土師器壺口縁部片が出土しているのみである。

土坑157（SK1157）（第159図）

2号屋敷地中央南端（P-10グリッド）において検出した隅丸の長方形状土坑である。土坑の規模は長軸2.06m、短軸1.16m、深さ0.20mを測り、断面形状は浅い逆台形状を呈する。遺構内埋土は炭化物を含むオリーブ褐色砂質土1層である。主軸方向はほぼ南北を示す。時期的には出土遺物から古相を示すが、隣接する土坑群から中世に下る可能性も考えられる。



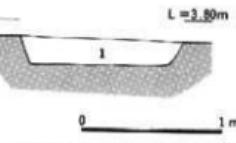
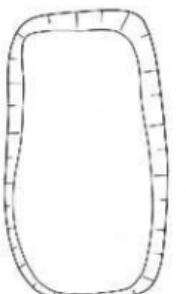
第160図 SK1157出土遺物実測図



第157図 SK1156実測図



第158図 SK1156出土遺物実測図



第159図 SK1157実測図

出土遺物（第160図）

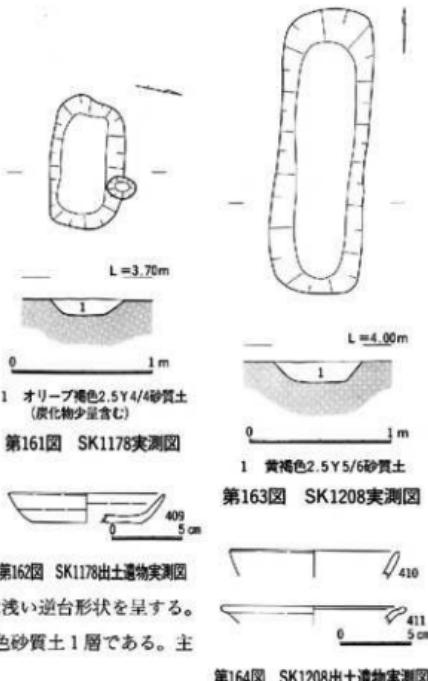
407は土師器杯口縁部である。口縁端部は若干外反し、端部丸くおさめる。調整は内外面ヨコナデである。

408は須恵器壺底部と思われるもので、高台は体部との境に断面方形状を呈し外下方に貼り付けたものである。調整は内外面ともヨコナデである。その他の遺物では土師器片が僅かに出土している。

土坑178（SK1178）（第161図）

2号屋敷地中央部北側（K-9グリッド）において検出した隅丸長方形の小規模な土坑である。

土坑の規模は長軸0.94m、短軸0.54m、深さ0.14mを測り、断面形状は浅い逆台形状を呈する。遺構内埋土は炭化物を含むオリーブ褐色砂質土1層である。主軸方向はほぼ東西方向を示す。



出土遺物（第162図）

遺構内からは土師器杯409と土師器片が出土しているのみである。土師器杯は比較的厚い底部に短い口縁部が外上方に立ち上がるもので、口縁端部は若干方形状におさめる。調整は内外面ともヨコナデ、底部回転ヘラ切り未調整である。胎土は微細な砂粒を多く含む。

土坑208（SK1208）（第163図）

1号屋敷地中央部やや西寄り（R-20グリッド）において検出した長方形の土坑である。土坑の規模は長軸2.04m、短軸0.64m、深さ0.14mを測る浅い土坑である。断面形状は浅い逆台形状を呈し、遺構内の埋土は黄褐色砂質土である。主軸方向は南北を示す。

出土遺物（第164図）

410は土師器杯口縁部で、外面に僅かに赤色塗彩の痕跡が認められる。口縁部は内彎ぎみに立ち上がり、端部は尖り気味におさめる。調整は内外面ともヨコナデである。411は赤色塗彩

された土師器皿口縁部で、強く外反するものである。端部は丸くおさめ内面には沈線が巡る。その他、須恵器杯片・土師器甕片・製塙土器片・須恵質の平瓦片・鉄製品が出土している。

土坑209 (SK1209) (第165図)

1号屋敷地中央部 (Q-20グリッド)において検出した方形状を呈すると考えられる土坑である。土坑の規模は長軸2.30m、短軸は西側隅が削平されているが検出長0.78m、深さ0.14mを測る。断面形状は浅い逆台形状を呈するものと考えられ、遺構内埋土は炭化物を含む黄褐色砂質土である。主軸方向は南北を示す。

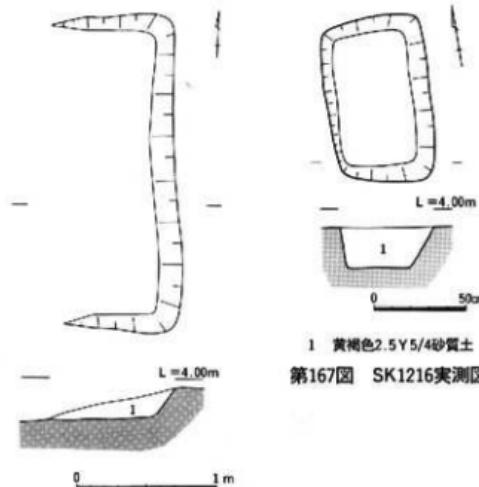
出土遺物 (第166図)

412は内外面とも赤色塗彩された土師器杯口縁部である。口縁部は体部から強く外反し端部は尖り気味におさめる。調整は内外面ともヨコナデである。その他の遺物には黒色土器A類椀片・須恵器壺片・土師器甕片が出土している。

土坑216 (SK1216)

(第167図)

1号屋敷地西寄り (P-21グリッド)において検出した小規模な長方形土坑である。土坑の規模は長軸0.92m、短軸0.58m、深さ0.22mを測る。断面形状はやや深い逆台形状を呈する。主軸方向は南北を示す。

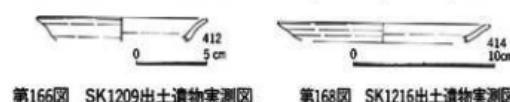


第167図 SK1216実測図

出土遺物 (第168図)

413は土師器椀口縁部で内外面とも赤色塗彩の痕跡が僅かに認められる。口縁端部は尖り気味におさめ、調整は内外面ともヨコナデである。

1 黄褐色2.5Y5/4砂質土(炭化物含む)
第165図 SK1209実測図



第166図 SK1209出土遺物実測図

第168図 SK1216出土遺物実測図

414は土師器皿口縁部である。口縁端部は尖り気味におさめる。調整は内外面ともヨコナデである。

その他、土師器甕片・須恵器壺片が出土している。

土坑219 (SK1219) (第169図)

1号屋敷地中央部やや東寄り (Q-21グリッド) において検出した長方形土坑で、土坑43によって切られている。土坑の規模は長軸2.42m、短軸0.82m、深さ0.34mを測る。断面形状は逆台形状を呈し、遺構内埋土は黄褐色砂質土である。主軸方向は真北よりやや西偏する。

出土遺物 (第170図)

415～418は土師器杯口縁部で、415・416は内外面とも赤色塗彩されている。端部の形態は416が若干外反する他は体部から直線的に外上方へ延びるものである。調整は内外面ともヨコナデである。

419は土師器甕口縁部で体部からやや強く外上方へ屈曲するものである。端部の断面形状は方形状を呈し、上端部を僅かにつまみ上げる。調整は内外面ともヨコナデである。胎土には石英粒と雲母を多く含み、搬入品と考えられる。

その他、須恵器壺底部片・製塙土器片が出土している。

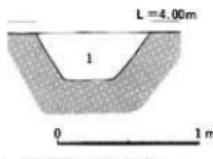
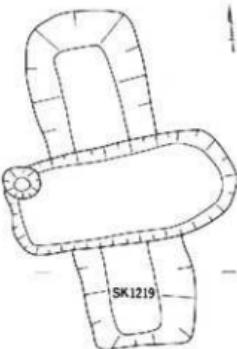
土坑220 (SK1220) (第171図)

1号屋敷地中央南側 (S-18グリッド) において検出した不整形形状を呈する土坑で、土坑90によって切られている。土坑の規模は長軸検出長1.18m、短軸0.98m、深さ0.20mを測る。断面形状は逆台形状を呈し、主軸方向は南北を示す。

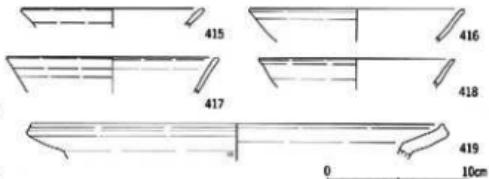
出土遺物 (第172図)

420～424は内外面とも赤色塗彩された土師器杯である。

420・421は体部が外上方に直線的に延び、口縁端部を尖り

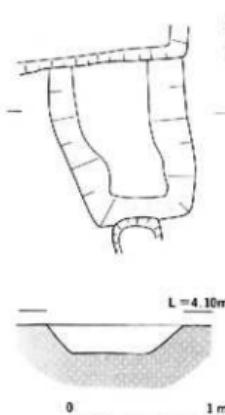


第169図 SK1219実測図

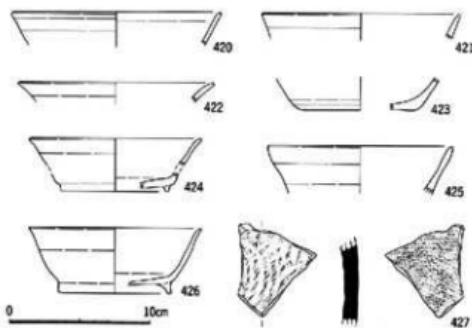


第170図 SK1219出土遺物実測図

氣味におさめるものである。調整は内外面ともヨコナデである。422・424は口縁端部が外反するもので、424は断面方形状の高台が付くものと考えられる。調整は内外面ヨコナデである。423は土師器杯底部で外底面は丁寧なナデによって調整されており、赤色塗彩も外底面にも施されている。425は土師器杯口縁部で端部は僅かに肥厚し、丸くおさめる。調整は内外面ヨコナデで、胎土には石英粒が多く含まれる。426は土師器の高台付杯である。体部は若干内彎氣味に外上方に立ち上がるが、口縁端部は外反し尖り氣味におさめる。高台は若干外にふんばり、断面U字状を呈するものである。調整は内外面ヨコナデ、外底面は丁寧なナデが施されている。胎土には比較的大きな結晶片岩を含んでいる。その他、土師器壺片・須恵器壺・壺片出土している。



第171図 SK1220実測図

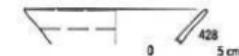


第172図 SK1220出土遺物実測図

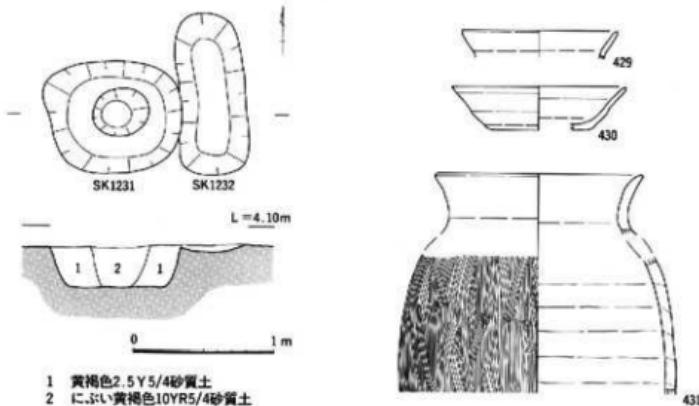
土坑228 (SK1228) 出土遺物 (第173図)

遺構内からは比較的多くの出土遺物があるが、ほとんど細片である。

428は土師器杯口縁部で、口縁部は直線的に外上方に立ち上がり端部を尖り氣味におさめるものである。調整は内外面ヨコナデである。その他、土師器高杯の脚部片・土師器壺・須恵器壺体部片・不明鉄製品が出土している。



第173図 SK1228出土遺物実測図



第174図 SK1231・1232実測図

土坑231・232 (SK1231・1232) (第174図)

1号屋敷地中央東側 (R-20グリッド) において検出した方形土坑である。土坑の規模は長軸0.95m、短軸0.80m、深さ0.28mを測る。土坑の断面形状は逆台形状を呈し、遺構内埋土は褐色系統の砂質土で柱穴状の堆積状況を示す。遺物は柱根状の落ち込みの第2層と、埋土の第1層からの出土に分けられる。土坑232は土坑(SK1231)西側に接して検出した梢円形土坑で、長軸1.16m、短軸0.50m、深さ0.05mを測る浅い落ち込みである。

出土遺物 (第175図)

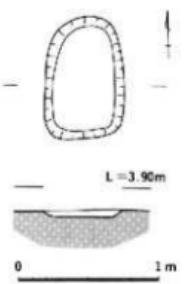
429は内外面とも赤色塗彩された土師器杯口縁部である。口縁部は外上方へ延び端部は丸くおさめる。調整は内外面ヨコナデである。

430は柱穴状の落ち込みから出土したもので、内外面とも赤色塗彩された土師器杯である。体部は底部から外上方へ直線的に延び、口縁端部は尖り気味におさめる。調整は内外面ヨコナデで、外底面は回転ヘラ切り未調整である。

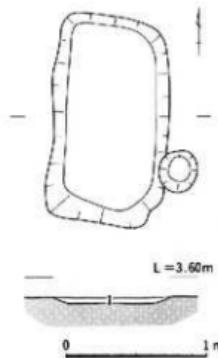
431は長胴形の土師器甕で第1層から出土したものである。口縁部は緩やかに外反し端部を若干尖り気味におさめるものである。調整は外面タテハケ、内面は粘土紐痕が明瞭に残る。時期的にはSX1001(第37図)出土の甕と同形態で、古墳時代後期のものと考えられる。432は土坑232から出土したもので、長胴形の土師器甕の体部片である。調整は外面タテハケ、内部タテヘラケズリである。時期的には431と同時期と考えられる。



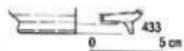
第175図 SK1231・1232出土遺物実測図



第176図 SK1236実測図



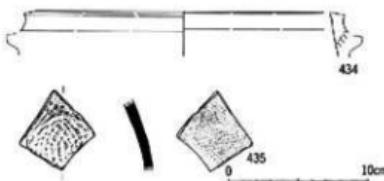
1 オリーブ褐色2.5Y4/4砂質土



第177図 SK1236出土遺物実測図

土坑236 (SK1236) (第176図)

1号屋敷地中央東側 (P-20グリッド)において検出した隅丸方形状の小規模な土坑である。土坑の規模は長軸0.88m、短軸0.56m、深さ0.04mを測る。断面形状は浅い皿状を呈し、主軸方向は南北を示す。



第179図 SK1267出土遺物実測図

出土遺物 (第177図)

遺構内に伴う遺物はごく少量である。433は土師器高台付杯で、内外面とも赤色塗彩されたものである。体部は底部から強く屈曲し、外上方に延びるものと考えられる。高台は断面U字状を呈し、若干外側に開く。調整は内外面ヨコナデで、外底面には回転ヘラ切りの痕跡が残る。その他、土師器臺体部片が出土している。

土坑267 (SK1267) (第178図)

3号屋敷地南側西端 (H-12グリッド)において検出した長方形土坑である。土坑の規模は長軸1.50m、短軸0.84m、深さ0.04mを測る。断面形状は浅い皿状を呈し、遺構内埋土はオリーブ褐色砂質土1層である。主軸方向は南北を示す。

出土遺物 (第179図)

434は土師器釜で、直立する口縁直下に水平方向へ延びる鉤が付くものと考えられる。口縁

部は方形状におさめ、外面の強いナデにより端部を若干外側に拡張する。時期的には新しくなる可能性もある。

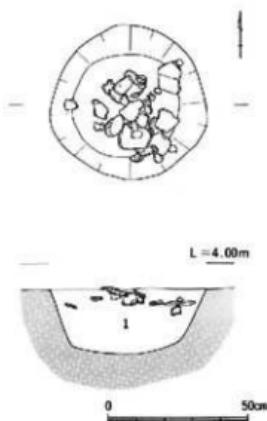
435は須恵器壺体部片である。外面は格子状タタキ後カキメ調整、内面は同心円状の当て具の痕跡が残る。

土坑273 (SK1273) (第180図)

1号屋敷地中央、調査区東端 (P-22グリッド)において検出した製塩土器を一括廃棄した小規模な円形土坑である。土坑の規模のは直径0.56m、深さ0.23mを測り、遺構内埋土は炭化物を多量に含む砂質土である。

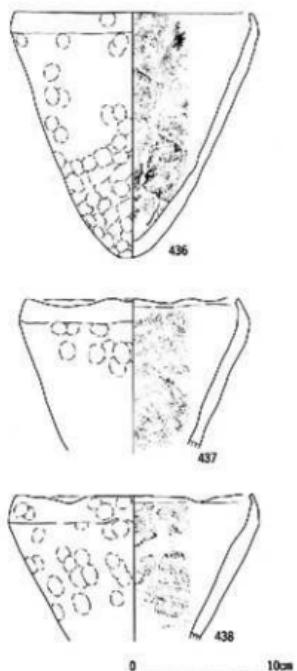
出土遺物 (第181図)

遺構内から出土した製塩土器は3・4個体程度になるものと考えられる。436はほぼ完形に近い形に復元されたもので器高17.6cm、口径14.0cm前後、厚さ1cmを測り、底部は尖底気味である。体部は尖底気味の底部から直線的に外上方に立ち上がり、口縁部は内側に折り込み端部は尖り気味におさめる。調整は外面ユビオサエ、ユビナデが明瞭に残り、内面にはやや細かい織目の布目痕が残る。胎土には石英



1 オリーブ褐色2.5Y4/4砂質土(炭化物やや多く含む)

第180図 SK1273実測図



第181図 SK1273出土遺物実測図

粒・砂粒が多く含まれる。437

は体部上半の破片で、口径15cm前後を測り、形態的には436

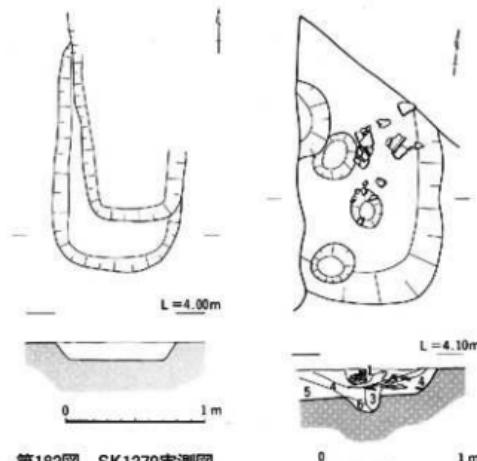
と同形態になるものである。

口縁部は内向させ、端部は尖り気味におさめるのみで整えられていない。調整は外面がユビオサエ、内面には布目痕が明瞭に残る。外面には二次焼成時に生じた色調の変化、表面の剥離が認められる。438

はは体部上半の破片で口縁部及び端部の形状は上記2例と

同様である。内面の布目痕はやや荒い織り目であり、二次焼成時に生じたと考えられる剥離が著しい。胎土には石英粒・砂粒・赤色粒を多く含む。

その他、赤色塗彩された杯片、須恵器片が数点出土している。時期的には9世紀と考えられる。



第182図 SK1279実測図



第183図 SK1279出土遺物実測図

- 1 棕褐色10YR4/4砂質土(炭化物含む)
- 2 黄褐色2.5Y5/5砂質土(炭化物含む)
- 3 にじみ黄色2.5Y6/4砂質土
- 4 にじみ黄色2.5Y6/3砂質土
- 5 暗褐色10YR3/3砂質土
- 6 暗褐色10YR3/4砂質土

第184図 SK1283実測図

土坑279（SK1279）（第182図）

1号屋敷地中央部（P-18グリッド）において検出した長方形を呈すると考えられる土坑で、土坑271によって切られている。土坑の規模は長軸検出長1.60m、短軸0.87m、深さ0.11mを測り、断面形状は逆台形状を呈する。主軸方向はほぼ南北を示す。

出土遺物（第183図）

遺構内からの出土遺物は土師器杯439のみである。体部は底部から緩やかに外上方に立ち上がり口縁端部は若干外反し、丸くおさめる。調整は内外面ヨコナデで、外底面は回転ヘラ切り後ナデである。

土坑283（SK1283）（第184図）

4号屋敷地、調査区北側西隅（P-27グリッド）において検出した土坑で、試掘坑によっ

て切られており約半分のみ検出にとどまった。

土坑は方形形状を呈すると考えられ、検出した規模は長軸2.00m、短軸1.00m、深さ0.32mを測る。断面形状は逆台形状を呈すると考えられるが、底面には柱穴状の落ち込みが4ヵ所認められる。土坑内の埋土は6層確認され、レンズ状の堆積を呈するが第1層と第3層は柱穴の埋土と考えられる。また、第1・2層には炭化物が含まれている。主軸方向はほぼ南北を示す。

出土遺物（第185・186図）

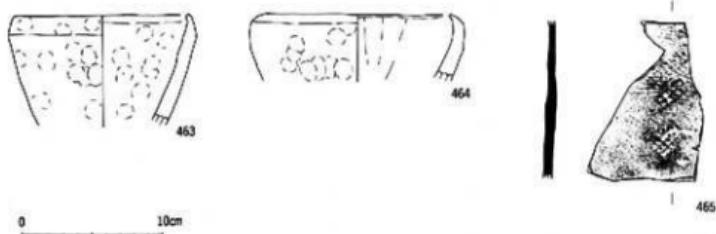
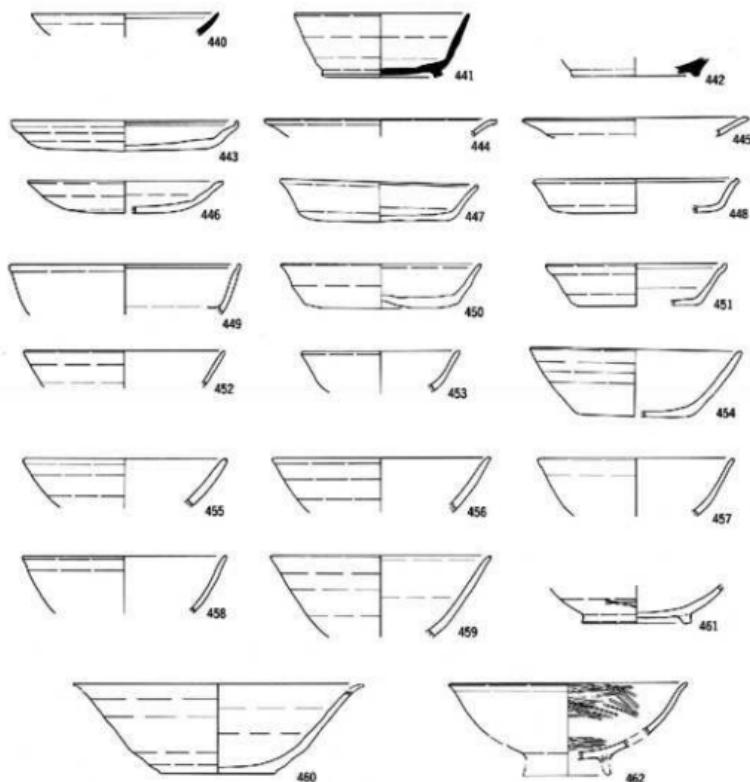
遺構内からは多量の遺物が出土し、第1層の柱穴内に含まれる土器群と土坑の埋土に含まれる土器群に分けられる。若干の時期差があるものと考えられるが、掲載した遺物はほぼ柱穴以外の一括資料として扱っている。

440は京都系の縁袖陶器の皿口縁部と考えられる。口縁部は内嚙気味に立ち上がり端部は尖り気味におさめる。焼成は軟質で、うすい緑色の釉がかかる。調整は内外面ともヨコナデで、口縁部内面に弱い沈線が巡る。

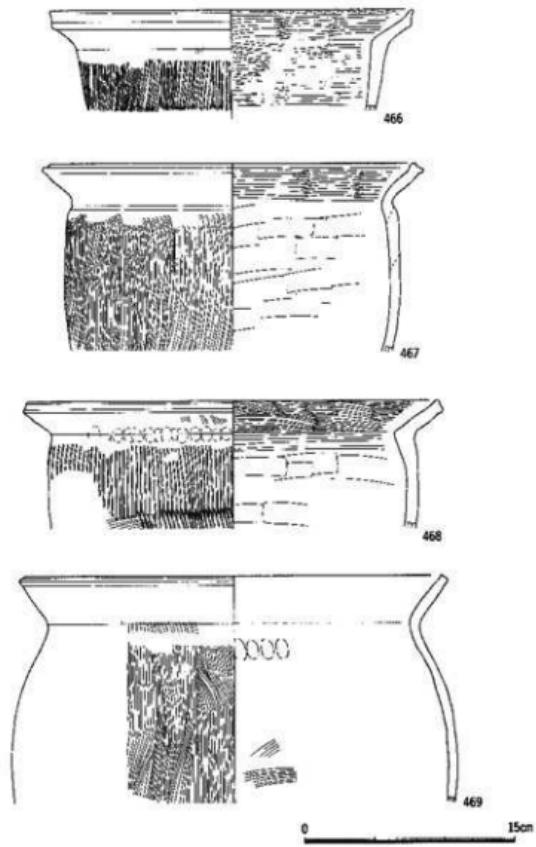
441・442は須恵器高台付杯である。441は口径12.5cmを測るもので、体部は直線的に外上方に延び、端部は尖り気味におさめる。高台は断面方形を呈し、短くハの字状に開く。調整は内外面ヨコナデ、外底面は回転ヘラ切り未調整である。焼成はやや軟質である。442は断面形状を呈する高台部である。焼成は硬質である。

443～446は土師器皿である。443は全面が赤色塗彩されたもので口径16.2cmを測る。口縁部は短く外方に立ち上がり、端部は上方に強く拡張し尖り気味におさめている。調整は内外面ともヨコナデで、外底面はナデ調整である。444・445は内外面とも赤色塗彩されている。口縁部は水平方向に屈曲し444の内面には弱い沈線が巡る。端部は尖り気味におさめている。調整は内外面ともヨコナデである。胎土は精良である。446は若干深い土師器皿で、体部はやや内嚙気みに立ち上がり口縁端部は丸くおさめる。外底面は丁寧なナデ調整である。胎土は精良である。

447～451は赤色塗彩された土師器杯で形態的には体部が外方に立ち上がり、口縁部が若干外反し450以外は端部を上方に拡張するものである。447・448は器高がやや低いもので、調整は内外面ヨコナデ、外底面は回転ヘラ切り後丁寧なナデである。449は体部が底部より直立気味に立ち上がるもので、口縁端部の上部への拡張が明瞭で、口唇部内面には沈線が巡っている。450は体部が底部よりやや開き気味に立ち上がり口縁端部はそのまま丸くおさめる。外底面は回転ヘラ切り未調整で、ナデ調整せずに赤色塗彩されている。体部内外面はヨコナデ調整である。451は口径12.1cmを測る若干小さい土師器杯である。体部は外方に直線的に延び、口縁部は屈曲し端部は上方に拡張する。赤色塗彩は全面に施されており、胎土には粒子



第185図 SK1283出土遺物実測図 (1)



第186図 SK1283出土遺物実測図 (2)

の大きい結晶片岩が含まれている。

452・453は土師器杯口縁部である。体部を直線的に成形し、口縁端部を尖り気味におさめ、やや口径の大きいものと内縫気味で端部を丸くおさめ口径の小さいものに分類できる。

454~460は深い杯形を呈するもので、口径・形態から4種類に分類される。454・455・456は口径15cm前後を測り、体部から口縁端部にかけて直線的におさめるもの。457・458は口径14cm前後で体部は内縫気味に立ち上がるタイプ。形態的には453もこのタイプである。459は口径15.6cmを測りやや深いタイプである。460は口径20cm前後の測るものと考えられるものである。体部は若干外反気味に立ち上がる。調整は全て内外面ともヨコナデである。

461は内外面とも赤色塗彩された高台付土師器杯で器形的には椀形を呈するものと考えら

れる。調整は内外面ヨコナデで、部分的に横方向の分割ミガキが認められる。底部は回転ヘラ切り後丁寧なナデで、断面形状の低い高台が付く。

462は黒色土器A碗類で器高が低く杯の範囲で捉えられるものである。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁端部は外反させるものである。外面はヨコナデ調整、内面には綿密なミガキが施されている。

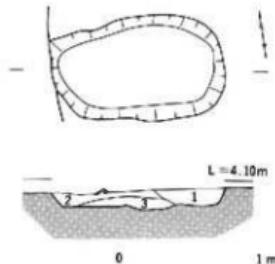
463・464は製塙土器で土坑273(SK1273)出土のものと同形態を示すものである。器厚は1.0cm前後を測る比較的厚いもので、胎土には5mm前後の砂粒を多く含む。463には吹きこぼれの痕跡が残る。

466～469は土師器甕で、口縁端部を上方に拡張するタイプ(466・467)と、口縁部を方形状におさめるタイプ(468・469)に分類される。体部の調整は外面荒いタテハケであるが内面は466・469がヨコハケ後ナデ調整、467・468が横方向への板ナデ調整である。胎土には砂粒・結晶片岩を多く含むが、466は焼成が堅致で角閃石を含むことから搬入品と考えられる。

時期的には9世紀代の年代が与えられる。

土坑285 (SK1285) (第187図)

3号屋敷地、調査区北側西隅(Q-26グリッド)において検出した楕円形の土坑で、土坑の規模は長軸1.24m、短軸0.76m、深さ0.18mを測る。土坑の断面形状は浅い逆台形状を呈する。遺構内の埋土は3層に分層され、鉄分を含む褐色系統の砂質土である。第1層は別遺構の可能性がある。主軸方向は東西を示す。



出土遺物 (第188図)

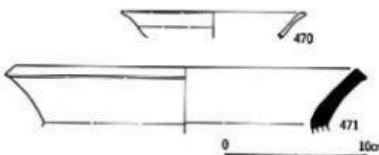
470は内外面とも赤色塗彩された土師器杯口縁部である。口縁端部は強く外方に屈曲させ尖り気味におさめる。調整は内外面ともヨコナデである。

471は須恵器甕口縁部である。口縁部は緩やかに外反しながら立ち上がり、端部は若干下方に拡張させる。

その他、土師器甕片が出土している。

- 1 嘘褐色10YR3/4砂質土(土器片含む)
- 2 褐色10YR4/4砂質土(土器片、炭化物含む)
- 3 にひい黄褐色10YR5/3砂質土(土器片含む)

第187図 SK1285実測図



第188図 SK1285出土遺物実測図

土坑287 (SK1287) (第189図)

3号屋敷地、調査区北側西寄りにおいて検出した不整形な土坑で柱穴によって2ヵ所切られている。土坑の規模は長軸1.00m、短軸0.76m、深さ0.18mを測り、断面形状は底面が段を持つ不整な逆台形状を呈する。遺構内埋土は1層で炭化物を含む砂質土である。主軸方向はほぼ南北を示す。



出土遺物 (第190図)

472・473は土師器杯口縁部で端部を丸くおさめるタイプ472と、尖り気味におさめるタイプ473である。調整は内外面ともヨコナデである。

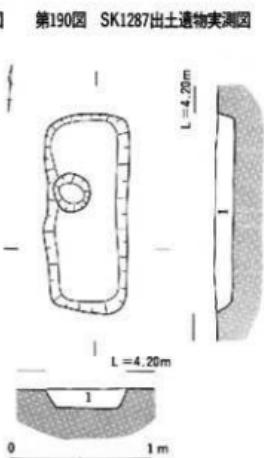
474は土師器の窓片と考えられるものである。外面は荒いタテハケ、内面は板ナデ調整である。外面には接合痕が認められる。

その他、土師器窓片・須恵器窓片が出土している。

土坑288 (SK1288) (第191図)

3号屋敷地、調査区北側西隅において検出した長方形土坑である。

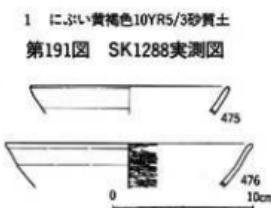
土坑の規模は長軸1.44m、短軸0.60m、深さ0.14mを測り、断面形状は浅い逆台形状を呈する。遺構内埋土は鉄分を含む砂質土1層である。主軸方向は南北を示す。



出土遺物 (第192図)

475は内外面とも赤色塗彩された土師器杯で、口縁端部は丸くおさめる。

476は内外面とも赤色塗彩された土師器碗と思われる口縁部で、端部は若干外反し丸くおさめる。調整は外面ヨコナデ、内面は綿密な細かい横方向へのミガキが施されている。



第192図 SK1288出土遺物実測図

土坑289 (SK1289) (第193図)

3号屋敷地、調査区北側西寄り (Q-27グリッド)において検出した楕円形土坑で、一部柱穴によって切られている。土坑の規模は長軸1.54m、短軸0.66m、深さ0.12mを測る。断面形状は西側の掘り方が東側より浅く2段状を呈する。遺構内埋土は鉄分を含む褐色砂質土で、遺物は主に西隅からの出土である。主軸方向は東西を示す。

出土遺物 (第194図)

477は土師器皿でほぼ完形である。体部は底部から外上方に立ち上がり、口縁部は若干外反する。調整は内外面ヨコナデで、外底面は回転ヘラ切り後弱いナデ調整が施されている。

478はほぼ完形の高台付皿で、皿口縁部は底部から小さくひねり出された程度である。端部は丸くおさめる。高台は断面方形で端部を外方に僅かに拡張する。調整は内外面ともヨコナデである。

時期的には高台付皿などから10世紀後半代と考えられる。

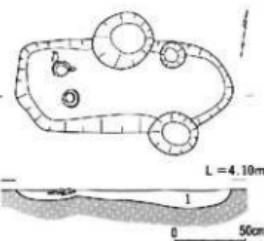
土坑304 (SK1304) (第195図)

3号屋敷地、調査区西側北隅 (P-27グリッド)において検出した不整形な土坑で、北側約半分程度が調査区外に延びるものと考えられる。

検出した土坑の規模は長軸1.76m、短軸0.80m、深さ0.30mを測る。土坑の断面形状は逆台形状を呈し、遺構内埋土は炭化物を含む砂質土で3層に分層されるが、第1層は柱穴1181の埋土である。

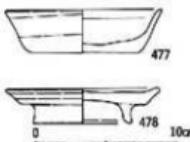
出土遺物 (第196図)

479は内面に赤色塗彩された土師器皿で、口径約14.0cmを測る。口縁部は大きく外反し、端部は肥

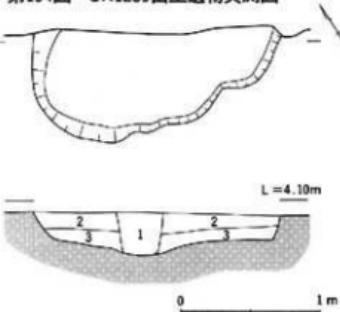


1 褐色10YR4/4砂質土(マンガン少量含む)

第193図 SK1289実測図

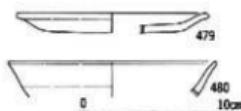


第194図 SK1289出土遺物実測図



- 1 オリーブ褐色2.5Y4/4砂質土
(土器片、炭化物含む、SP. 1181)
2 褐色10YR4/4砂質土(土器片、炭化物少量含む)
3 黄褐色2.5Y5/4砂質土(炭化物少量含む)

第195図 SK1304実測図



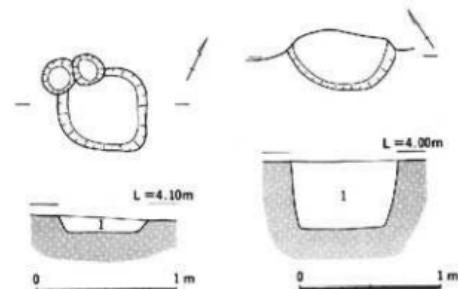
第196図 SK1304出土遺物実測図

厚し丸くおさめている。胎土には比較的大きい結晶片岩粒が含まれている。

480は内外面赤色塗彩された土師器杯で、口縁端部は若干上方に拡張し丸くおさめ、内面には弱い沈線が巡る。その他、土師器甕片・製塩土器片が出土している。

土坑319 (SK1319) (第197図)

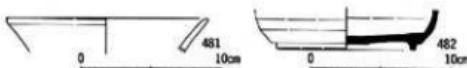
3号屋敷地、西側北隅 (P-28グリッド)において検出した隅丸方形状の小規模な土坑である。



第197図 SK1319実測図

1 明黄褐色10YR6/6砂質土
(炭化物含む)

第199図 SK1320実測図



第198図 SK1319出土遺物実測図 第200図 SK1320出土遺物実測図

土坑の規模は長軸0.64m、短軸0.58m、深さ0.12mを測る。断面形状は浅い逆台形状を呈し、遺構内埋土は明黄褐色砂質土1層である。

出土遺物 (第198図)

遺構内からの遺物は数点のみである。481は土師器杯口縁部で、端部は尖り気味におさめる。調整は内外面ともヨコナデである。

その他、土師器甕片・須恵器壺片が出土している。

土坑320 (SK1320) (第199図)

3号屋敷地中央部、調査区北隅において検出した土坑で、主体は調査区外に延びる。検出した土坑の規模は長軸0.76m、短軸0.40m、深さ0.48mを測る。掘り方は検出面より垂直に掘り込まれており底面は平坦面を形成している。遺構内埋土は炭化物を含むオリーブ褐色砂質土1層である。

出土遺物 (第200図)

482は須恵器の高台付杯で、高台は断面方形状を呈する。調整は内外面回転ヨコナデ、外底面回転ヘラ切り未調整である。

その他、製塩土器片が出土している。

不明遺構

不明遺構 5 (SX1005)

1号屋敷地中央 (O-21・22グリッド)において検出した幅4m前後、深さ0.10m程度の不整形な浅い落ち込みで、明確な掘り方はみられない。埋土は明らかに遺構面の堆積土とは違った黒褐色系統の砂質土の混入がみられ、また土器片を包含することが認められた。浅い落ち込み内には中世の土坑234が掘り込まれていることから、堆積土は中世以前と考えられる。

出土遺物 (第201図)

出土遺物には瓦器腕片・土釜片など中世遺物も若干認められる。

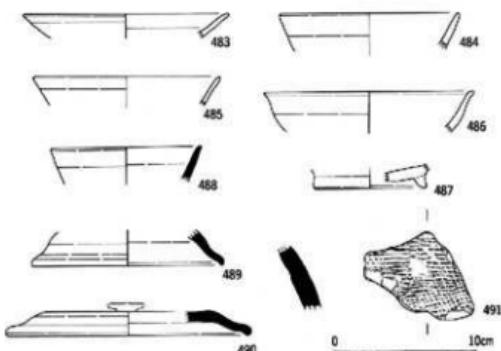
483～485は土師器杯口縁部であり、484には内外面赤色塗彩が認められる。

486は土師器の腕口縁部と考えられるもので、口縁端部は外反する。また、487は土師器腕高台部で、断面形状はやや厚めでU字状を呈する。

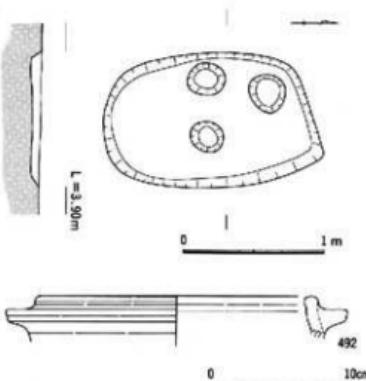
488は須恵器杯口縁部で端部は尖り気味におさめる。

489・490は須恵器杯蓋で宝珠つまみが付くものと思われる。489は器高が高く天井部は丸みを呈するものと考えられる。490は器高が低く天井部は平坦になるものである。口縁端部は屈曲し下方に拡張し丸くおさめる。

491は須恵器壺の体部片である。外面は平行タタキ、内面はナデ調整である。焼成はやや軟質で、外面は黒色を帯びる。中世に下る可能性も考えられる。



第201図 SX1005出土遺物実測図



第202図 SX1006実測図・出土遺物実測図

不明遺構 6 (SX1006) (第202図)

2号屋敷地中央 (M-11グリッド) において検出した長軸1.50m、短軸0.96m、深さ0.07mを測る梢円形状を呈した土坑状の落ち込みである。遺構内には柱穴状の落ちが3箇所確認できる。

出土遺物

遺構内からの出土遺物は土師器釜口縁部492のみである。口縁部はやや丸くおさめ、内端部を内側に若干拡張する。鍔は口縁直下から水平方向に貼り付け、端部は方形状におさめる。

不明遺構 7 (SX1007)

1号屋敷地ほぼ中央部 (P-18・19グリッド) において検出した不整形な落ち込みであるが、北辺と西辺および南側の一部には直線的な掘り方のプランが確認でき方形状を呈する可能性が考えられる。西側で確認できた1辺の長さは4.70m前後、深さは0.15m前後である。落ち込み内の堆積土は黄褐色砂質土で、時期的には中世以前の自然堆積層と考えられる。この自然堆積層除去後に土坑50・53・59が確認された。

出土遺物 (第203・204図)

落ち込み内からは多量の遺物が出土し、ほとんどが古代に属する遺物である。

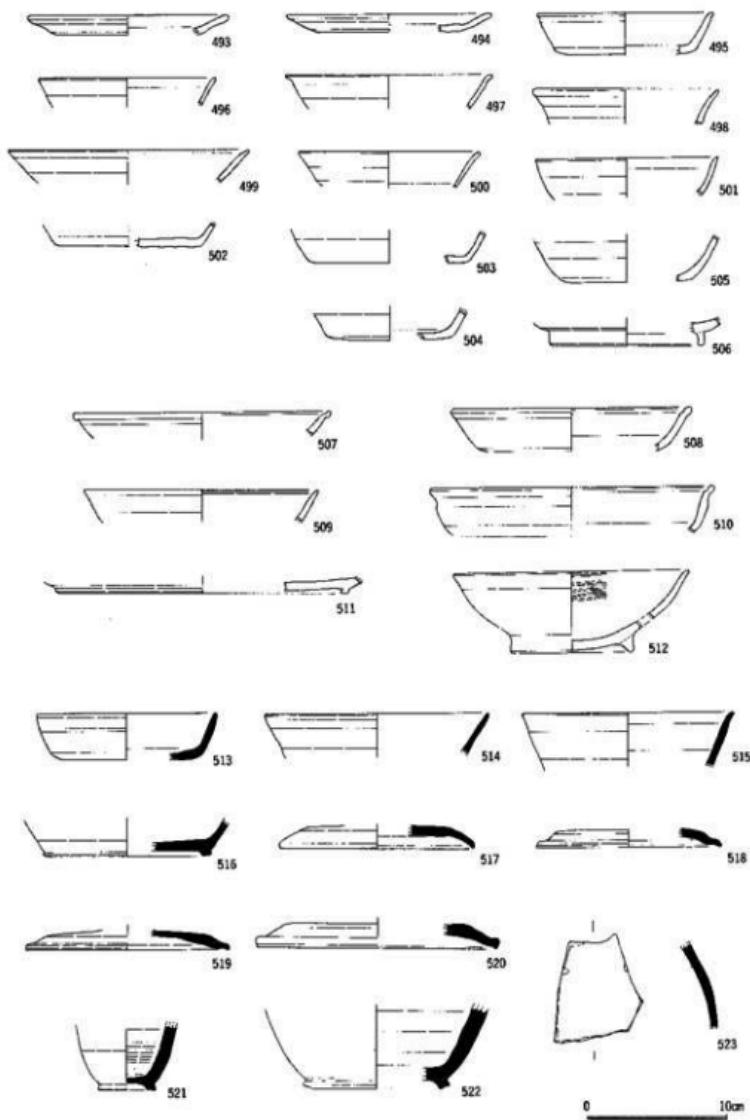
493・494は土師器皿で493は内外面、494は外面のみ赤色塗彩されている。口縁端部は丸くおさめ、調整は外面ともヨコナデである。

495~499は赤色塗彩された土師器杯口縁部で、499以外口径が12cm~14cmに治まる。口縁端部を直線的に終わらせるタイプ496と、外反させるタイプ495・497と若干外反させ僅かに上方につまみ上げるタイプ498・499に分けられる。500・501は土師器杯で口径14cm前後を測る。502~505は赤色塗彩された土師器杯体・底部である。506は高台付杯の高台部で体部内外面は赤色塗彩されている。

507~509は口径16cm~18cmを測る大型の土師器杯で、内外面とも赤色塗彩されている。507・508の口縁部は外上方に屈曲し端部を上方に拡張するものである。510は口径20cmを測る土師器杯口縁部で端部は屈曲し上方に僅かに拡張する。511は大型の土師器杯の高台部で内外面とも赤色塗彩されている。

512は黒色土器A類楕で、高台は断面U字状を呈し、底径8.8cmを測る。体部は外上方に立ち上がるが、浅い形態を示すものと考えられる。調整は外面ヨコナデ、内面綿密な横方向へのミガキが施されている。

513~516は須恵器杯で高台を有しない513と高台を有するもの516がある。口縁部の形状は



第203図 SX1007出土遺物実測図 (1)

直線的におさめるものと端部を若干外反させるタイプがある。高台は断面方形状を呈し、体部との境に貼り付けている。外底面は回転ヘラ切り後ナデ調整である。

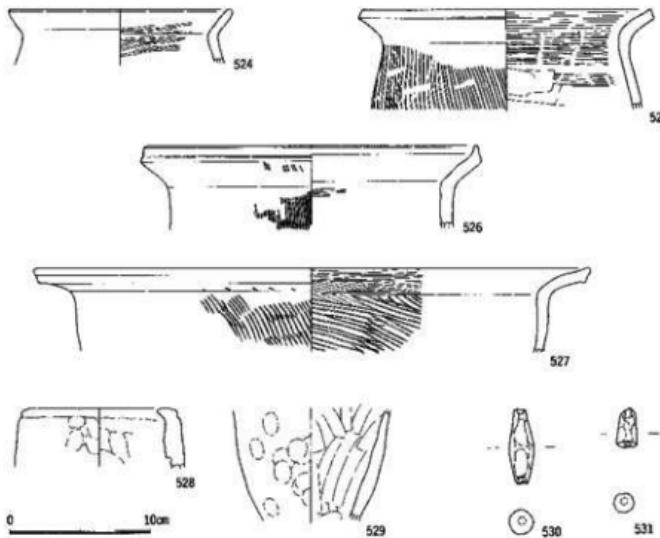
517～520は須恵器杯蓋で天井部につまみが付くものと考えられる。口縁端部の形状は屈曲せずに端部を形成する517と、口縁部が屈曲し端部を形成するもの518～520に分けられる。端部は何れも尖り気味におさめる。

521は須恵器短頸壺で断面方形状の高台が付くものである。外面には自然釉がかかる。522は須恵器壺の体底部である。底部には断面方形状の高台が若干ふんばる形で貼り付けられている。調整は外面下位部は回転ヘラケズリ、内面は回転ヨコナデ調整である。523は須恵器壺体部片で、外面には自然釉がかかる。

524は黒色土器の壺で、内面のみ黒色処理されている。口縁部は内彎気味に立ち上がり、端部は丸くおさめられている。調整は外面ヨコナデ、内面ヨコ方向のミガキが施されている。

526～527は土師器壺である。525は口縁端部を方形状に、526は口縁端部を上方に拡張するものである。527は口径39.7cmを測る大型のもので、口縁部は大きく外反し、端部を下方に拡張する。調整は何れも外面荒いタテハケ、内面ヨコハケ525・527、ヨコナデ526である。

528・529は製塙土器である。形態は底部尖底気味になる砲弾形を呈するものである。口縁



第204図 SX1007出土遺物実測図 (2)

端部は内面に折り込み尖り気味におさめる。調整は外面ユビオサエ、内面縦方向の強い板ナデである。530・531は土師質の管状土鉢である。

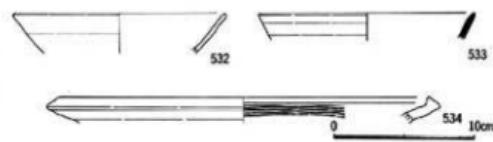
不明遺構8 (SX1008)

1号屋敷地中央東寄り (Q-22グリッド) において検出した不整形な落ち込みで、深さ0.10mを測る。落ち込みは土坑39・40によって切られている。

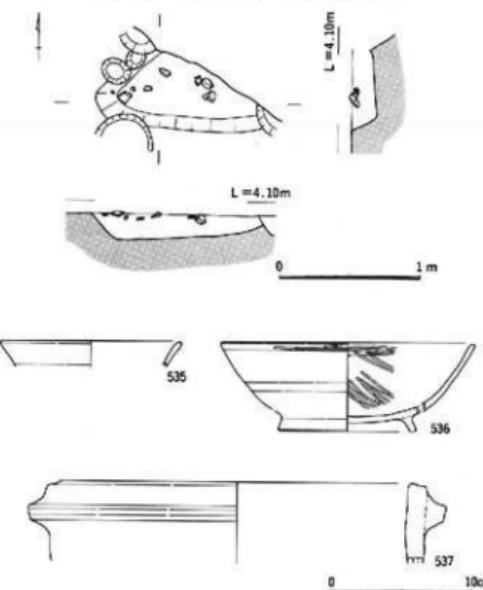
出土遺物 (第205図)

532は土師器杯口縁部で、内面に赤色塗彩が認められる。口縁部は外上方に立ち上がり端部は丸くおさめる。533は須恵器杯口縁部である。口縁端部は尖り気味におさめる。

534は土師器甕口縁部で、口縁部は内上方に拡張する。調整は外面ヨコナデ、内面荒いヨコハケ調整である。



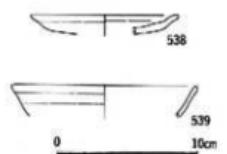
第205図 SX1008出土遺物実測図



第206図 SX1011実測図・出土遺物実測図

不明遺構11 (SX1011) (第206図)

3号屋敷地、調査区西側北隅 (Q-28グリッド) において検出した土状を呈する落ち込みで、北側は調査区外に広がる。断面形状は逆台形状を呈すると考えられ、深さ0.18mを測る比較的しっかりした掘り方をもつ。



第207図 SX1012出土遺物実測図

出土遺物

535は土師器杯口縁部である。口縁部は外反し端部は若干肥厚させる。

536は土師器碗で内外面とも赤色塗彩されている。口縁部は内側気味に立ち上がり、端部はやや肥厚させ尖り気味におさめる。底部には断面U字状を呈する高台が貼り付けられている。調整は外面強いヨコナデで、口唇部には数状のミガキが施されている。内面は横方向のミガキ、内底面には平行状のミガキが施されている。

537は土師器釜で、口縁部直下から水平方向に延びる短い鶴が貼り付く。口縁部は直立し、方形状を呈する。上端面には弱い凹線が巡る。調整は内面ヨコナデである。

時期的には10世紀代と考えられる。

不明遺構12 (SX1012)

3号屋敷地中央北寄り (S-31グリッド)において検出した方形状のプランを呈する浅い落ち込みである。規模は長軸3.24m、短軸2.84m、深さ0.10mを測る。

出土遺物 (第207図)

538は土師器皿で口縁部は強く外反し、端部は丸くおさめる。調整は内外面ともヨコナデである。539は土師器杯口縁部である。体部は直線的に外上方に延び、端部は尖り気味におさめる。内外面ともヨコナデ調整である。

その他、土師器要片、須恵器要片が出土している。

第二期 (鎌倉時代以降)

掘立柱建物

第一遺構面での中世における掘立柱建物は27棟を検出した。時期的にはI期と同様に柱穴に伴う遺物が僅少であるため、明確な時期決定はしがたいもののその中で遺物などから確實に時期決定できる建物についてはその建物のもつ方向性を時期的な特性と捉え、他の掘立柱建物はその比較の上で建物の時期分類を試みた。

第二期については2時期に分類し、II-①期 (13世紀代) は11棟、II-②期 (14世紀以降) は16棟を整理した。

II-①期

掘立柱建物1 (SB1001) (第208図)

1号屋敷地、調査区西側南において検出した掘立柱建物で南西隅が掘立柱建物3 (SB1003)

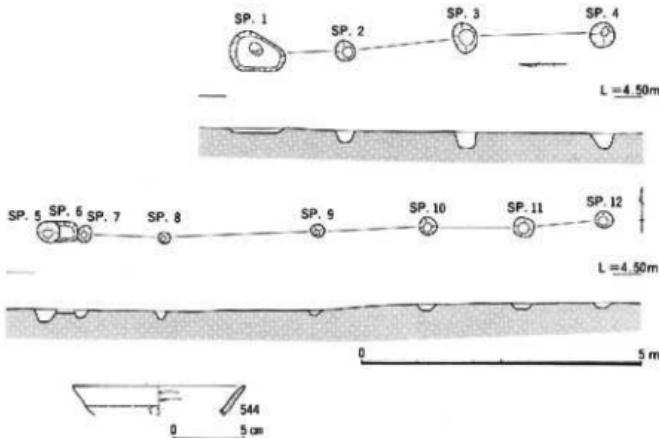
と切り合い関係にある。建物の規模は検出された掘立柱建物の中で最大の規模をもち、桁行5間(11.46m)×梁間2間(4.43m)、床面積50.45m²を測る純柱建物で、南側に半間の廊が3間分にわたり付設されている。柱間は桁行・梁間とも2.30m前後でほぼ統一されている。東側1間分は土間と考えられる。柱穴はほぼ円形状で柱穴内には砂岩の根石を伴うものが見られる。主軸方向はN84°Eを測る。埋土はオーリーブ褐色系統の砂質土で、SP 1・2・3・8・12・18には炭化物が少量含まれる。

出土遺物

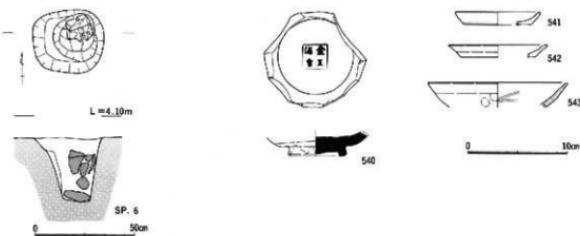
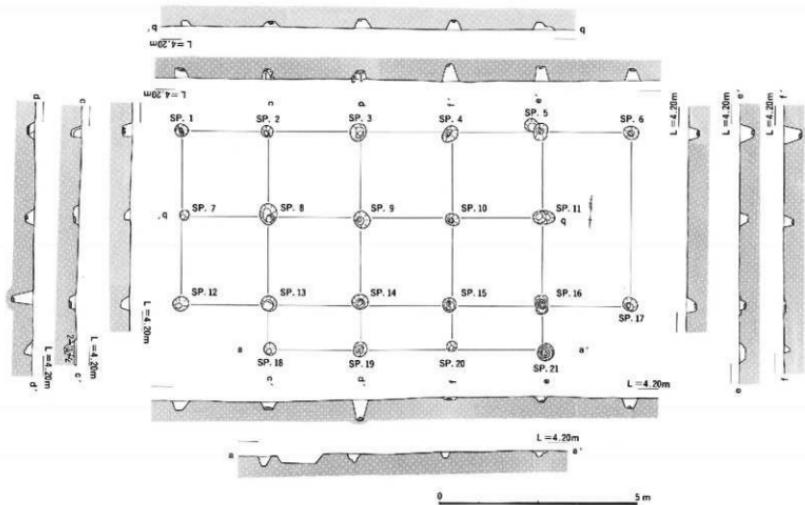
柱穴からは比較的多くの土器片が出土している。540はSP-6から出土した龍泉窯系の青磁碗で内面見込みに「金玉満堂」の刻印が見られる。541・542は土師質土器小皿片である。形態は514が口縁部を内灣気味におさめるタイプ、542は外反気味におさめるタイプである。調整は外面ヨコナデで、底部切り離しは回転余切りになるものと考えられる。543は和泉型瓦器椀でIII-2期のものと考えられる。外面口縁部はヨコナデ調整、体部はユビオサエが顕著に見られる。内面はヨコ方向へのミガキが部分的に観取される。時期的には出土遺物などから13世紀中頃と考えられる。

柵列1 (SA1001) (第209図)

掘立柱建物1 (SB1001) に伴う柵列遺構である。柵列は建物の南側から西側にL字状に巡



第209図 SA1001実測図・柱穴出土遺物実測図



第208図 SB1001実測図・柱穴出土遺物実測図

るもので、規模は南側5間（約10.0m）、西側3間（約6.0m）を測る。

掘り方は比較的浅く遺物もほとんど出土していないが、西側柵列SP2より和泉型瓦器碗544が出土しており時期的にはIII-2段階を示すものである。調整は外面ヨコナデ、体部にはユビオサエの痕跡が認められる。内面はヨコ方向へのヘラミガキである。

柵列2 (SA1002) (第210図)

掘立柱建物1 (SB1001) に伴うものと考えられる柵列で、柵列1 (SA1001) の西側に平行して検出した。主軸方向はほぼ南北を示す。柵列の規模は4間分を検出し、ほぼ2.5m間隔である。柱穴の埋土は褐色系統の砂質土で、SP1・4には少量の炭化物を含む。

柱穴内からの出土遺物はSP4から土師質土器小皿545が1点出土している。また、SP3からは土師質土器杯547とIII-2段階の和泉型瓦器碗548・549が出土した。瓦器碗の調整は外面口縁部ヨコナデ、体部は外面ユビオサエが残り、内面には圓線状のヘラミガキで549の内面見込み部には連結輪状のミガキが施されている。その他、SP2からは土師器片が出土している。

柱穴1・2・3は柵列3 (SA1003) の柱穴2・3と対応し、掘立柱建物になる可能性がある。

柵列3 (SA1003) (第211図)

掘立柱建物 (SB1001) に伴うと考えられる柵列で、柵列 (SA1002) の西側に平行する。

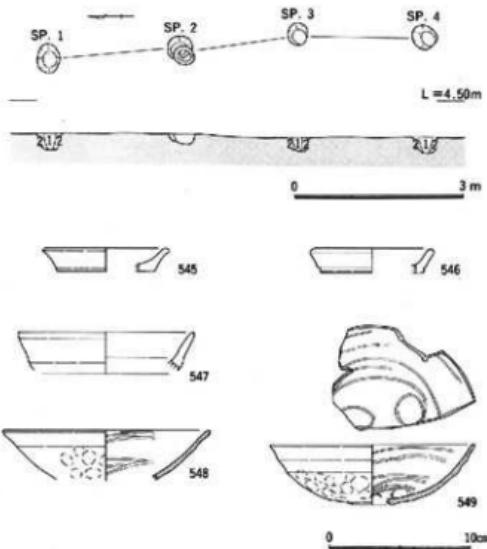
主軸方向はほぼ南北を示し、柵列の規模は3間ないし4間で検出長14.0mを測る。SP2・3・4の埋土には炭化物を少量含む。

柱穴に伴う遺物はSP4から和泉型瓦器碗550が、SP2からは土師質土器杯が出土している。

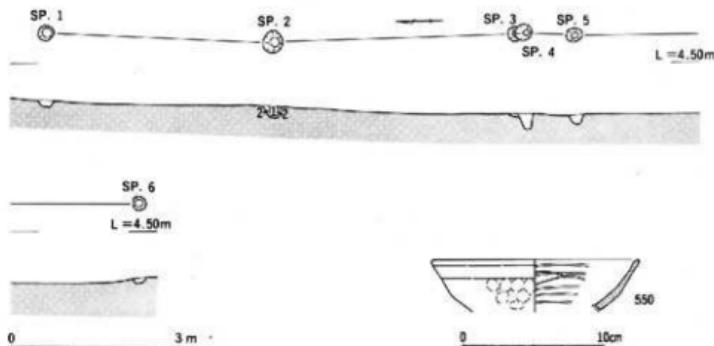
掘立柱建物17 (SB1017)

(第212図)

1号屋敷地、調査区北東



第210図 SA1002実測図・柱穴出土遺物実測図



第211図 SA1003実測図・柱穴出土遺物実測図

隅において検出した東西棟の掘立柱建物で、掘立柱建物15・20 (SB1015・1020) と切り合い関係にある。建物の規模は桁行3間 (6.28m) × 梁間2間 (4.46m)、床面積は30.8m²を測る。柱間は桁行2.20m～2.26m・梁間2.00m～2.30mを測り東側桁行1間幅が若干長い。柱穴内の埋土はオリーブ褐色砂質土が主で、SP 2・6・7・8には炭化物を少量含んでいる。主軸方向はN 89°Wを測る。

柱穴内に伴う遺物はSP 2・8・10・14から土師質土器杯片、SP 9からは東播系と思われる須恵質土器のこね鉢片が出土している。

柵列8 (SA1008) (第213図)

掘立柱建物17 (SB1017) に伴うと考えられる柵列である。SA1008は建物の北側から西側にほぼ平行して逆L字状に延びるもので、建物と西側の柵列との間には約5.0mの空間が存在する。柵列の規模は北側約10.50m・西側9.0mを測る。柱穴内に伴う遺物は、SP 2より凝灰岩製の砥石551が出土している。その他、SP 9からは土師質土器杯片・須恵器片が出土している。

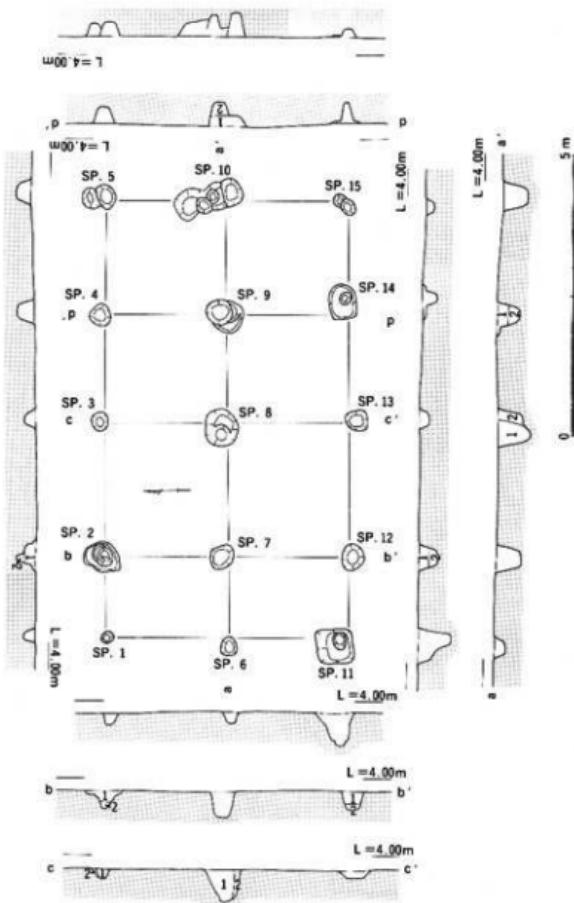
柵列12 (SA1012) (第214図)

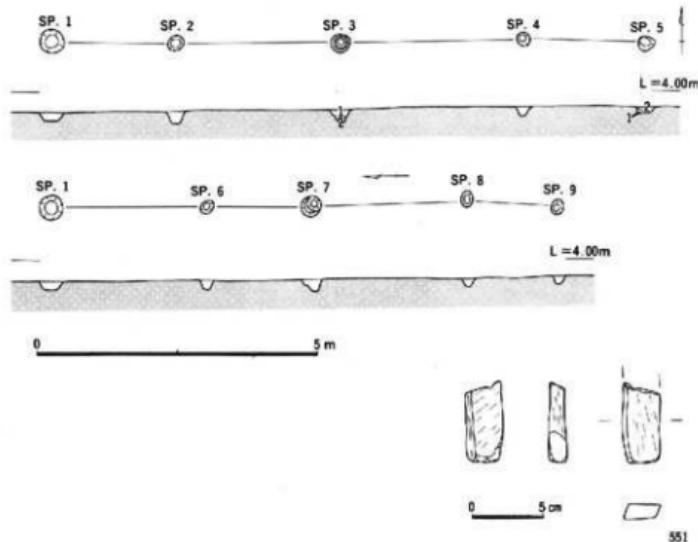
SA1012は建物の南側約6.0mの位置にほぼ平行して東西に延びる柵列である。位置的に離れすぎているため屋敷の区画を示す可能性もある。柵列の規模は約15.0mを測り、柱穴内からはSP 6より底部回転糸切りの土師質土器小皿552が出土している。

掘立柱建物23 (SB1023) (第215図)

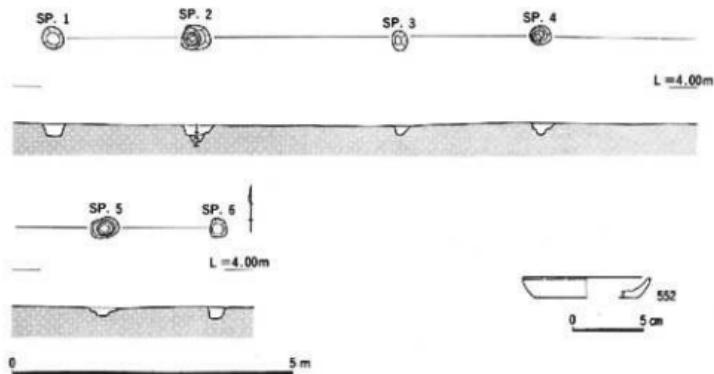
1号屋敷地調査区南東隅において検出した掘立柱建物で、掘立柱建物25 (SB1025) と切り

第212図 SB1017実測図





第213図 SA1008実測図・柱穴出土遺物実測図



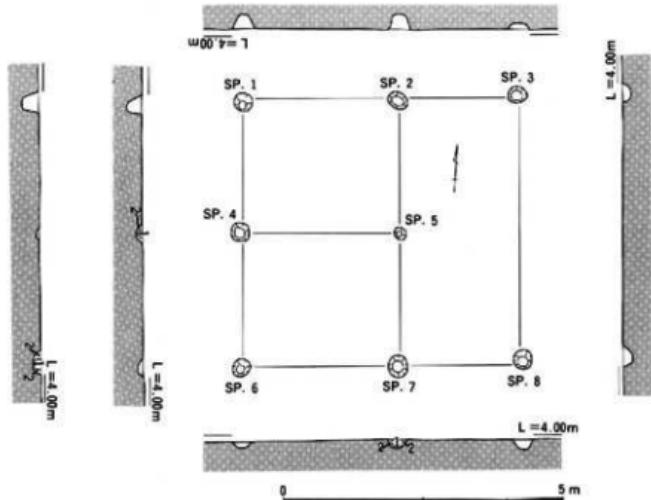
第214図 SA1012実測図・柱穴出土遺物実測図

合う。建物の規模は桁行2間(5.08m)×梁間2間(4.75m)を測る。東側1間は土間になる可能性が考えられ、床面積は23.51m²を測る。柱穴内の埋土は褐色系統の砂質土である。主軸方向はN 3°Wを測る。

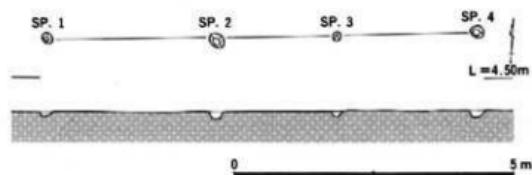
出土遺物は図示できるものはないが、SP 5・8より土師質土器杯片が出土している。

柵列13 (SA1013) (第216図)

掘立柱建物23 (SB1023)に伴うと考えられる柵列で、建物の北側にほぼ平行して東西に延びる。柵列の規模は3間(7.5m)を測り、柱穴間は3.0m～2.2m前後である。

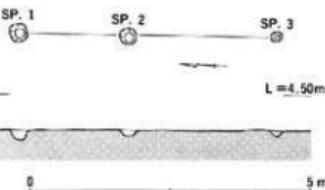


第215図 SB1023実測図



第216図 SA1013実測図

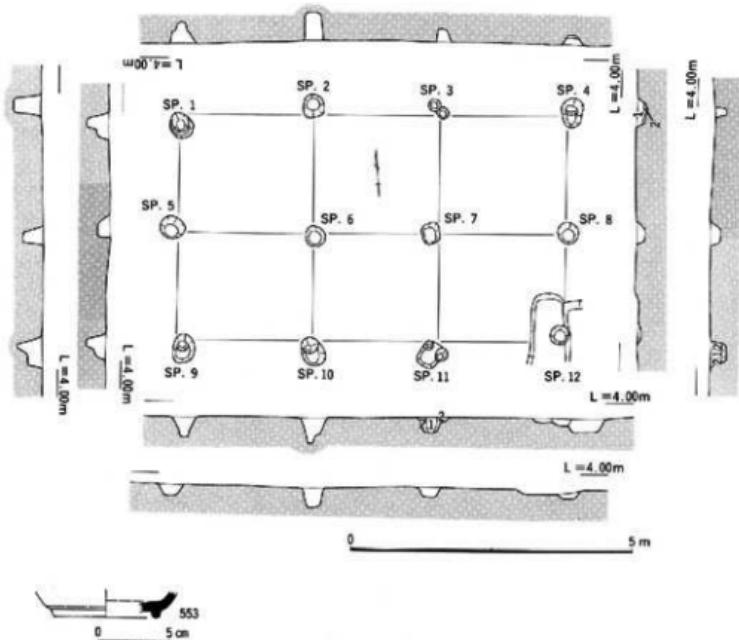
出土遺物は SP 3 より土師質土器甕片、
SP 4 より土師質土器杯片が出土している。



第217図 SA1014実測図

掘立柱建物26 (SB1026) (第218図)

2号屋敷地南側ほぼ中央において検出した東西棟の掘立柱建物である。建物の規模は桁行3間(7.08m)×梁間2間(3.98m)、床面積は27.80m²を測る総柱建物である。主軸方向はN 88°Wを測る。柱穴 SP 2・5・8・9 には炭化物を少量含んでいる。



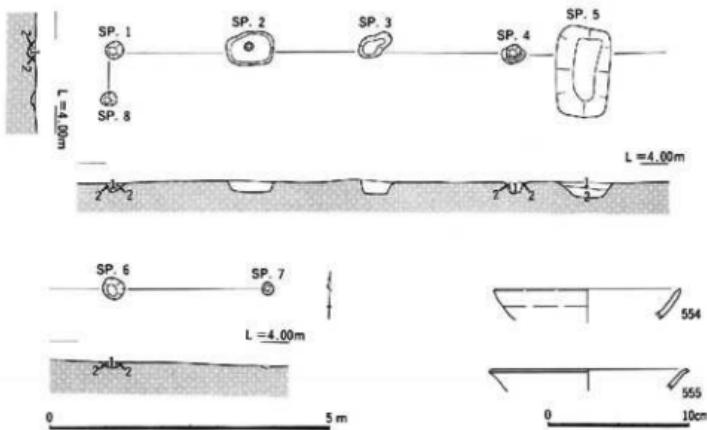
第218図 SB1026実測図・柱穴出土遺物実測図

柱穴に伴う遺物はSP1・2・5・6・9より土師質土器杯片が出土しており、SP6出土の土師質土器杯底部には回転糸切り痕が認められる。また、SP12より須恵器の高台付杯553が出土しているが混入物として捉えられる。

柵列16 (SA1016) (第219図)

掘立柱建物26 (SB1026) に伴う柵列で、建物の北側から西側に一部が平行して検出された。柵列の規模は北側東西5間 (13.8m)、西側1間 (1.0m) を測る。

柱穴からの出土遺物は、SP4より土師質土器杯口縁部が出土している。554は内彎気味に外上方に延びる口縁部で、端部は丸くおさめる。555は外反する口縁部を有するものである。



第219図 SA1016実測図・柱穴出土遺物実測図

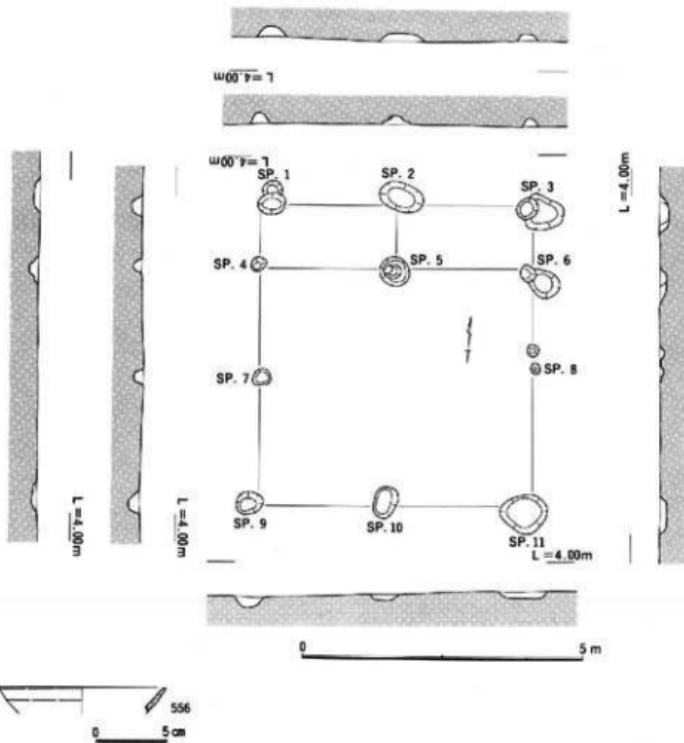
掘立柱建物31 (SB1031) (第220図)

2号屋敷地北側西よりにおいて検出した掘立柱建物で掘立柱建物33・34 (SB1033・1034)と切り合う。建物の規模は桁行2間 (5.00m) × 桁間2間 (4.28m) を測り、北側に半間分の庇を伴う。床面積は20.58m²を測る。主軸方向はN85°Eを測る。

柱穴SP4・6の埋土には炭化物を含み、出土遺物はSP8より瓦器腕口縁部556が出土している。建物の時期は出土遺物より13世紀代と考えられる。

掘立柱建物32 (SB1032) (第221図)

2号屋敷地西側南において検出した掘立柱建物で、掘立柱建物26 (SB1026) の西側にはば

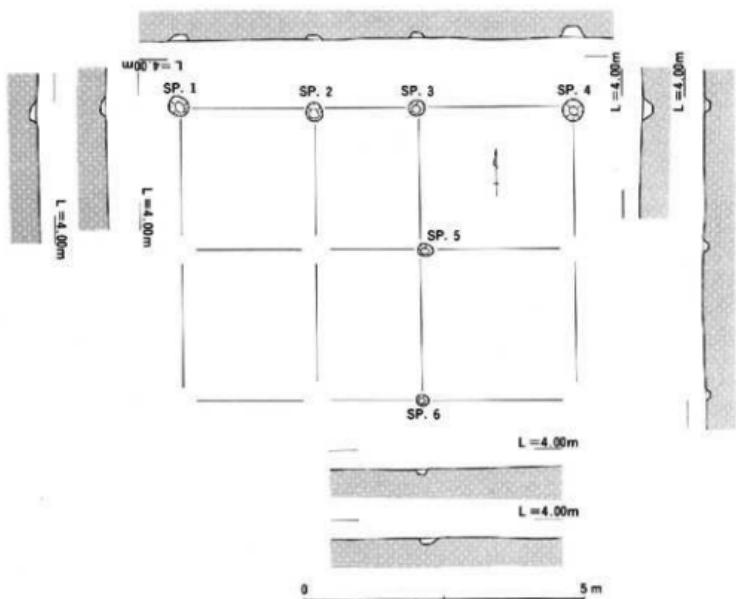


第220図 SB1031実測図・柱穴出土遺物実測図

平行している。建物の規模は柱穴を6箇所検出したのみであるが、復元規模は桁行3間(7.11m)×梁間2間(5.20m)を測り、床面積は36.97m²を測るものと考えられる。柱穴SP4・5の埋土には炭化物を含まれている。主軸方向はN88°Eを測る。

掘立柱建物39 (SB1039) (第222図)

3号屋敷地西側、調査区北隅において検出した掘立柱建物で、掘立柱建物40 (SB1040)と平行しており同時期の可能性が考えられる。建物の規模は桁行3間(7.41m)×梁間2間(4.36m)を測る。柱穴間の距離は桁行き約2.50m～約2.40m、梁間2.28m・2.08mを測りほぼ各柱間は一定している。床面積は31.24m²を測り、主軸方向はN80.5°Eを測る。



第221図 SB1032実測図

柱穴内の埋土は褐色系統の砂質上で、SP 1・7・12には炭化物を少量含んでいる。柱穴に伴う遺物は出土していない。

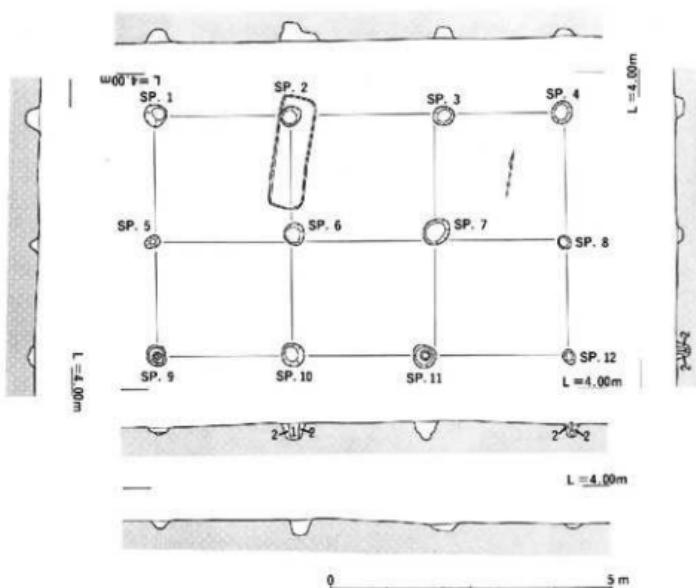
柵列21 (SA1021) (第223図)

掘立柱建物39 (SB1039) に伴うものと考えられる柵列遺構で、建物の北東約1.0mで東西に平行する。柵列の規模は東西4間分で約8.0mを測る。

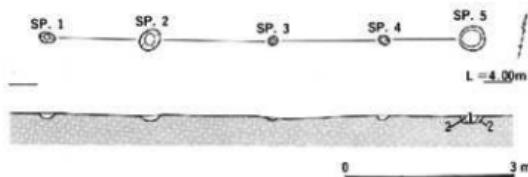
建物の西側にも南北に平行する柱穴があり、北側柵列から逆L字に延びる西側柵列の可能性も考えられる。

掘立柱建物40 (SB1040) (第224図)

3号屋敷地、調査区西隅において検出した掘立柱建物で、掘立柱建物39 (SB1039) の西側に位置し掘立柱建物39 (SB1039) に附属する建物の可能性が考えられる。建物の規模は桁行2間 (4.83m) × 梁間2間 (2.93m) を測る東西棟である。柱間は梁間北側1間がやや狭い構



第222図 SB1039実測図



第223図 SA1021実測図

造になっている。床面積は 13.11m^2 を測る。主軸方向はN 82°W を測る。

柱穴内埋土は褐色系統の砂質上で、SP 3・8には炭化物を少量含んでいる。

柵列20 (SA1020) (第225図)

掘立柱建物40 (SB1040) の西側に平行して南北に延びる柵列遺構で、柵列の規模は比較的柱間の短いものを含め9間分で、柵列の総延長は約 10.50m を測る。

柵列の規模は比較的大きく建物1棟に伴うとも考えられず、また位置的に区画屋敷地の西端に位置することから屋敷の西端を区画する柵列と考えられる。

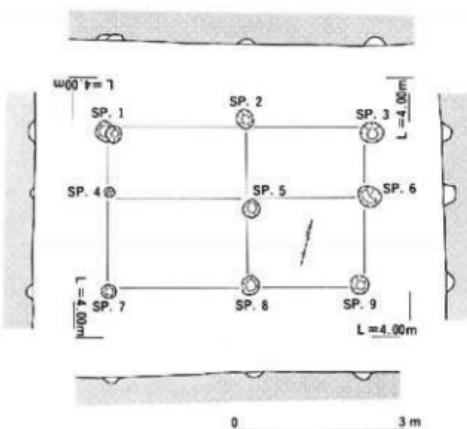
掘立柱建物47 (SB1047)

(第226図)

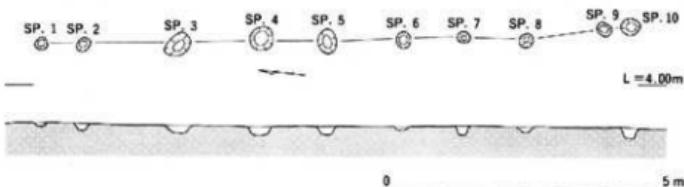
4号屋敷地、調査区中

央北隅において検出した
掘立柱建物で、北西隅は
調査区外に延びるもので
ある。建物の規模は桁行
4間(7.88m)×梁間2間
(4.50m)を測る東西棟
である。床面積は検出面
積 29.83m^2 、推定面積 35.2
 m^2 を測る。主軸方向はN
 84°E を示す。

出土遺物はSP 9から
土師質土器鍋片557・土師



第224図 SB1040実測図



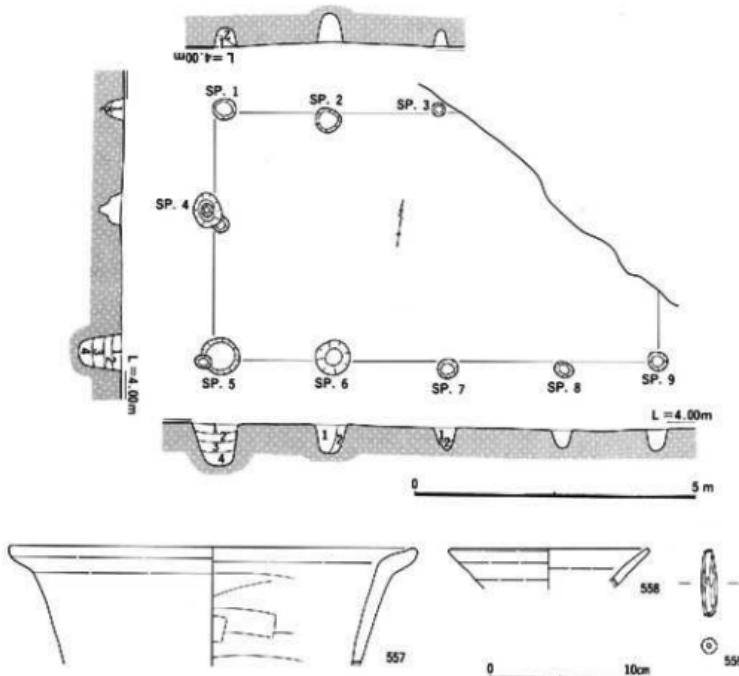
第225図 SA1020実測図

質土器杯口縁部558、SP.5から土師質の管状土錐559が出土している。土師質土器鍋は体部が外上方に直線的に延び、口縁部は緩やかに短く屈曲し端部を丸くおさめる。調整は外面ナデ、内面横方向への板状のナデ調整である。

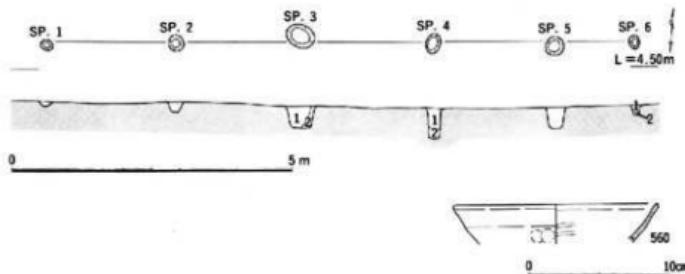
柵列22 (SA1022) (第227図)

掘立柱建物47 (SB1047) に伴うものと考えられる柵列遺構で、建物の南側に東西に延び、掘立柱建物48 (SB1048) を境する。柵列の規模は5間で約10.5mを測る。

出土遺物はSP.6より和泉型瓦器椀560が出土している。口縁部外面ヨコナデ、内面横方向のヘラミガキが施されている。時期的には13世紀代が考えられる。その他、SP.2・5より土師質土器杯片が出土している。



第226図 SB1047実測図・柱穴出土遺物実測図



第227図 SA1022実測図・柱穴出土遺物実測図

掘立柱建物48 (SB1048)

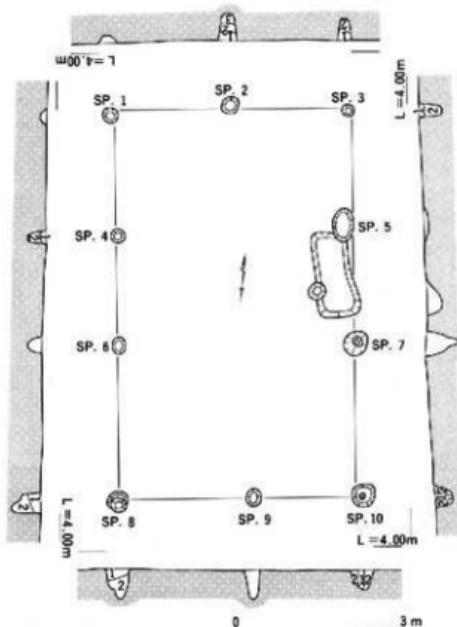
(第228図)

4号屋敷地調査区やや西寄りにおいて検出した南北棟の掘立柱建物である。

建物の規模は桁行3間(6.95m)×梁間2間(4.33m)を測り、柱間は桁行2.15m～2.85m・梁間1.93m～2.40mを測り、規格性は見られない。柱穴の掘り方はほぼ円形を呈し、SP. 2・4・7・8の埋土には炭化物を少量含んでいる。

主軸方向はN 6°Wを示し、床面積は29.19m²を測る。

出土遺物はSP. 7から瓦器楕片、その他の各柱穴からは土師質土器杯片が出土している。時期的には13世紀以降と考えられる。



第228図 SB1048実測図

掘立柱建物50 (SB1050) (第229図)

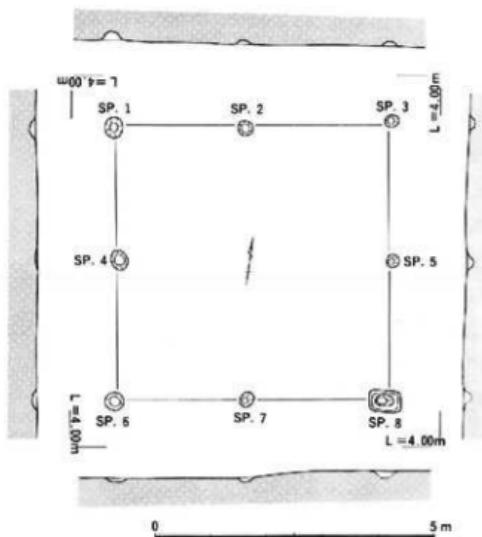
2号屋敷地中央西隅において検出した掘立柱建物である。検出した建物の規模は、桁行2間 (5.00m) × 梁間2間 (5.00m) でほぼ正方形状の建物である。各柱間はほぼ2.5mで規格されている。

埋土はオリーブ褐色の砂質土で、SP 3・5からは土師質杯片が出土している。主軸方向は N 5°Wを測る。床面積は約25.0m²を測る。

II-②期

掘立柱建物15 (SB1015) (第230図)

1号屋敷地、調査区北東端において検出した掘立柱建物で、掘立柱建物17・20 (SB1017・1020) と切り合っている。建物の規模は桁行3間 (7.38m) × 梁間2間 (4.90m) を測る東西棟である。柱間は桁行1.9m～2.2m、梁間2.2m～2.7mを測り、床面積は36.10m²を測る。主



第229図 SB1050実測図

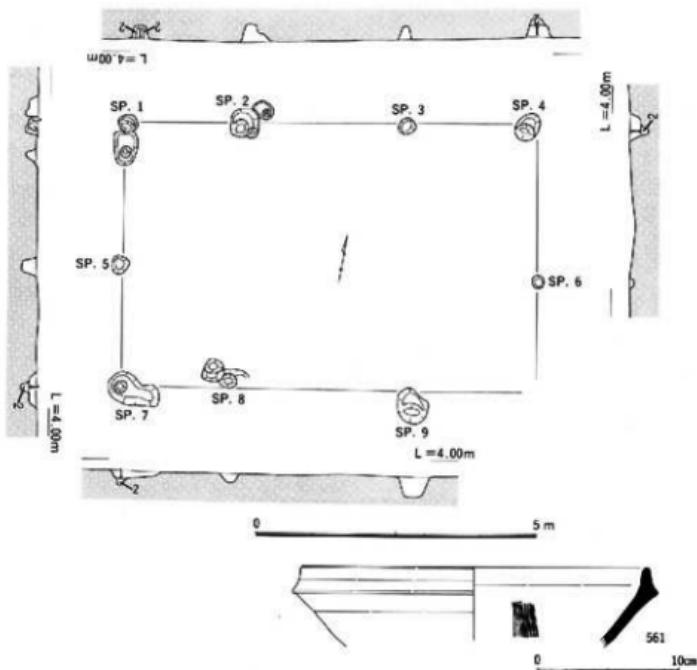
軸方向はN81°Eを示す。

出土遺物

561はSP 7より出土した備前焼IV期の摺鉢である。口径24.8cmを測るもので、口縁端部を上方に拡張し口縁下端部の拡張は僅かで、端面は小さい。調整は内外面ヨコナデ、8条単位の摺り目が施されている。その他、SP 2・5・9から瓦器腕片・土師質土器杯片が、SP 4・9からは土師質土器鍋片が出土している。時期的には備前焼摺鉢から15世紀後半代が考えられる。

掘立柱建物16 (SB1016) (第231図)

1号屋敷地、掘立柱建物15 (SB1015) の南側約3.0mの位置において平行する掘立柱建物で



第230図 SB1015実測図・柱穴出土遺物実測図

ある。

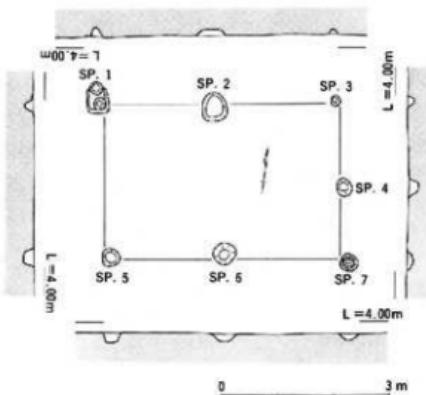
建物の規模は桁行2間(4.28m)×梁間1間(2.86m)を測る。小規模な建物であるが、東側梁間は2間分をもつ。

建物自体は掘立柱建物15(SB1015)に附属する可能性が考えられる。床面積は11.55m²を測り、主軸方向はN81°Eを示す。出土遺物はSP5より土師質土器杯片が出土している。

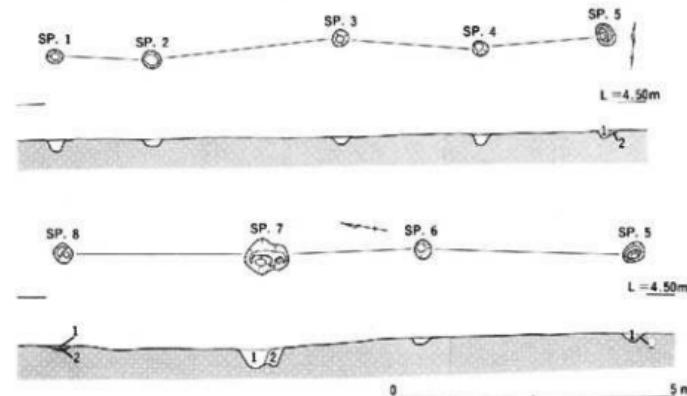
橋列10 (SA1010) (第232図)

掘立柱建物15・16 (SB1015・

1016)に伴うと考えられる橋列遺構で、建物の東側から南側に逆L字状に延びるものである。橋列の規模は東側南北3間(約10.5m)、南側東西4間(約10.0m)を測る。橋列自体は建物に伴うものの、規模から言えば掘立柱建物18(SB1018)も含めて屋敷の区画を示すものと考えられる。



第231図 SB1016実測図



第232図 SA1010実測図

掘立柱建物18(SB1018)

(第233図)

1号屋敷地、調査区北側において検出した掘立柱建物で、掘立柱建物15(SB1015)の西側に平行する建物である。建物の規模は桁行3間(6.63m)×梁間2間(4.43m)を測る南北棟である。なお、棟通りは3間の東柱がほぼ等間隔(1.5m)で配置されており、南側1間分は土間になる可能性がある。各柱間はほぼ2.00m前後で統一されている。床面積は27.09m²を測る。

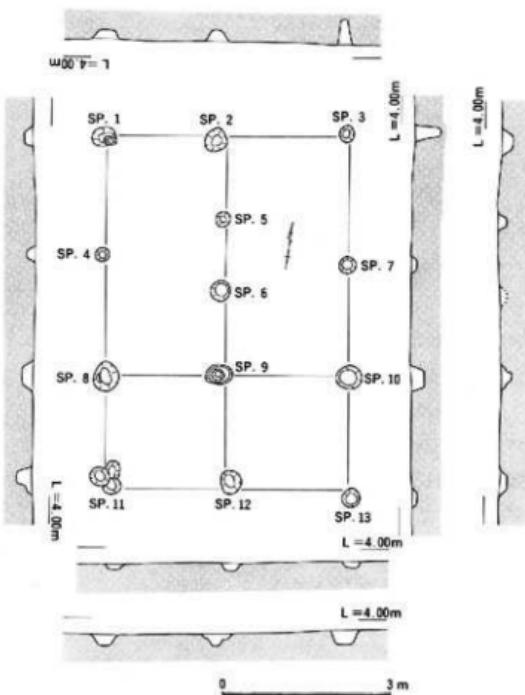
主軸方向はN 8°Wを測る。掘立柱建物

15(SB1015)からの距離は約1.5mと近接した位置関係である。柱穴内の埋土は褐色系統の砂質土で、SP11には炭化物が含まれている。

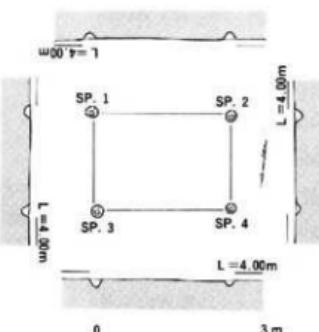
出土遺物はSP7・13より土師質土器杯片、SP12より土鍋片が出土地している。

掘立柱建物24(SB1024) (第234図)

1号屋敷地、調査区中央西側において検出した掘立柱建物で、建物の規模は桁行1間(2.50m)×梁間1間(1.75m)を測る小規模な建物である。検出面積は4.17m²を測



第233図 SB1018実測図



第234図 SB1024実測図

る。主軸方向はN84°Eを示す。

出土遺物はSP 1より土師質土器擂鉢片と考えられるもの、SP 2より土師質土器杯片が出
土している。

掘立柱建物28 (SB1028) (第235図)

2号屋敷地中央部北側において検出した掘立柱建物である。

建物の規模は桁行3間(5.08m)×梁間1間(2.58m)を測る南北棟で、床面積は12.87m²を測る。主軸方向はほぼ南北を示す。

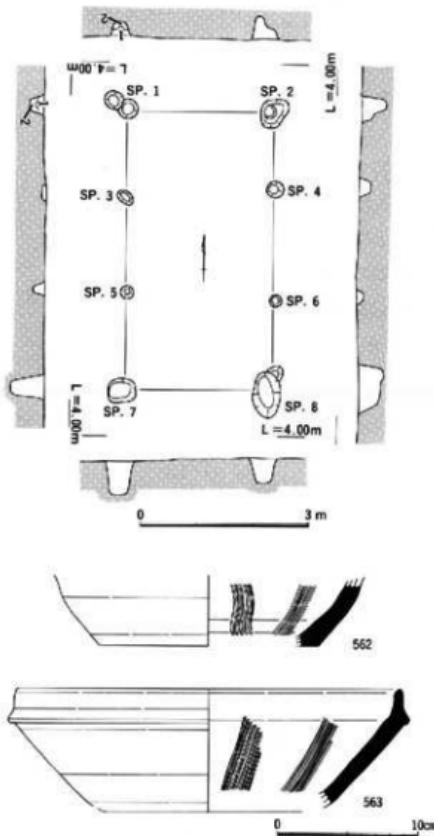
出土遺物はSP 5・8から備前焼IV期の擂鉢が出土している。562は体部片で内面に摺り目が8条施されている。563は口縁端部を上方に拡張し下端部を外方に僅かに拡張する。内面には摺り目が8条施されている。時期的には15世紀後半代と考えられる。

掘立柱建物29 (SB1029)

(第236図)

2号屋敷地中央部において検出した純柱建物で、掘立柱建物30(SB1030)と切り合っている。建物の規模は桁行3間(7.83m)×梁間2間(4.65m)を測る東西棟である。柱間は桁行西側1間分が若干広く約3.0mで、東側が約2.40m前後を測る。梁間は2.20m前後を測る。床面積は35.10m²を測り、主軸方向はN80°Eである。

柱穴内の埋土は褐色系統の砂



第235図 SB1028実測図・柱穴出土遺物実測図

質土で、SP 1・2・3・4・6・9・12には炭化物を少量含んでいる。

出土遺物は SP 6・7・8・11より土師質土器杯片が出土している。

掘立柱建物30 (SB1030) (第237図)

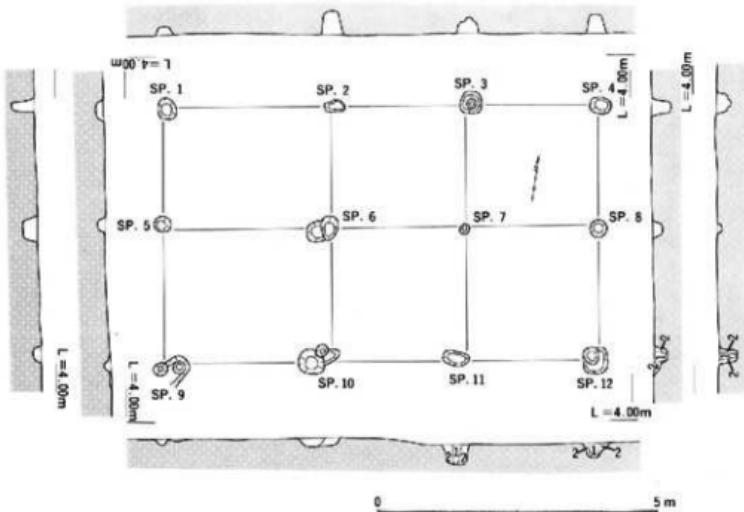
2号屋敷地北側中央部に位置する掘立柱建物で、掘立柱建物29 (SB1029) と切り合う。

建物は総柱建物で、規模は桁行3間(8.39m)×梁間2間(4.41m)を測る東西棟である。柱間は桁行2.60m~3.00m、梁間1.78m~2.50mを測り規格性には欠けるが、全体的には北側梁間1間幅が短い構造である。

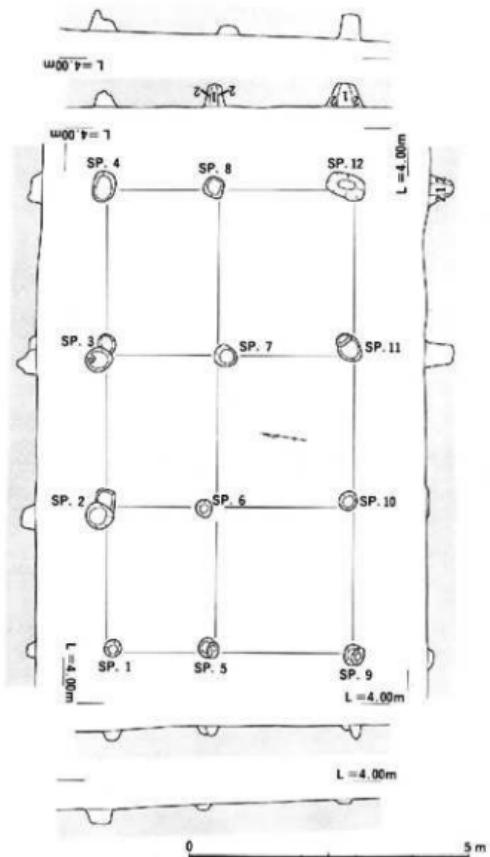
床面積は36.30m²で、建物の主軸方向はN82°Eを測る。規模及び方位は掘立柱建物29 (SB1029) とほぼ同規模である。柱穴に伴う遺物は SP 2・3・9より土師質土器杯片が出土している。

掘立柱建物33 (SB1033) (第238図)

2号屋敷地北側中央部において検出した掘立柱建物で、掘立柱建物31・34 (SB1031・1034) と切り合う。建物の規模は桁行3間(6.03m)×梁間2間(3.90m)を測る東西棟である。床面積は22.90m²、主軸方向はN86°Eを測る。柱穴 SP 4・7・9の埋土内には炭化物が含まれ



第236図 SB1029実測図



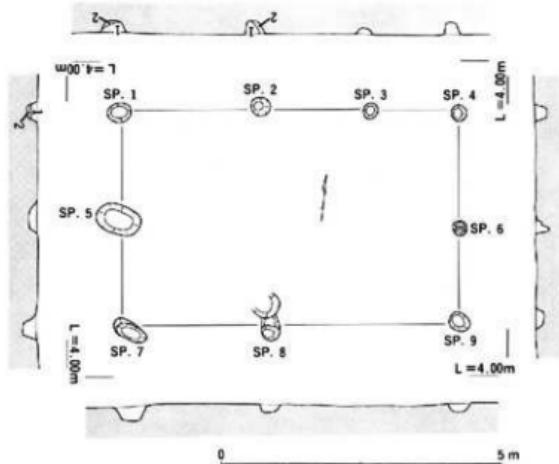
第237図 SB1030実測図

ている。

柱穴に伴う遺物にはSP.7より土師質土器杯底部片が出土している。

掘立柱建物34 (SB1034) (第239図)

2号屋敷地北西隅において検出した掘立柱建物で、掘立柱建物31・33 (SB1031・1033) と切り合っている。



第238図 SB1033実測図

建物の規模は桁行3間(7.36m)×梁間2間(5.25m)を測るが、東側1間分は土間と考えられる。また、南側桁行の西からの第2柱穴は土坑44(SK1044)と重複している。総床面積37.53m²を測る。主軸方向はN85°Eを測る。

柱穴に伴う遺物にはSP2より土師質土器杯口縁部564と龍泉窯系青磁碗565が出土している。青磁碗は体部外面に鍍蓮弁を配している。566はSP4から出土した備前焼W期の新しい段階の擂鉢で、口縁部を上下に拡張するものである。

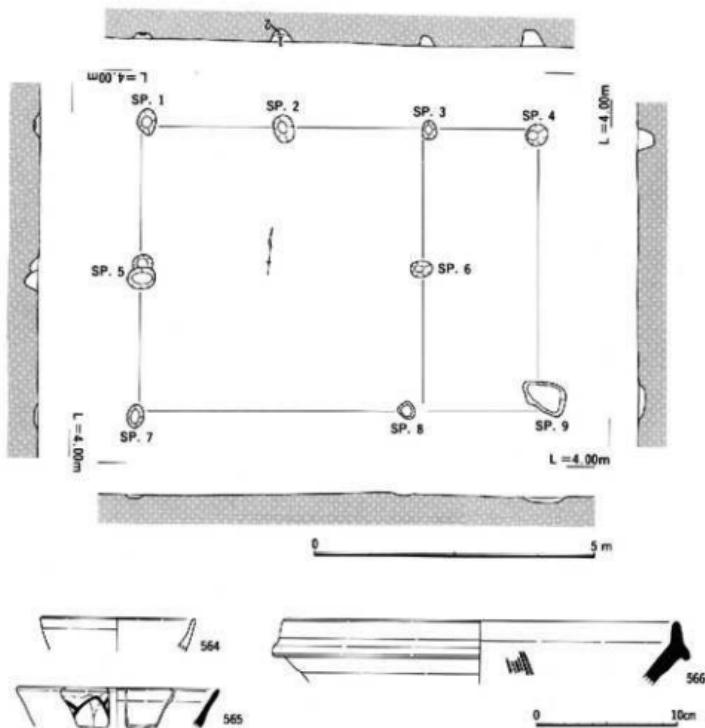
掘立柱建物35(SB1035)(第240図)

2号屋敷地中央部において検出した小規模な掘立柱建物で、北側に廂を伴う。建物の規模は桁行1間(2.73m)×梁間1間(2.58m)を測る南北棟である。床面積は6.76m²、主軸方向はN3°Wを測る。柱穴内の埋土は褐色系統の砂質土で、SP3・6には炭化物を含んでいる。柱穴に伴う遺物はSP4より土師質土器杯片が出土している。

掘立柱建物36(SB1036)(第241図)

2号屋敷地中央部北隅において検出した掘立柱建物である。

建物の規模は桁行2間(5.05m)×梁間1間(2.38m)を測る東西棟である。床面積は12.13m²を測る建物で、主軸方向はN84.5°Eを測る。



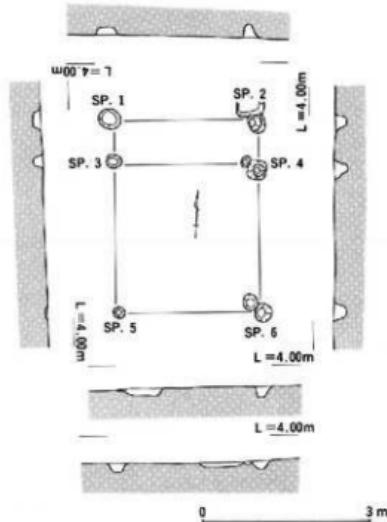
第239図 SB1034実測図・柱穴出土遺物実測図

柱穴内からの遺物は SP 2 より土師質土器鍋口縁部片が出土している。

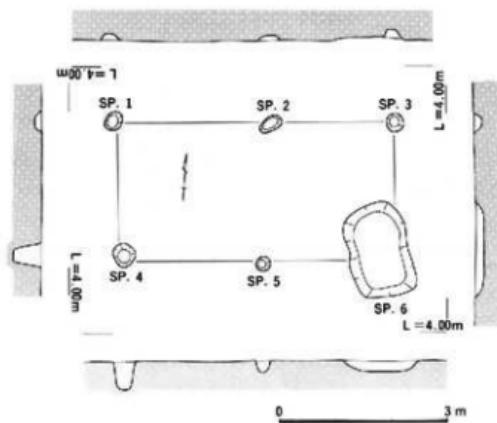
掘立柱建物38 (SB1038) (第242図)

3号屋敷地南側西寄りにおいて検出した東西棟の掘立柱建物で、掘立柱建物41・42・45(SB1041・1042・1045)と切り合っている。建物の規模は桁行2間(5.04m)×梁間2間(4.23m)を測り、西側に半間の附を伴う純柱建物である。柱間は桁行2.40m~2.60m、梁間2.0m前後を測り、附の幅は約1.0mである。床面積は20.38m²で、主軸方向はほぼ東西を示す。

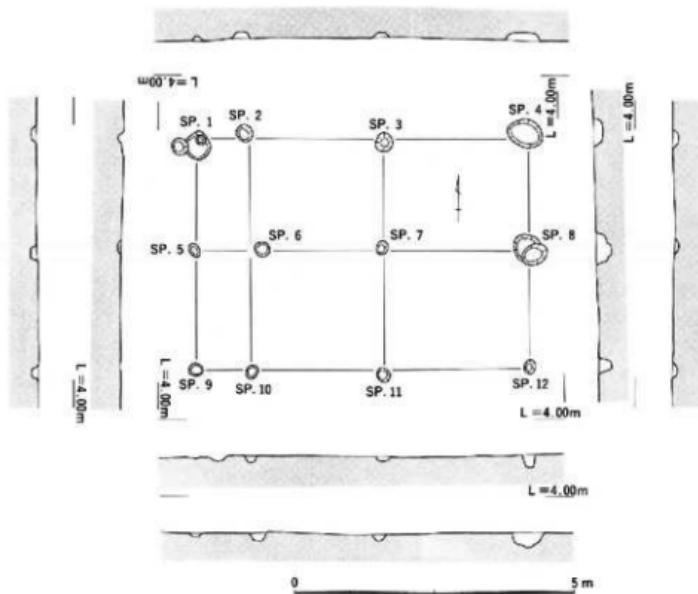
柱穴内の埋土は主に褐色系統の砂質土であるが、SP 1・2・10には炭化物を含んでいる。遺構内からの出土遺物は見られない。



第240図 SB1035実測図



第241図 SB1036実測図



第242図 SB1038実測図

掘立柱建物41 (SB1041) (第243図)

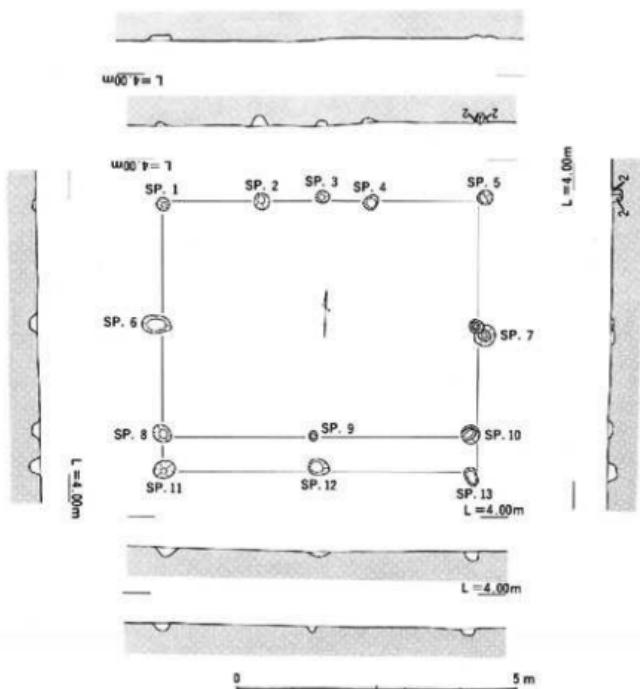
3号屋敷地南側西寄りにおいて検出した掘立柱建物で、掘立柱建物38・42・45 (SB1038・1042・1045) と切り合っている。建物の規模は桁行2間 (5.75m) × 梁間2間 (4.23m) を測り、南側に小規模な廂を伴う。棟中央部には若干桁行西側にずれるが柱穴を検出しており、純柱建物になる可能性も考えられる。柱間は桁行2.80m前後、梁間2.10m～2.40m前後を測り、廂の幅は約0.70mである。

柱穴の掘り方は比較的浅く、埋土は褐色系統でSP.3・4・8・10には炭化物が含まれている。床面積は24.86m²で、主軸方向はN87°Eを示す。

柱穴内からの出土遺物は見られない。

掘立柱建物42 (SB1042) (第244図)

3号屋敷地西側やや南よりにおいて検出した掘立柱建物である。建物の規模は桁行2間 (4.45m) × 梁間1間 (2.05m) を測る東西棟である。床面積は9.23m²を測る小規模な建物で、



第243図 SB1041実測図

主軸方向はN84°Eを測る。

柱穴内の埋土は主にオリーブ褐色砂質土であるがSP 2・5に少量の炭化物を含んでいる。

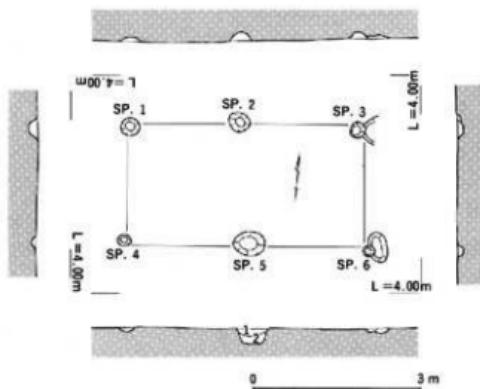
柱穴内からは遺物は出土していない。

掘立柱建物44 (SB1044) (第245図)

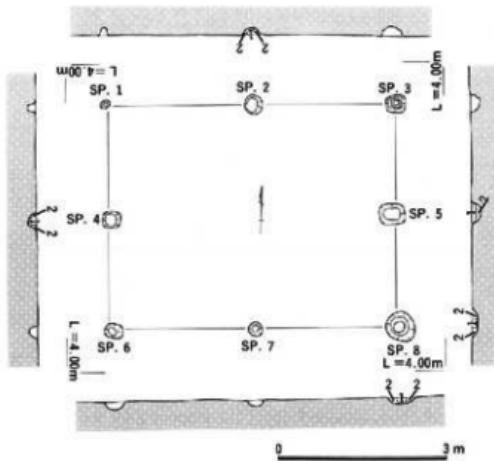
3号屋敷地中央南側において検出した掘立柱建物で掘立柱建物37 (SB1037) と切り合っている。建物の規模は桁行2間(5.23m)×梁間2間(4.05m)を測る東西棟である。柱間は桁行約2.50m、梁間は約2.0mで規格されている。床面積は20.34m²を測り、主軸方向はN87°Eを示す。

柱穴内の埋土は褐色系統の砂質土であるがSP 1・2・4には少量の炭化物を含んでいる。

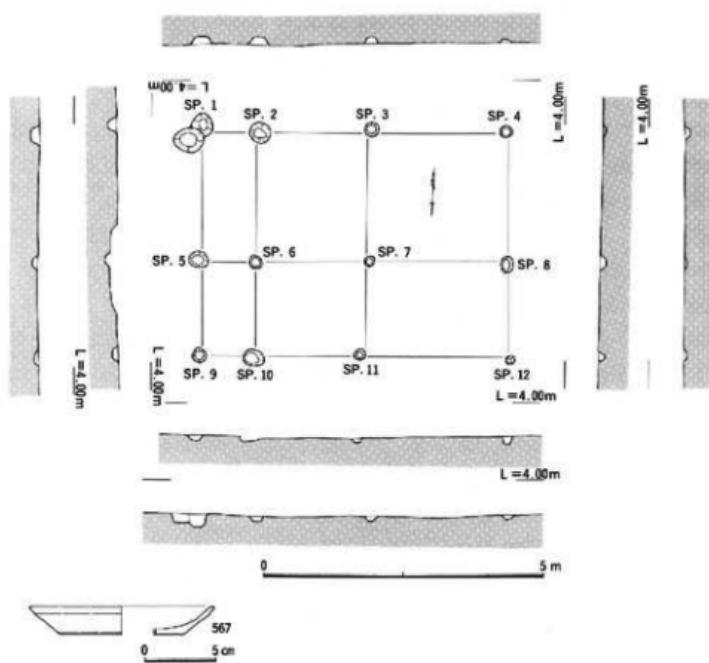
柱穴内に伴う遺物はSP 2・8より土師質土器杯片、またSP 8よりは土師器壺片が出土している。



第244図 SB1042実測図



第245図 SB1044実測図



第246図 SB1045実測図・柱穴出土遺物実測図

掘立柱建物45 (SB1045) (第246図)

3号屋敷地西側やや南よりにおいて検出した掘立柱建物で、掘立柱建物38・41・42(SB1038・1041・1042)と切り合っている。建物の規模は桁行2間(4.65m)×梁間2間(4.11m)を測る東西棟で、西側に1.0m幅の廊を付設している。床面積は17.87m²を測る建物で、主軸方向はN87°Eを測る。柱穴内の埋土は主にオリーブ褐色砂質土でSP.1・7・9・11には少量の炭化物を含んでいる。

柱穴内に伴う遺物はSP.5より土師質土器皿567が出土している。口縁部は底部から低く外上方に立ち上がり、口縁端部は外面のヨコナデにより若干外反し丸くおさめている。色調は乳白色を呈する。その他、体部外面に平行タタキを有する土師質土器釜片が出土している。

時期的には土師質土器皿から概ね15世紀代と捉えられる。

溝

当該期においては14条の溝が検出された。このうち溝1・2・4（SD1001・1002・1004）は屋敷地を形成する方形区画溝である。区画溝は各屋敷地を形成するものの、その溝の方向性は溝3（SD1003）と相關関係をもつもので、いずれも一辺が平行している。

自然流路1（SR1001）に向かって各溝が平行する地点（断面A-B）（第247図）についてみてみると、溝2・3・4の断面形状は屋敷地の区画溝4（SD1004）が浅いU字状を呈し、区画溝2（SD1002）がやや深い逆台形状を呈している。区画溝の間を通る溝3（SD1003）は深い逆台形状を呈し、断面E-F間（第264図）においては断面V字状で、深部では逆台形状を呈しているなど区画溝とは性格を異にしている。

溝内の堆積状況は大きく3層（3時期）に分層される。第1時期の堆積は溝2・3（SD1002・1003）で認められ、第2・26・27層は灰色系統の粘質土の堆積層で下層部において炭化物・鉄分の沈殿がみられ、滞水状況を示す。第2期の堆積は3条の溝において認められ、溝4（SD1004）においては初期の堆積層である。

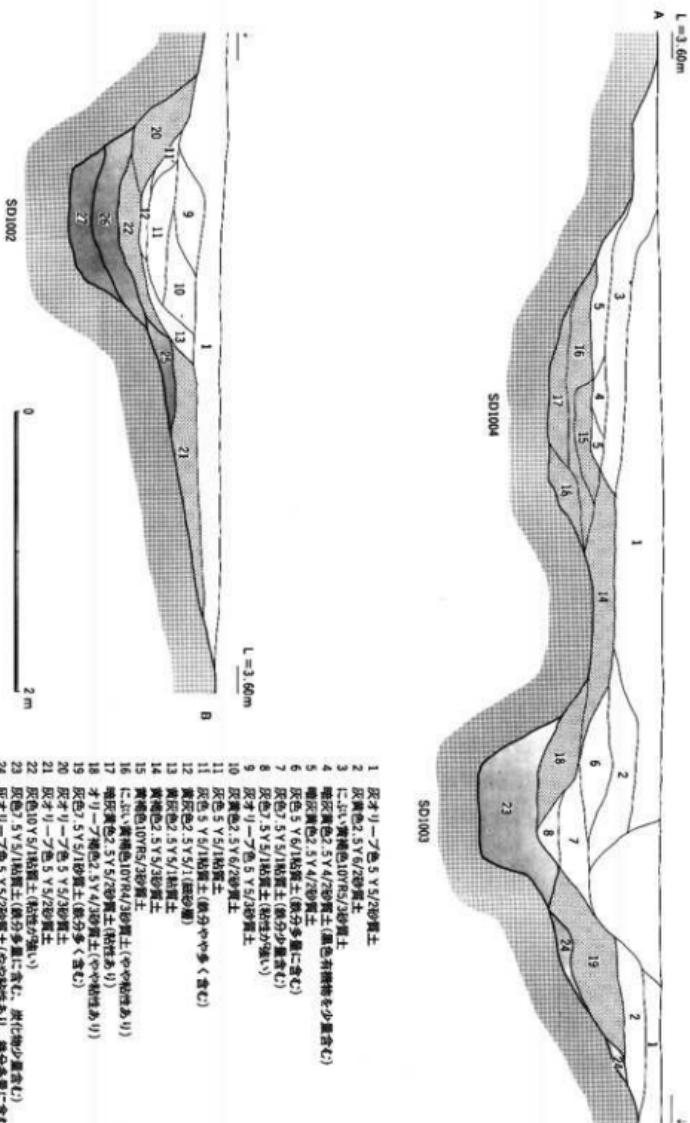
機能的にみると、第2時期の堆積はほぼ3条の溝が埋没し、全体が浅い落ち込み状を呈したものと考えられる。この堆積層は堆積後、再度掘削されて溝が復旧されているが、規模はかなり小規模なものとなっている。第3時期の堆積状況は各溝とも自然の流れ込みによって埋没し、第1・2・9層の堆積によって溝の機能は失っており屋敷地の区画溝は消滅したものと考えられる。その後、各溝は再掘削された状況は認められない。

溝1（SD1001）（第248～250図）

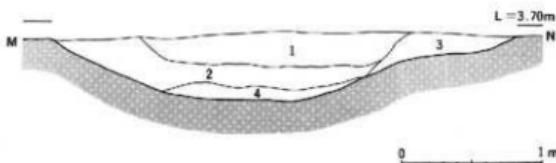
1号屋敷地を区画する逆L字状を呈する溝で、屋敷地の西側43.50mと北側13.50mを検出した。西側溝の方向はほぼ南北を示し、溝は南端において途切れるが遺構面の高さから見ると北側検出面が約0.25m高い事から本来は南側になお延びているものと考えられる。北側面に続く溝は調査区端では溝3（SD1003）と平行して若干北側に屈曲しており、溝幅はほぼ半分程度に狭くなる。

溝幅は狭い所で1.50m前後、北側の広い所で2.50mを測る。深さは約0.60m前後を測り、溝底面の高さは南側から北側隅に向かい0.10m前後で低くなっているが、ほぼ水平と捉えられる。

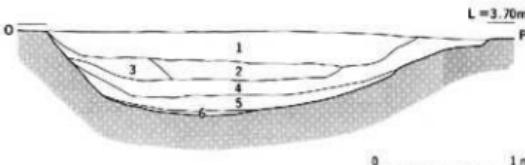
遺構内埋土は3地点でみるとほぼ同堆積で、第1・2層の堆積する時期と、以下の堆積する時期に溝規模の変化が捉えられる。各地点での下層堆積物には炭化物・鉄分の沈殿がみられる事から滞水状況があったと想定される。



第247図 SD1002・1003・1004南北土層断面実測図



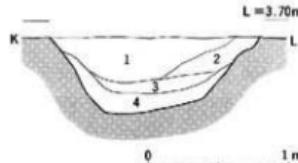
第248図 SD1001土層断面実測図 (M-N)



第249図 SD1001土層断面実測図 (O-P)

柵列6 (SA1006) (第251図)

溝1に伴う柵列と考えられる柱列遺構で、溝の西側に沿って9間検出された。総延長約27.0mを測り、各柱穴間はほぼ5.0m間隔で並ぶが北側1間と南側4間は2.0m前後と間隔を狭めている。



出土遺物 (第252~254図)

568は土師質土器小皿で底部の切り離しは回転ヘラ切りと思われる。569~571は土師器杯の口縁部および底部片である。570は内外面とも赤色塗彩

- 1 オリーブ褐色2.5Y4/3砂質土(粘性あり、鉄分含む)
- 2 噴灰黄色2.5Y5/2砂質土(炭化物、鉄分を含む)
- 3 黄褐色2.5Y5/1砂質土(炭化物、鉄分を含む)
- 4 灰色7.5Y5/1粘質土(鉄分含む)

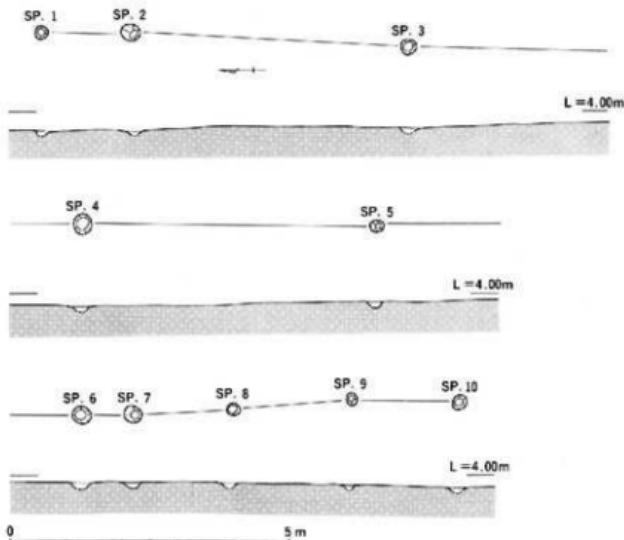
第250図 SD1001土層断面実測図 (K-L)

が施され口縁端部は上方に拡張し丸くおさめており、時期的には9世紀代のものと考えられる。572は口径12.7cmを測る土師質土器皿で、口縁部は底部から外上方に内側気味に立ち上がる。口縁端部は丸くおさめ、調整は内外面ともヨコナデ、外底面は回転ヘラ切り後ナデで板目痕が残る。573は和泉型瓦器楕口縁部で外面ヨコナデでユビオサエの痕跡が残り、内面は横

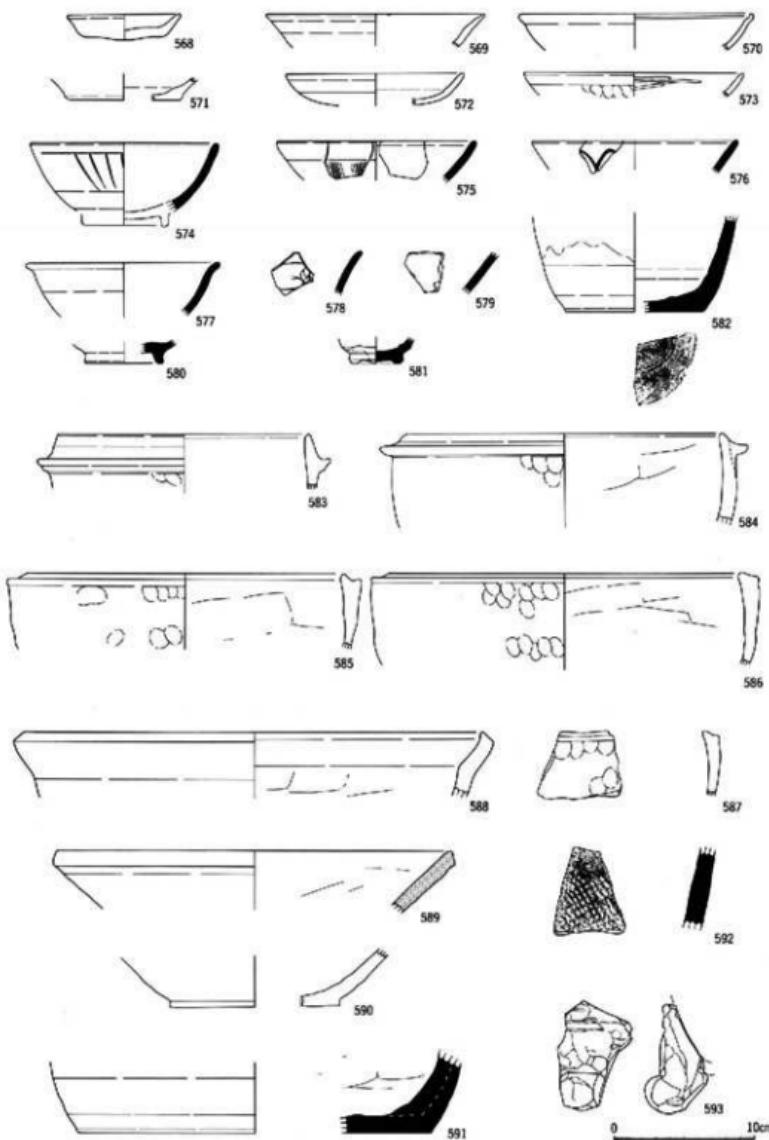
方向へのヘラミガキ調整が施されている。

574～579は青磁碗である。574は細線により線描蓮弁文を施すもので上田分類のB～IV類にあたり15世紀後半から16世紀前半のものと考えられる。575は同安窯系青磁碗で、内彫気味に延びる口縁外面に櫛による平行線を施している。576は龍泉窯系青磁碗の口縁部で外面に片切彫による蓮弁文を有する。577は口縁端部が外反するもので、釉は灰色がかったり。上田分類のD類にあたり、14世紀後半から15世紀前半頃と考えられる。578は細片であるが、口縁部内面に片切彫による草花文を施したものと考えられる。釉は若干黄色を帯びている。580は高台部で、内面見込にはスタンプ文が施されている。また、釉は疊付を越え部分的に高台内に及んでいる。579は瀬戸・美濃系の天目碗である。外面とも黒褐色の釉がかかり、胎土は灰白色を呈する。581は白磁の多角杯で、高台には4ヵ所に弧状の抉り込みを施している。釉および胎土は若干黄色を帯び、内面見込には4ヵ所に重ね焼きによる目跡が残る。森田分類のD群にあたる。582は瀬戸・美濃系と考えられる梅軸壺の底部から体部片で、釉は体部下半におよぶ。底部は糸切り痕が残る。胎土は灰色を呈し焼成は硬質である。この他、体部片が1点出土している。

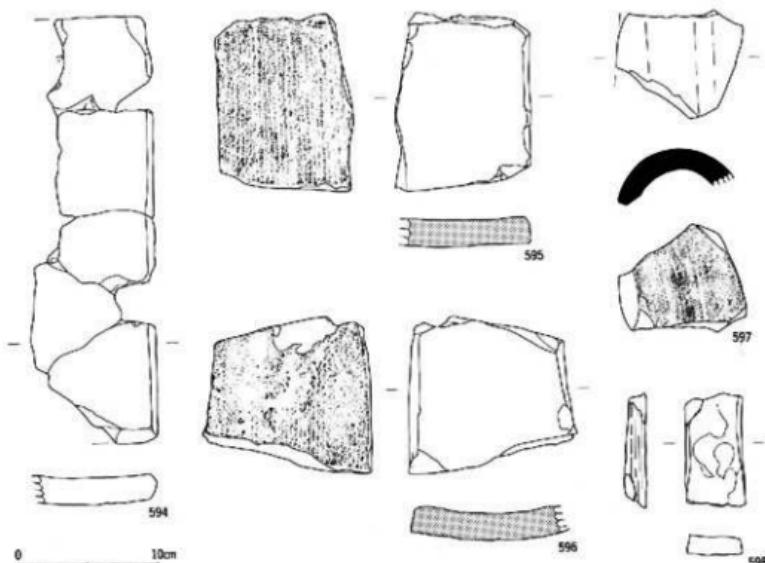
583～587は土師質土器蓋で、鋤部の形状から水平方向に延びた鋤が口縁部直下に付くもの



第251図 SA1006実測図



第252図 SD1001出土遺物実測図 (1)



第253図 SD1001出土遺物実測図 (2)

584と、ほとんど鉢としての形態を示さず口縁端面に凹線状のくぼみを巡らしたもの585～587に分けられる。調整は内外面とも板ナデ状で外面にはユビオサエの痕跡が残る。胎土では非常に多くの石英粒が含まれている。583は鉢に対して口縁部の立ち上がりが高くまた胎土も比較的精良で、時期的には若干古い形態をもつものと考えられる。588は土師質土器鍋口縁部である。口縁部は緩やかに外反し、端部は内方に若干拡張する。調整は外面ヨコナデ、内面板ナデである。589は瓦質土器のこね鉢か擂鉢の口縁部である。口縁端部は方形状におさめ調整は内外面ともヨコナデである。590は土師質土器こね鉢の底部片で底部は若干突出する。591は備前窯窯の底部片である。592は須恵器窯体部片と考えられるもので、体部外面には格子状タタキが施されている。593は土師質土器の風炉脚部で猫足状を呈する。胎土は精良である。

594～596は平瓦で594は土師質、595・596は瓦質である。594は凹凸面ともナデ調整、595・596の凹面は板ナデにより布目痕を消去しており、凸面には繩文タタキをとどめている。597は須恵質の丸瓦で凹面には布目痕、凸面には部分的に繩文タタキの痕跡が残る。598は砂岩



第254図 SD1001出土鏡質拓影 (2)

製の砥石片で、使用面は2面残存する。

599は北宋銭の「元豐通宝」で初鋤年は1078年である。

溝内からは10世紀前後の土器および13世紀代の瓦器碗等の遺物も出土しているが、主に15世紀～16世紀前半代の遺物が占めており、掘削時期は明確にしがたいが埋没時期はほぼ当該時期に求められる。

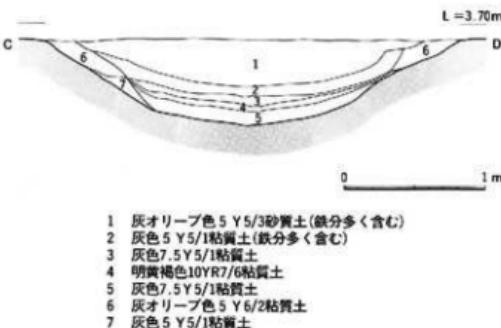
溝2 (SD1002)

(第255・256図)

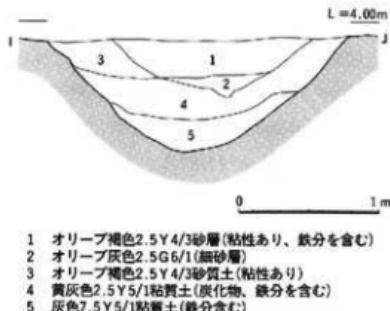
2号屋敷地を区画する
コの字状の溝で、屋敷地
の東・北・西の各面を区
画する。各面での溝は、
東側溝が方向を溝1とほ
ぼ同じく南北を示し、検
出長は43.0mを測る。南
端部において途切れて

いるが、本来は若干南に
延びるものと考えられる。しかし、
溝底面の高さの状況からほぼ等地点
で終息するものと考えられる。北側
溝は東側溝からほぼ直角に屈曲し、
方向は東西を示す。検出長は約45.0
mを測るが、東端から約25.0m地点
で若干北側に屈曲し屋敷地でのテラ
ス状の張り出しを形成している。西
側溝は自然流路1 (SR1001) に規制
を受けており方向は流路と平行し南
北方向で南方向へ13°東側に偏する。
検出長は約22.0mで南端部は自然流路部から屋敷地の斜面に築かれた石敷き部で終息する。

溝の掘り方形状および埋土の状況は、北東屈曲部 (第255図) では深さ0.67mを測り、溝内
堆積層は7層に分層される。堆積土の土質は第1層以下は粘性を呈し、第2層には鉄分の沈
澱がみられる事と堆積状況から第1・2層は再掘削後の堆積層と捉えられる。東側溝部 (第
256図) では幅2.40m、深さ0.80mを測り、埋土は5層に分層され第4・5層は灰色系統の粘



第255図 SD1002土層断面実測図 (C-D)



第256図 SD1002土層断面実測図 (I-J)

質土で炭化物および鉄分を含んでいる。土層からは溝埋没後の再掘削の状況がみられ、第1・2層は再掘削後の堆積層を示す。

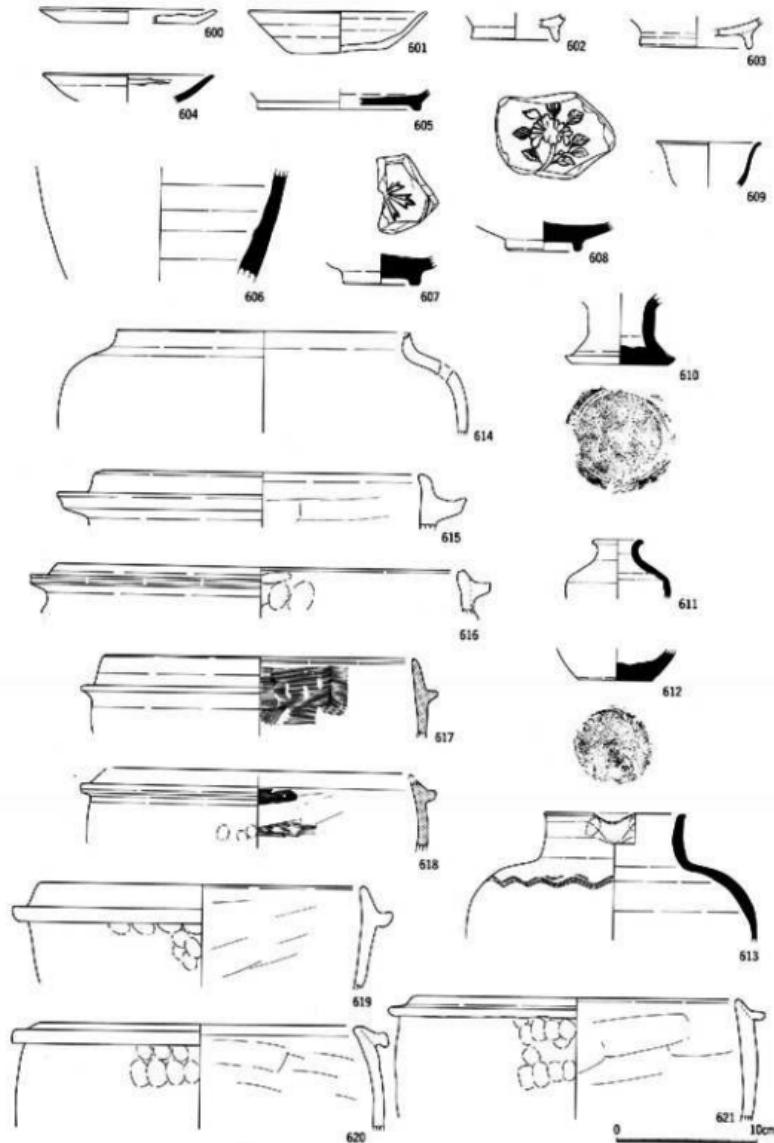
溝の全体的な状況から断面形状はほぼU字状を呈するが土層断面A・B地点(第247図)では逆台形状を呈す。また溝の底面の高さは北西屈曲部で東側溝南端部からは約1.20m、西側溝南端部から0.50m深い状況を示し、戻敷地西側コーナー部で集水されていた状況が考えられる。溝の埋没による再掘削の状況は2回ないし3回の掘削が確認され、溝の掘削時期は下層部において明確な遺物の出土がない事から時期決定はできないが、最終堆積土には15世紀～16世紀の上器が含まれる事から溝の埋没時期については15世紀後半から16世紀前半代と考えられる。

出土遺物(第257～263図)

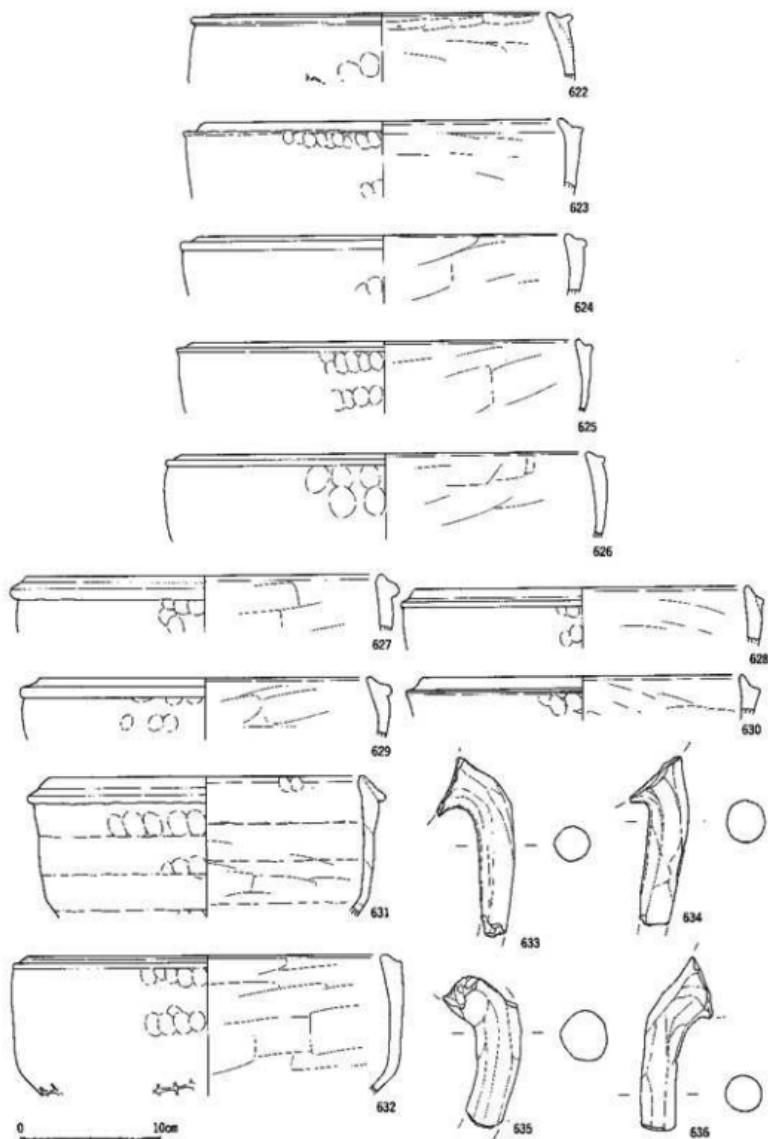
600は土師器皿である。底部回転ヘラ切り未調整で、口径などから10世紀段階のものと考えられる。601は土師器皿で口縁部は底部から直線的に外上方に立ち上がる。底部は小さく調整は回転ヘラ切り後ナデである。602は土器挽高台部片である。603は黒色土器A類挽高台部で、高台は比較的高く断面方形状を呈する。胎土には結晶片岩を含む。604は京都系縁釉陶器の皿口縁部である。口縁部は内彎気味に低く外上方に立ち上がり、端部は外反させ尖り気味におさめる。胎土は軟質で、釉は黄緑色を呈する。605は須恵器の高台付杯底部片である。

606は白磁壺と考えられる休部片である。釉は薄く内外面とも施釉されている。607・608は青磁碗底部片で、内面見込みには花文がスタンプされている。釉は高台内および盤付を残して施釉されている。607は龍泉窯系青磁碗で、尚台断面は方形状を呈し、底部も厚く横田・森田分類のI～5類と考えられる。608の高台は比較的薄く、胎土は黒灰色を呈し釉はくすんだ暗緑色を呈する。上田分類のD類にあたるものと考えられる。609は器壁の薄い白磁の杯で、口縁部は外反する。610は瀬戸・美濃系の灰釉花瓶底部片で暗緑色を呈する。底部の切り離しは回転糸切りである。時期的には15世紀代と考えられる。611・612は備前窯小壺片である。611は体部から口縁部片で、口縁端部は折り返し丸くおさめる。612は底部片で底部には回転糸切り痕が残る。時期的には備前焼Ⅳ期に相当する。613は備前焼壺で、肩部には2条の波状文が施されている。口縁部は直立ぎみで端部方形状におさめ、片口を有する。時期は備前焼Ⅳ期と考えられる。

614は土師質土器釜である。口縁部は短く直立し、肩部には円形の孔が穿たれている。調整は内外面とも板ナデ状の痕跡が残る。615・616はいわゆる折津型の土師器釜で、長脛形の体部を有するものと考えられる。615は口縁部外面直下に水平方向に延びる鈎を有する。口縁端部の形状は方形状におさめるものの若干内方に拡張する。また鈎端部は上端部を強いナデによって上方に拡張している。胎土には石英粒を多量に含んでいる。617・618は瓦質土器釜で



第257図 SD1002出土遺物実測図 (1)



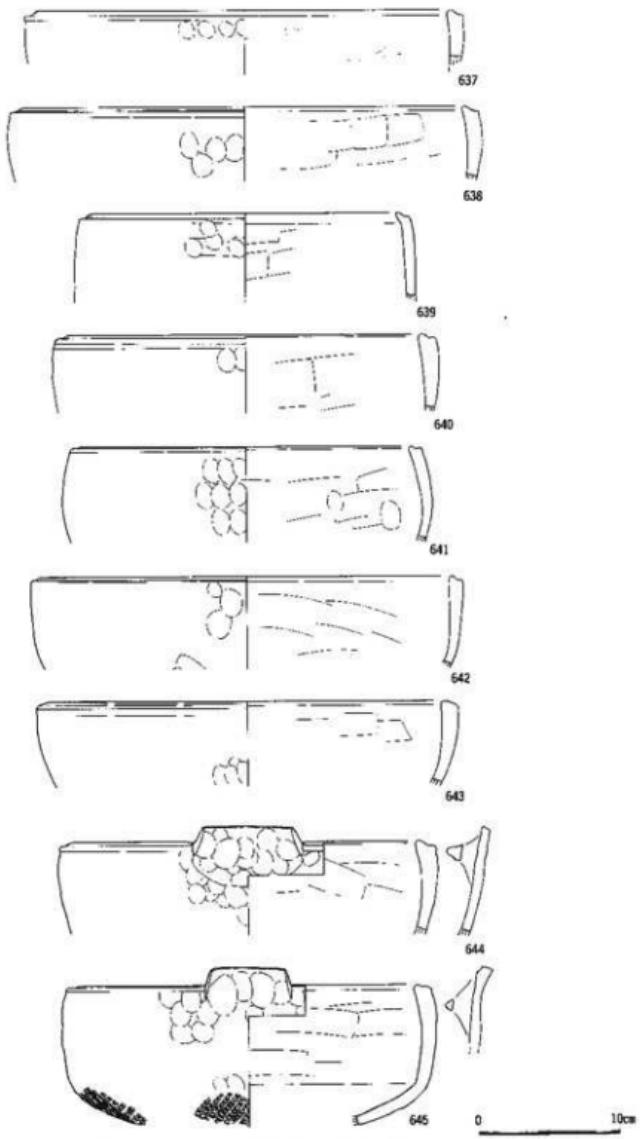
第258図 SD1002出土遺物実測図 (2)

617は尖り気味におさめた口縁部よりやや下がった位置に水平方向に延びる鈎を有する。調整は外面ヨコナデ、内面ヨコハケである。619～621は土師質土器釜で、鈎の付く位置に若干の形態差が認められるが、比較的しっかりした鈎を有するものである。調整は外面ヨコナデ、内面板状のナデが施されている。胎土には石英粒・砂粒を多く含み、619・620には外面にススの付着が認められる。622～632は土師質土器釜で、口縁部外面直下に付く鈎の張り出しは非常に短い。口径からは23.0cm前後を測るもの628～631、口径25cm前後を測るもの622～624・627・632、口径27.0cm以上を測るもの625・626がある。調整は外面ヨコナデでユビオサエの痕跡が残り、内面は横方向への板ナデ調整である。底部の調整は不明であるが632には僅かに幅広の格子状タタキの痕跡が残る。胎土には石英粒・砂粒が多く含まれている。633～636は土師質土器釜の脚部である。調整は縦方向への板ナデで、部分的にススの付着が認められる。637～643は土師質土器釜で、口縁直下の鈎状の拡張はほぼ消失しており、643では口縁上端面の凹線状の窪みも見られない。調整は内外面ともヨコナデで外面にはユビオサエの痕跡が残る。胎土は荒く石英粒・砂粒が多く含まれている。644・645は土師質土器鍋で内耳部に一对の孔が穿たれている。調整は外外面ヨコナデ、外底面には幅広の格子状タタキが残る。

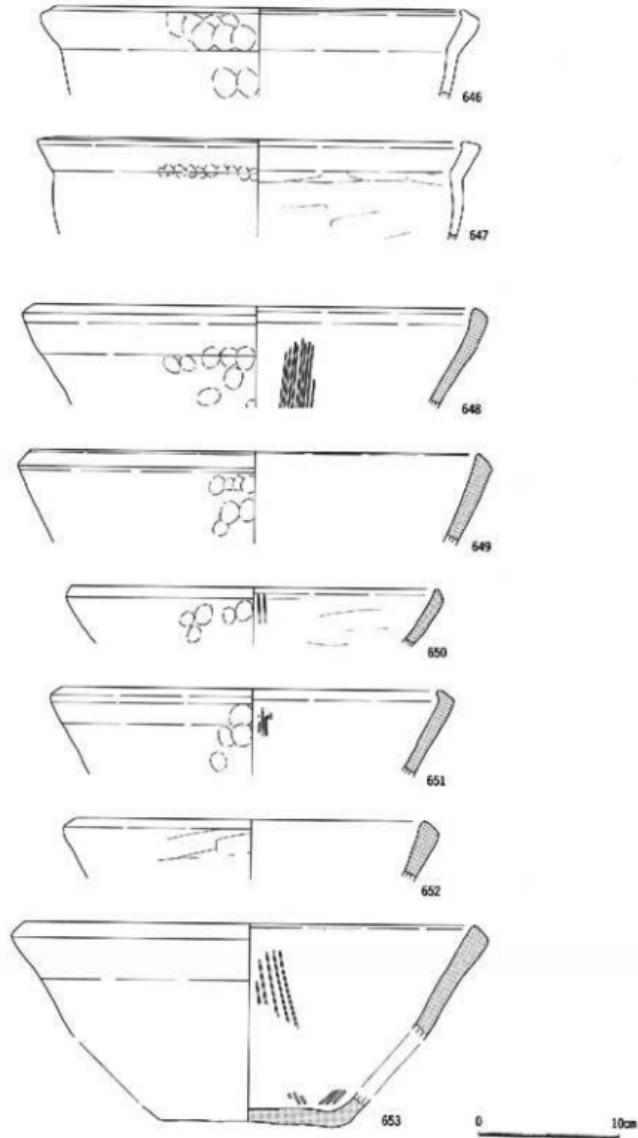
646・647は土師質土器鍋である。口縁部は体部より外上方に緩やかに立ち上がり、端部は方形形状におさめ上端部は若干内方に拡張する。調整は内外面ともヨコナデである。胎土には石英粒・砂粒を多く含む。648は土師質土器擂鉢であるが、胎土は非常に精良で瓦質の可能性も考えられる。口縁部は内輪気味に立ち上がり、端部は上端部を尖り気味に、外端部を丸くおさめる。調整は内外面ともヨコナデである。

649～653は瓦質土器擂鉢である。炭素の付着からは灰白を呈するもの650・651・653と黒色を呈するもの649・652に分けられる。口縁部の形態はほぼ断面方形におさめるが、651は上端面を内方に拡張する。654～656は土師器擂鉢で、胎土は荒く砂粒を多量に含んでいる。口縁端部はやや丸みをもった方形におさめる。調整は表面の剝離が著しく不明瞭である。657～659は備前焼擂鉢である。657は7条の摺り目を有し、口縁端部の上方への拡張は小さく時期的には備前焼Ⅳ期前半段階、14世紀に属する。また658は片口を有し、口縁部外面は上下に拡張する。659は口縁部の立ち上がりが高く外而に凹線状のナデが施されている。658は備前焼Ⅳ期後半14世紀末、659は備前焼Ⅴ期前半に属するもので、16世紀前半のものと考えられる。

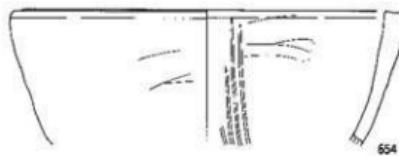
660・661は土師質土器の甕口縁部である。口縁部は体部から「く」の字に屈曲し、端部の断面形状は若干丸みをもった方形を呈している。調整は内外面とも板ナデ痕が明瞭に残る。胎土には石英粒・砂粒・赤色粒が多く含まれている。産地は不明である。662・663は備前焼甕口縁部で幅広の玉縁状を呈する。622には口縁折り返しの痕跡が残る。時期は備前焼Ⅳ期である。664は甕片で前面には庇が付くものと考えられる。上端部は丸くおさめ、調整は外側ハケ、内面は粘土紐痕を明瞭に残している。胎土には砂粒を多く含んでいる。



第259図 SD1002出土遺物実測図 (3)



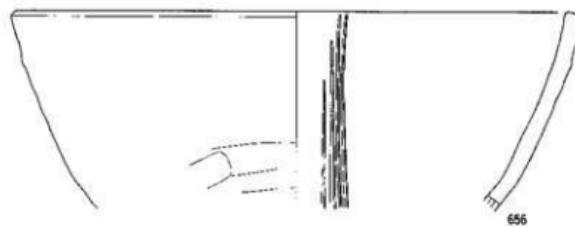
第260図 SD1002出土遺物実測図 (4)



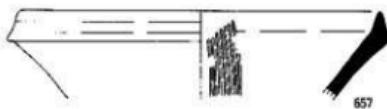
654



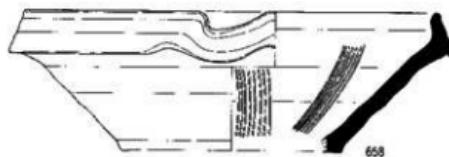
655



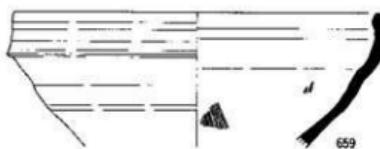
656



657



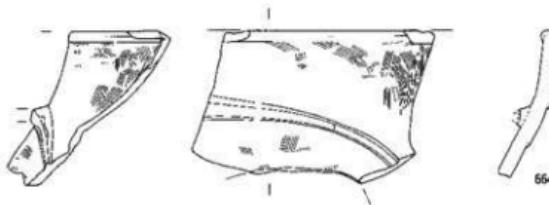
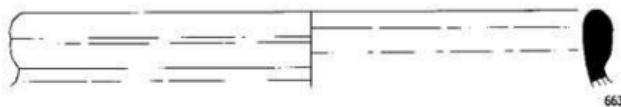
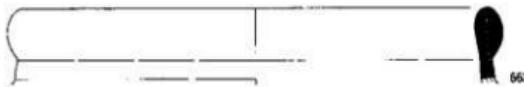
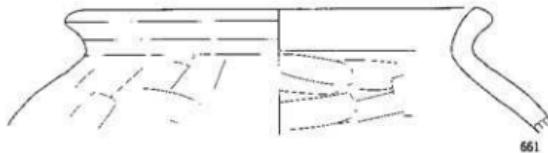
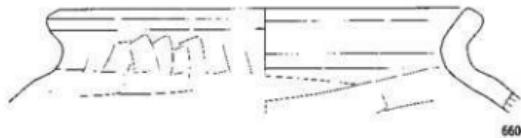
658



659

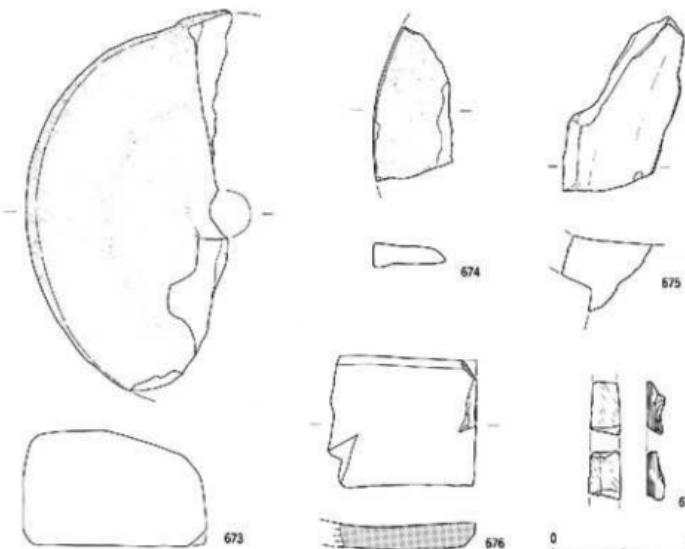
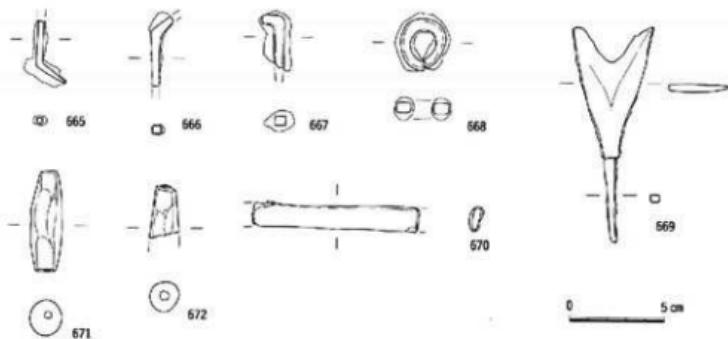
0 10cm

第261図 SD1002出土遺物実測図 (5)



0 10cm

第262図 SD1002出土遺物実測図 (6)



第263図 SD1002出土遺物実測図(7)

665～667は鉄釘と考えられるものである。668は環状を呈する鉄製品で断面方形状を呈する。669は鉄製の榧又鎌で、全長11.5cm、鎌身長7.0cm、鎌身の最大幅は4.3cmを測る。670は刀の柄の部分で、鉄製の茎部を銅板で巻いているものである。673～675は砂岩製の石臼で、673の中央部には穿孔が認められる。676は瓦質の平瓦で、凹面には僅かに布目痕が認められる。

677は粘板岩製の砾石で使用面は3面認められる。671・672は土師質の管状土錐である。

溝3 (SD1003) (第264図)

2号屋敷地と3号屋敷地の間を東西方向に延びる溝で、西端は自然流路1 (SR1001) と合流する。東端は若干北側に偏し溝1 (SD1001) と平行する。検出した溝の規模は東西約56.0m、幅約3.5m~4.0mで、開口部では8.0mを測る。

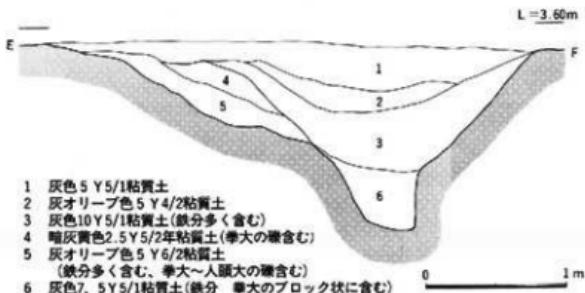
断面形状および深さは土層断面A-B地点 (第247図) では初期の掘削は断面逆台形状を呈し、2段掘りで南側から緩やかに掘り込まれた後に垂直気味に落ち、底面は平坦面を形成している。溝埋没段階での再掘削は断面幅広のV字状を呈し、溝幅も1.80m程度に縮小している。深さは初期の段階では約1.6m、再掘削段階では約0.72mを測る。溝内堆積土は2時期とも最下層に粘性の強い灰色粘質土が堆積しており、常時滯水および流水の状況を示している。

土層断面E-F地点 (第264図) でも同様に再掘削の状況がみられる。断面形状は2段掘りされており底部は逆台形状を呈し、埋土は鉄分をブロック状に含む灰色粘質土である。再掘削時の溝幅は2.7m、深さ0.86mを測り、断面形状は幅広のU字状を呈する。最下層 (3層) には鉄分を多く含む灰色粘質土が堆積しており常時滯水状況が考えられる。

溝の埋没時期は第1層の灰色粘質土の堆積時期にはほぼ機能を失っており、出土遺物から概ね15世紀後半から16世紀前半と考えられる。

溝3の構築時期および機能については屋敷地を区画する溝と方向性等から相関関係が認められる。

また溝のもつ規模および埋土の状況から流路としての痕跡が認められることから、灌漑用水利としての機能を有していたものと考えられる。出土遺物には吐き出し部において10世紀代の遺物が認められるものの明確な掘削時期の特定はできないが屋敷地との関連からほぼ屋敷造設時に関連して掘削なし再掘削したものと考えられる。



第264図 SD1003土層断面実測図

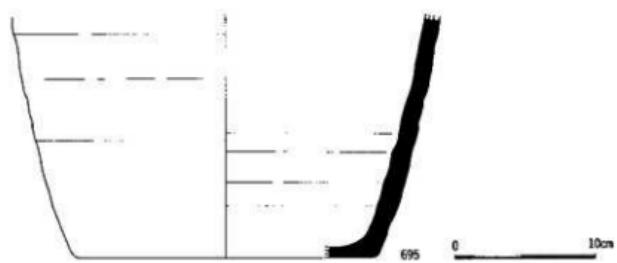
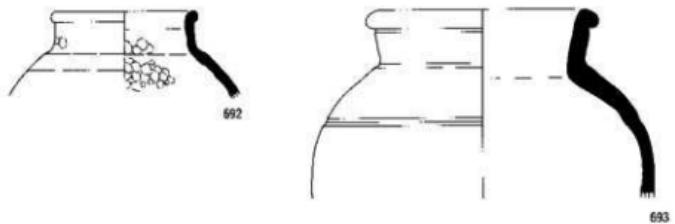
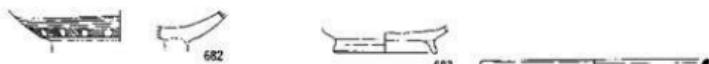
出土遺物（第265～273図）

678～680は土師質土器小皿で、680は京都系のいわゆる底部中央を押し出した「へそ皿」と呼ばれるものである。681は土師器皿で口縁端部は丸くおさめる。調整は内外面ともヨコナデで底部は回転ヘラ切りである。682・683は高台付の椀か杯の底部片である。683は断面U字状の高台が付くもので、外面には赤色彫彩の痕跡が残る。

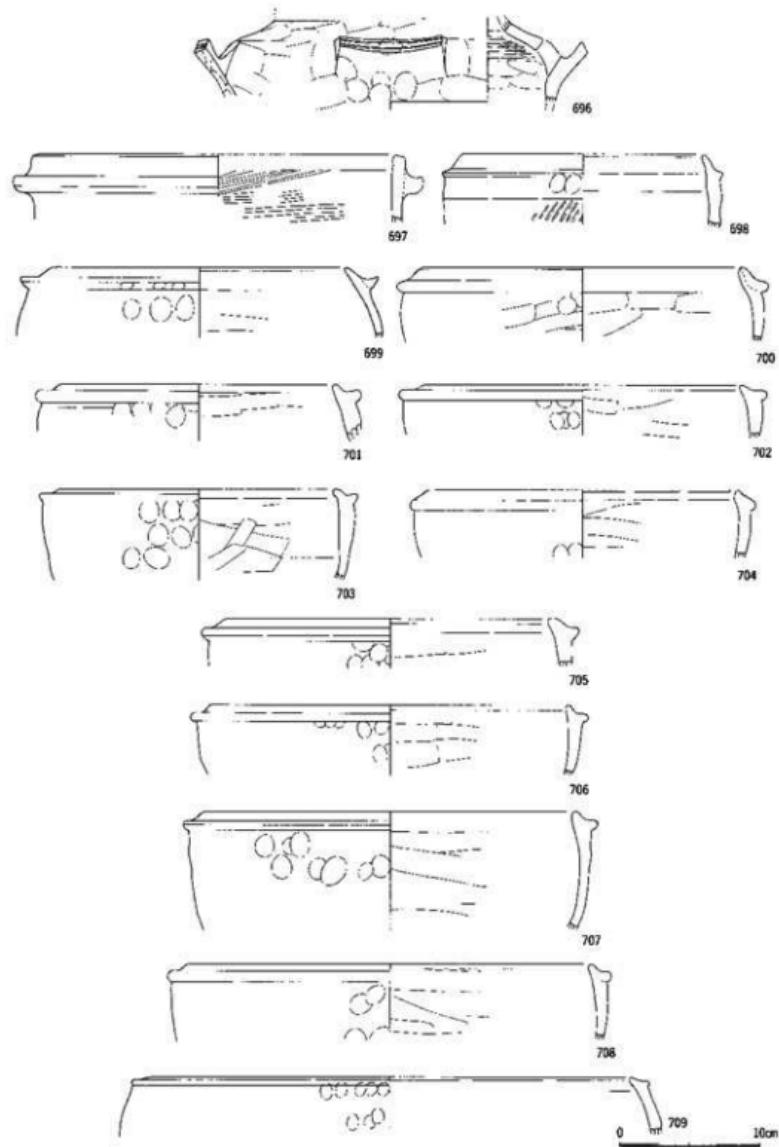
684～687は青磁碗である。684は断面方形状の高台を有するが、外面は一部面取りしている。釉は豊付を越えて高台内におよび、高台内の釉は削り取っている。685は外面に細線による蓮弁を施したものである。高台は高く下端には斜め方向に面取りを加えている。釉は暗緑色を呈し、施釉は豊付を越えて一部内面におよぶ。上田分類のB～IV類にあたり、時期的には15世紀段階のものと考えられる。686は復元器高3.2cm前後を測る杯で、外面には退化した蓮弁を有する。施釉は高台豊付を越え一部高台内におよぶ。時期的には概ね14世紀後半から15世紀前半と考えられる。687の釉の発色は非常に悪く白色を呈している。外面には口縁部から下がった位置に凹線が巡り、その中に雷文帯が巡るものと考えられる。また、部分的に蓮弁状の凹線が認められるが明瞭ではない。上田分類のC類にあたる。688～690は白磁片で、688・689は白磁皿で高台には抉り込みはない。また、釉は外面下半部まで、高台までは至らない。釉には細かな貫入がはいり、森田分類のD群に相当するものである。691は染付碗でいわゆる「連子碗」と呼ばれるものである。小野分類のC群碗III類にあたる。時期的には15世紀後半から16世紀前半頃と考えられる。⁽¹⁰⁾

692～695は溝中央部より束側において集中して出土した備前窯壺である。692・693の口縁部は短く立ち上がり、端部は外に曲げ小さく玉縁状におさめる。693の肩部には2条の沈線が巡る。694はやや外反気味の口縁部を有し、端部は玉縁状におさめる。肩部には2段にわたり輪描きによる多条沈線が巡る。時期的には備前焼III期からIV期初頭、14世紀代と考えられる。695は壺の体部から底部片である。調整は内外面ヨコナデで、外面には薄く自然釉がかかる。色調は灰色を呈する。

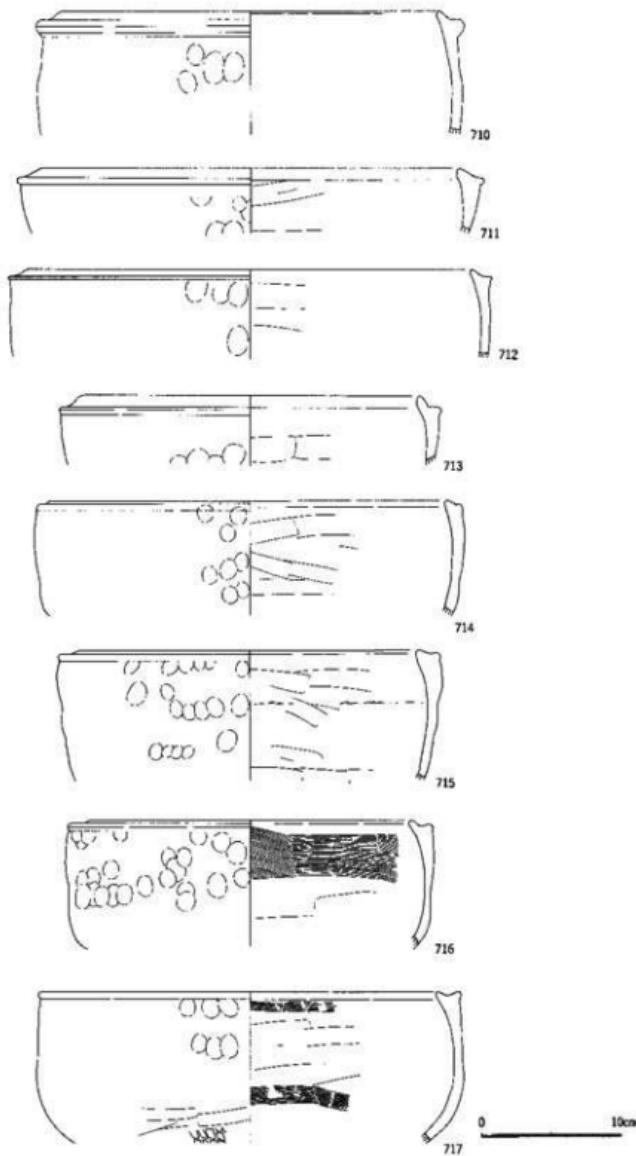
696は土師質土器釜で、口縁部は直立気味に短く立ち上がるものと考えられる。肩部には一对の方形状の把手を貼り付け、内側に穿孔を施している。697は方形状におさめる口縁部直下に水平方向に短い鈎を巡らせた土師器釜である。時期的には10世紀代のものと考えられる。698は瓦質土器釜で尖り気味の口縁部直下に断面三角形状の小さい鈎を巡らせており、調整は体部外面に斜め方向の水平タタキを施す。699～738は土師質土器釜である。口縁部および体部外面に張り出す鈎の形状から分類が可能である。口縁部直下に明瞭な鈎状の突出部を形成するもの699～713、鈎状の張り出しが水平方向に張り出さず上方に延び口縁部に幅広の凹線を形成するもの714～728、鈎状の痕跡をほとんどとどめず口縁部と一体化し、口縁上端部に弱い沈線または凹線を巡らす形態を示すもの729～733・735～738に分類される。体部の調整



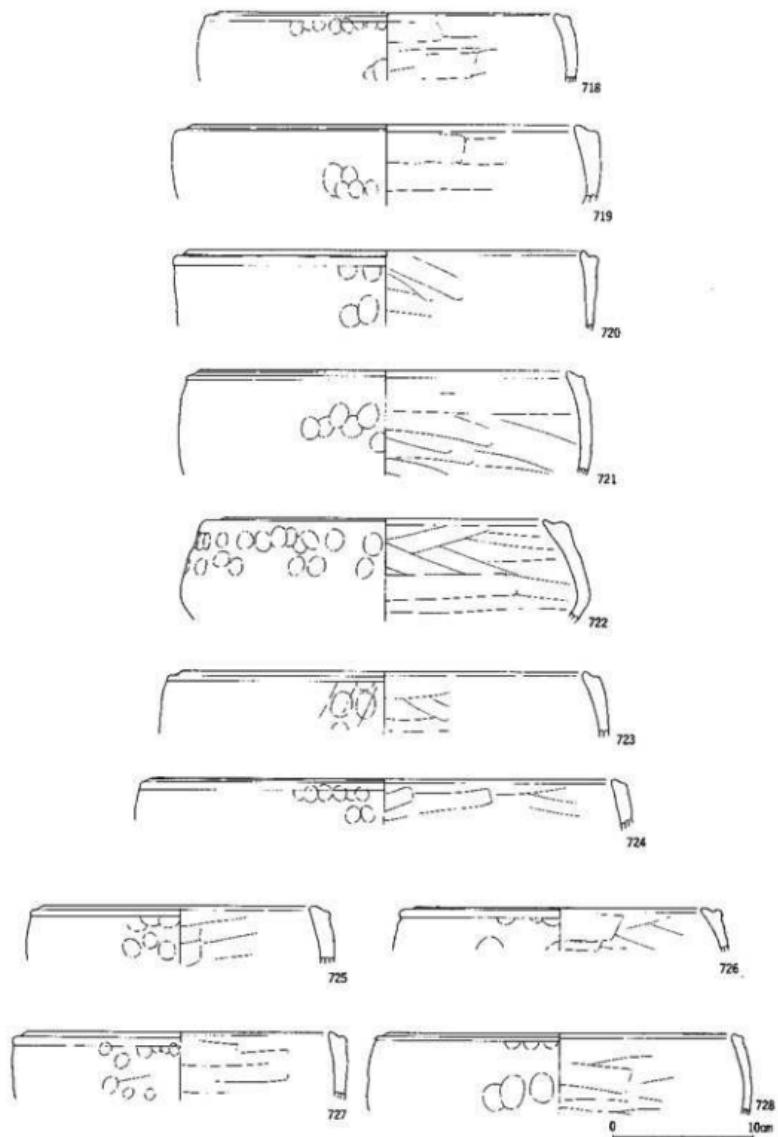
第265図 SD1003出土遺物実測図 (1)



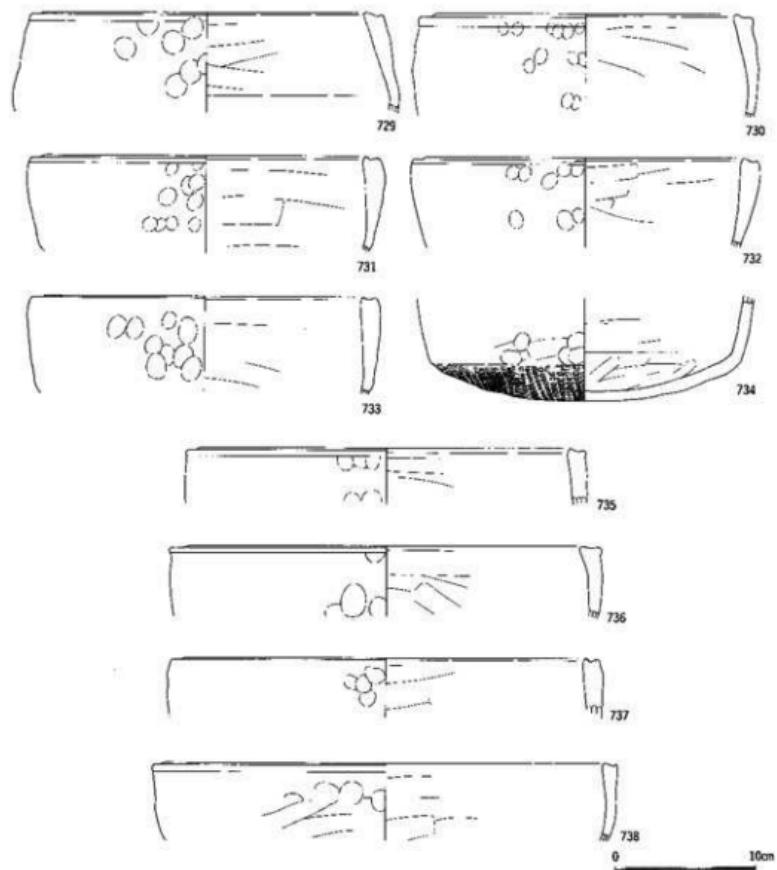
第266図 SD1003出土遺物実測図 (2)



第267図 SD1003出土遺物実測図 (3)



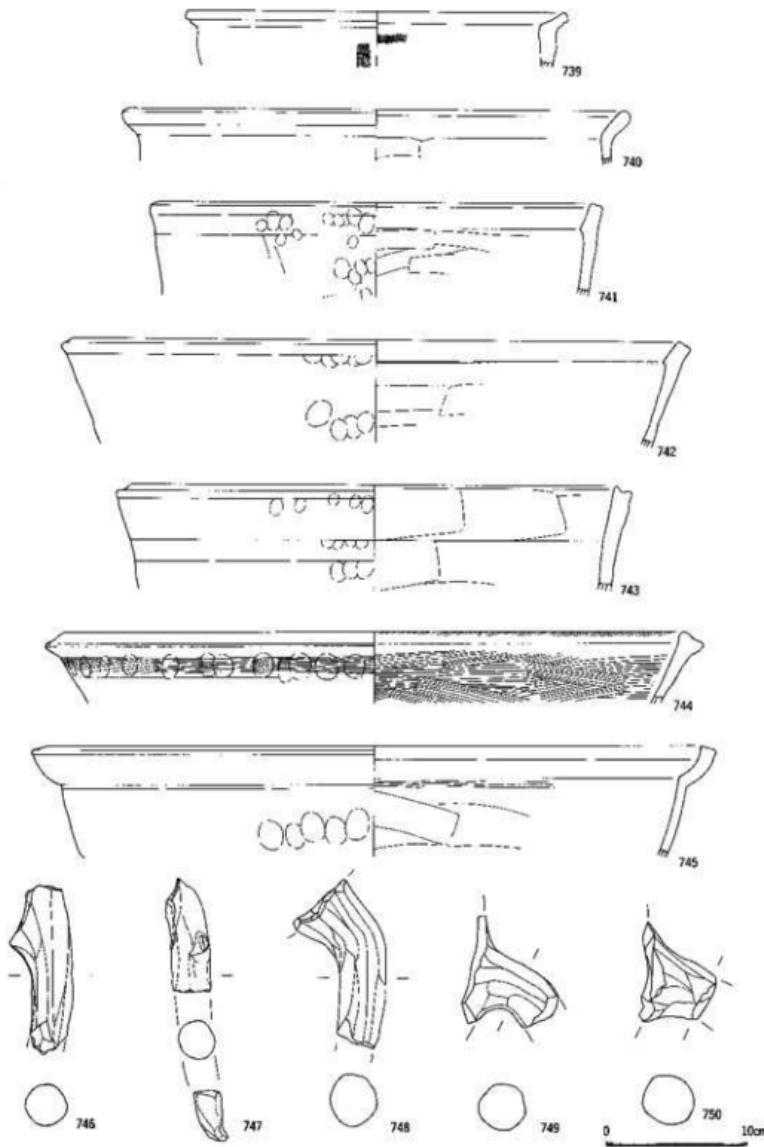
第268図 SD1003出土遺物実測図 (4)



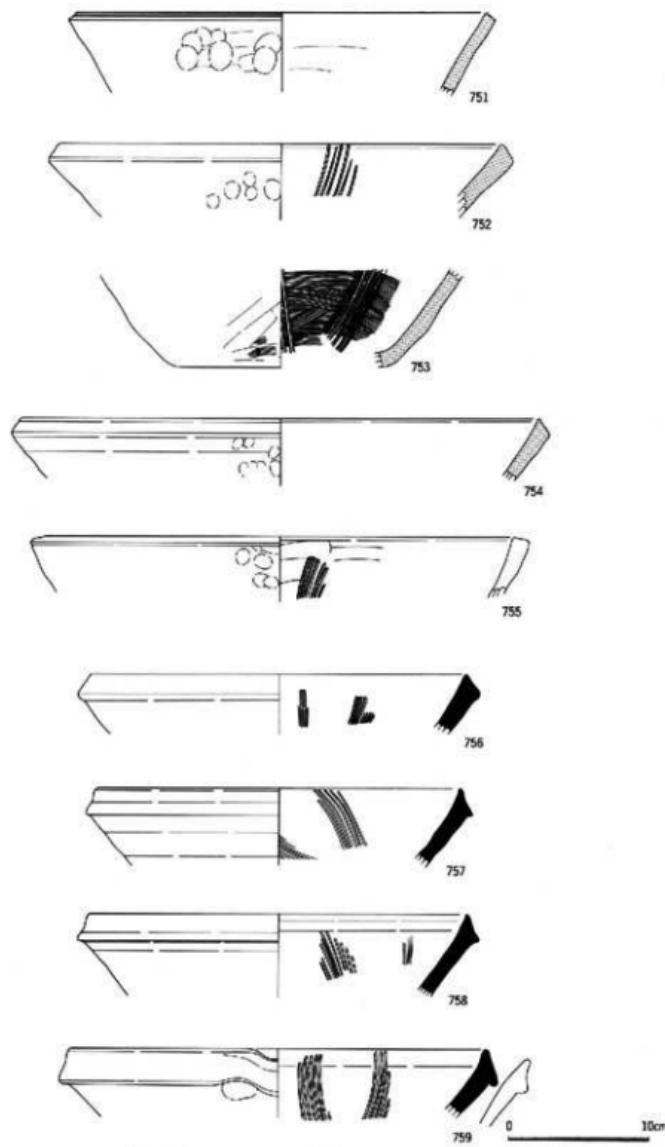
第269図 SD1003出土遺物実測図 (5)

は外面ユビオサエ後ナデ、内面は横方向への板ナデ状であるが、716・717の内面にはヨコハケが施されている。底部片の出土は極めて少ないが、717・734には格子状タタキが認められる。胎土には多くの石英粒・砂粒が含まれ、若干雲母を含むものも見られる。

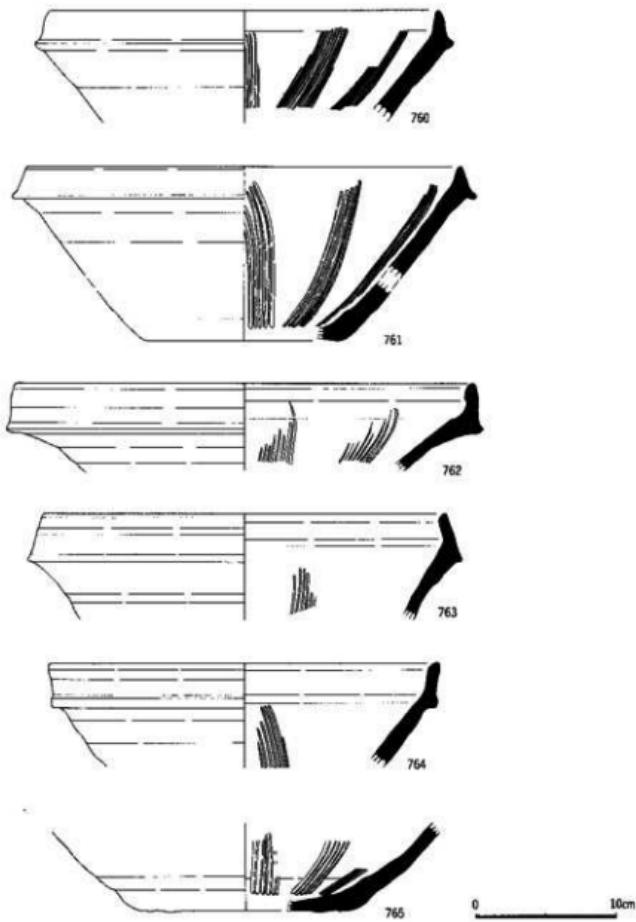
739～745は土師質土器鍋の口縁部である。739は口縁部が短く外方に屈曲し、方形状におさめるもの、740の口縁部は体部から「く」の字状に屈曲し端部を丸くおさめるものである。741・742の口縁部は体部から直線的に外上方に延び、そのまま端部を方形状をおさめるもので、内



第270図 SD1003出土遺物実測図 (6)

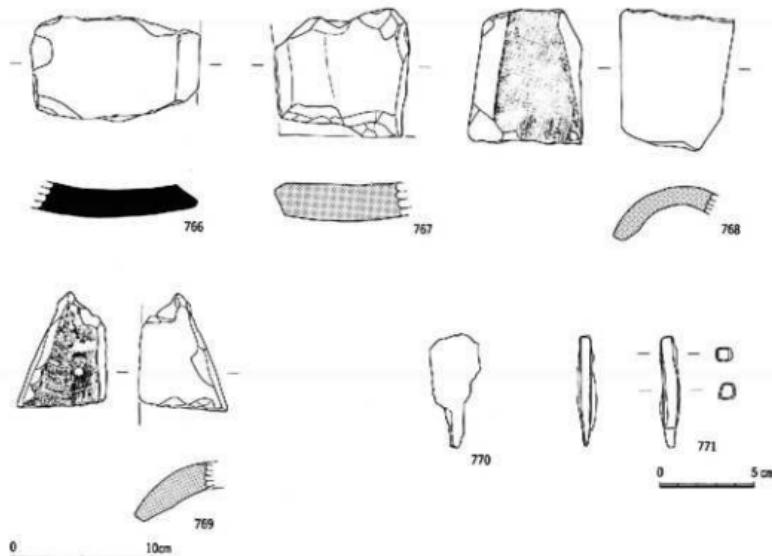


第271図 SD1003出土遺物実測図 (7)



第272図 SD1003出土遺物実測図 (8)

面には段を有し口縁部を形成している。調整は外面ユビオサエ後ヨコナデ、内面ヨコナデである。743は外上方に延びた体部の上端部を若干屈曲し口縁部を形成しており、端面には凹部を巡らせている。調整は内面板ナデ、外面ヨコナデで、ユビオサエの痕跡が残る。744は外上方に延びる口縁部で、端部を上下に拡張する。調整は内面ヨコハケが施されている。745は内彎する口縁部を有するもので、端部は方形状におさめる。746は瓦質土器釜の脚部、747～750は土師質土器釜・鍋の脚部である。750は脚部欠損後に再調整が加えられている。



第273図 SD1003出土遺物実測図 (9)

751～754は瓦質土器の擂鉢である。751は口縁端部を方形状に、752・754は上端部を若干拡張する。調整は内外面ともヨコナデで、753の体部下半には外面に強い板ナデ痕、内面にはハケ状の痕跡が残る。755は土師質土器の擂鉢で、口縁端部は方形状におさめる。756～765は備前窯擂鉢である。時期的には756が口縁端部を拡張しないことから備前焼Ⅲ期末の14世紀後半、757～761が口縁端部を上下に僅かに拡張することからⅣ期前半から後半の15世紀代、762～764は口縁部を直立気味に上方に大きく拡張したものであるが口縁部外端面には凹線を形成していることからⅣ期末からⅤ期初頭段階、16世紀前半代と考えられる。摺り目は内底面から放射状に施されるが、757は斜め方向の摺り目が施されている。

766・767は平瓦で、766は須恵質、767は瓦質である。768・769は瓦質の丸瓦で、凹面には布目痕が残る。770・771は鉄製品で、771は断面方形形状を呈し鉄釘と考えられる。770は錆化が著しく形態は不明である。

時期的には古代の遺物も若干含まれるが、概ね14世紀から16世紀前半代が占める。土師質土器等には擗の形態の退化傾向に時期的な幅が認められ、また土師質土器の鍋では740・745は13世紀代の口縁の形態をとどめるが、741～744はやや後出のものと捉えられる。

また、2号屋敷地側の溝斜面では凝灰岩製の五輪塔が廃棄された状況で出土している。

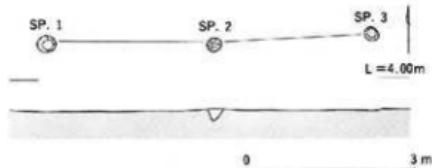
溝4 (SD1004) (第274図)

3号屋敷地を区画する溝で、屋敷地南西においてL字状を呈し南溝は溝3 (SD1003) と平行し、西側溝は自然流路1 (SR1001) に沿って形成されている。南側溝の規模は東西方向で長さ54.0m、幅は東隅で約1.80m、西側屈曲部で約4.0mを測る。西側溝は南北方向で長さ34.0m、幅2.30m前後を測る。溝の深さは約0.30m～0.50m前後を測り、断面形状は浅いU字状を呈する。溝底部の深さは南側(河道部付近)の屈曲部が東側より0.65m低くなっている。また溝3との隔たりの堤は認められない事から南溝は滞水時には溝3に流れ込む構造になっていたものと考えられる。西側溝は屈曲部で溝の高さからは終息しており、構造上は南溝と連結した一体の溝ではない。

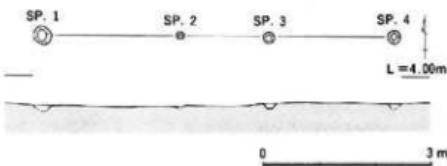
溝内埋土は下層部において若干の炭化物を含む粘質土が堆積しているが、溝の深さおよび溝3と連結することから當時滞水は考えられない。土層断面G-H地点(第274図)では2層、土層断面A-B地点では8層に分層され、溝の再掘削は南溝の自然流路に近い地点において確認される。



第274図 SD1004土層断面実測図



第275図 SA1017実測図



第276図 SA1018実測図

柵列17・18 (SA1017・1018) (第275・276図)

3号屋敷地南側、溝4 (SD1004) に平行して検出された柵列遺構である。柵列17は掘立柱建物41・45 (SB1041・SB1045) の南側に位置し、方向および規模は東西方向2間で長さ約6.0mを測る。柵列18は掘立柱建物37 (SB1037) および柵列19 (SA1019) の南側に位置し、方向および規模は東西方向に3間で約6.50mを測る。柵列自体は柵列17および柵列18を直線的なものと捉えたため分割したが、屋敷地の溝4に面する位置には溝に平行して数地点において柱穴が確認されており、本来溝4に沿った形での柵列が存在した可能性も考えられる。

柱穴内からの出土遺物は認められなかった。

出土遺物（第277～280図）

772は須恵器杯身で、田辺昭三偏年⁽¹¹⁾でMT85段階のものと考えられる。773は須恵器杯で、口縁部は内輪気味に立ち上がり端部は丸くおさめる。調整は内外面ヨコナデで、外底面は回転ヘラ切りである。また、内面には火襷の痕跡が認められる。時期的には9世紀代と考えられる。

774は和泉型瓦器椀口縁部であるが、二次焼成により炭素の吸着は消失している。時期的には尾上偏年III期に属するものである。

775・776は口縁端部を外反させる青磁碗で釉は比較的厚い、上田分類のD類にあたり15世紀前後の時期が考えられる。777は溝下層部から出土した青磁碗の底部片で、外面に細蓮弁と思われる線彫りの痕跡が認められる。778は同安窯系青磁小皿の底部片で、小片であるが無文となるものと考えられる。779は瀬戸・美濃系の天目碗の底部片である。高台部は糸切りの底部を浅く削り取り成形している。

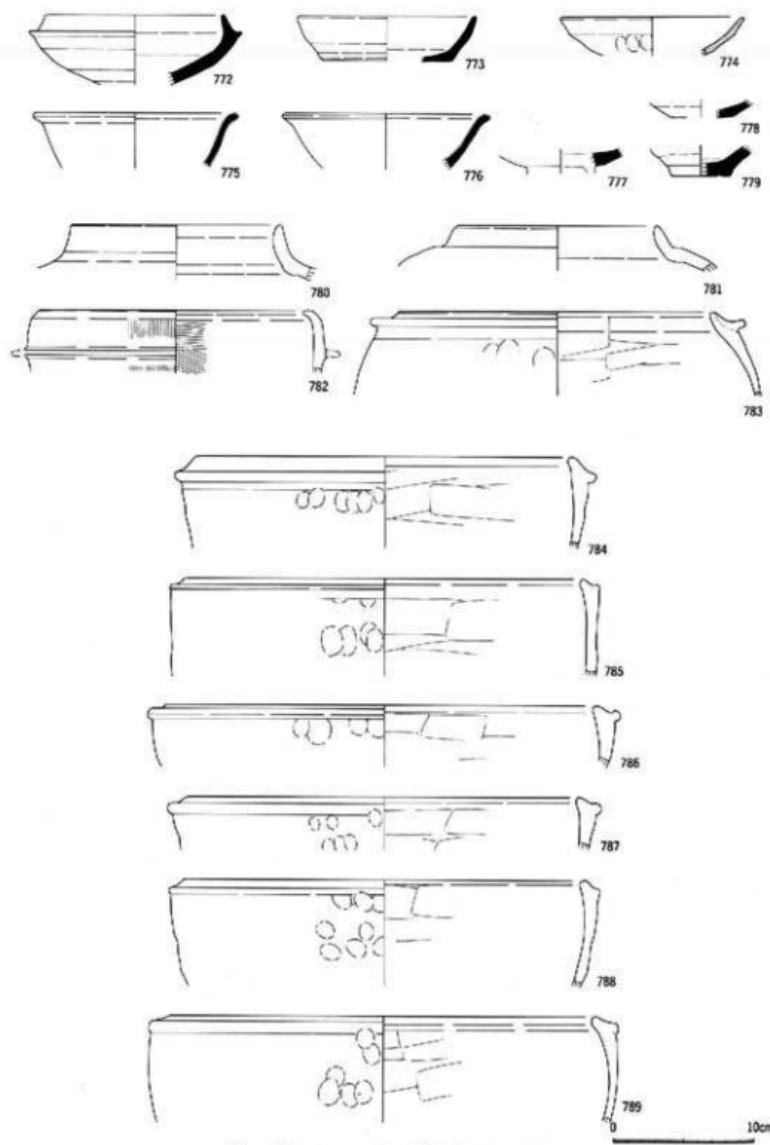
780・781は土師質土器釜で球形に近い体部に直立気味の短い口縁部が付くものである。782は土師質土器釜で、直立する体部の上端部に水平方向に延びた鈎を巡らし口縁部を内方に短く屈曲させたもので、形態的には鉄釜口縁部に類似する。調整は外面タテハケ、内面ヨコハケである。

783～798は土師質土器の釜である。784～796は上方に拡張した口縁部直下に僅かに鈎状の張り出しを持つタイプである。797・798はほとんど鈎状の張り出しを持たず、上端がほぼ平坦面を呈するタイプのものである。調整は外面ユビオサエの痕跡をとどめナデ調整、内面は板ナデ状のヨコナデである。このうち797は内面ヨコハケ調整である。799・800は土師質土器鍋である。いずれも口縁部は外上方に延び、端部は方形状におさめるもので口縁内面に屈曲により稜が形成されている。801は土師質土器釜の把手部で、内側に円孔を施している。

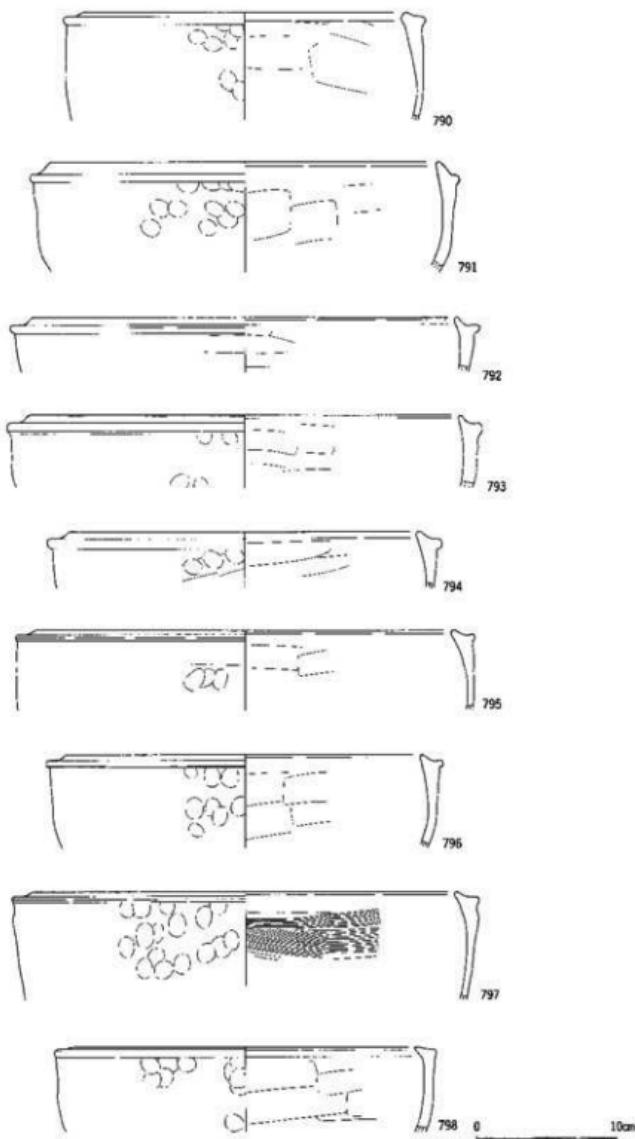
802～804はこね鉢で802は須恵質、803は土師質である。804は土師質土器擂鉢の底部分で内面に4条の割り目が施されており、外底面には回転糸切りの痕跡が残る。805・806は土師質土器擂鉢の口縁部で、口縁部の形態は方形状におさめる。調整はヨコナデであるが806にはユビオサエの痕跡が残る。

807～811は備前窯擂鉢である。時期的には807・808が備前焼IV期後半の15世紀代、809～811は口縁部を直立気味に高く拡張し、811には外面に凹線状の強いナデが施されていることなどからV期で16世紀前半代と考えられる。

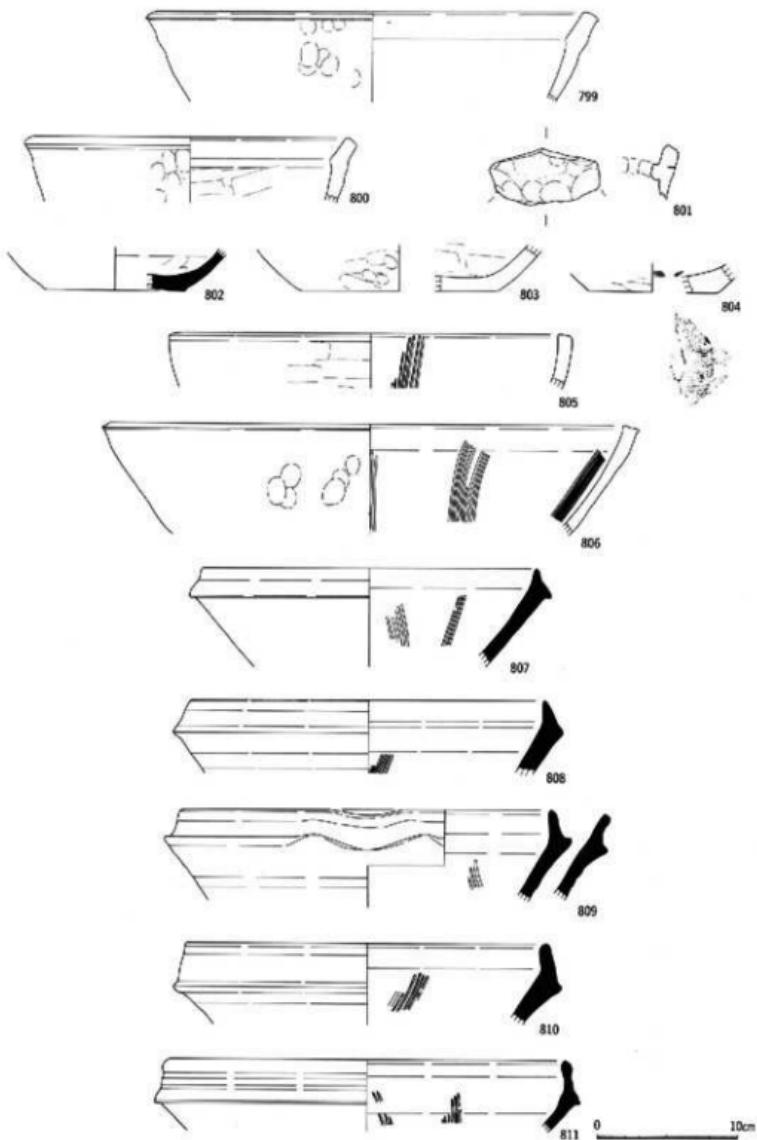
812・813は瓦質の丸瓦で、凹面には布目痕が813の凸面には繩文タタキの痕跡が残る。814は土師質の管状土鉢で重さ約11.0gを測る。815・816は欠損するが鉄釘と考えられる。



第277図 SD1004出土遺物実測図 (1)



第278図 SD1004出土遺物実測図 (2)



第279図 SD1004出土遺物実測図 (3)

溝2・3・4 (SD1002・1003・1004)

自然流路1 (SR1001) に合流する溝は溝3 (SD1003) のみであるが、3条の溝の埋没した時期は第247図の土層断面の第1・2・3層に対応し、包含する遺物は溝2・3・4合流遺物として取り上げたものより概ね15世紀～16世紀前半代と考えられ遺構の終末はほぼこの時期と捉えられている。

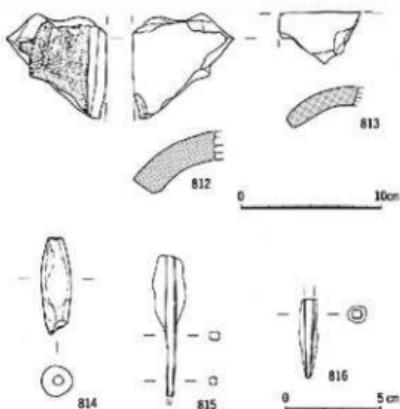
出土遺物 (第281～285図)

817は黒色土器A類碗で口縁外面上端部にも黒色帯が巡る。口縁部は内彎気味に立ち上がり端部は尖り気味におさめる。調整は外面ヨコナデ、内面はヨコ方向へのミガキ調整である。818は和泉型瓦器碗で、調整は内面ヨコ方向へのヘラミガキ、外面はユビオサエ後部分的にヨコ方向へのヘラミガキが施されており、時期的には尾上偏年III～II期にあたる。819は楠葉型瓦器碗と考えられるもので、調整は体部外面ユビオサエ後口縁部は強いヨコナデにより屈曲、内面はヨコナデ後非常に細い螺旋状のヘラミガキが施されている。時期的には底部に張り付けた高台などから13世紀代と考えられる。胎土は黄褐色を呈する。820は土師質土器小皿で、底部は静止糸切りである。口縁端部には一部ススの付着が認められる。821は高台付白磁皿で口縁部は底部から内彎気味に緩やかに立ち上がり、端部は丸くおさめる。旋軸は体部のみで高台までは至らない。内面見込みには目跡が残る。森田分類のD群にあたり時期的には15世紀代と考えられる。822・823は青磁碗である。822は比較的厚い釉がかかり、口縁部は外反する。上田分類のD類である。823は体部片で外面に蓮弁が施されている。

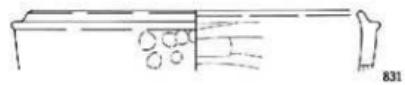
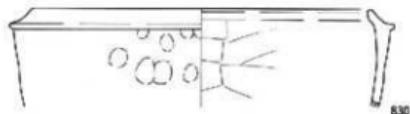
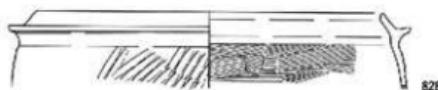
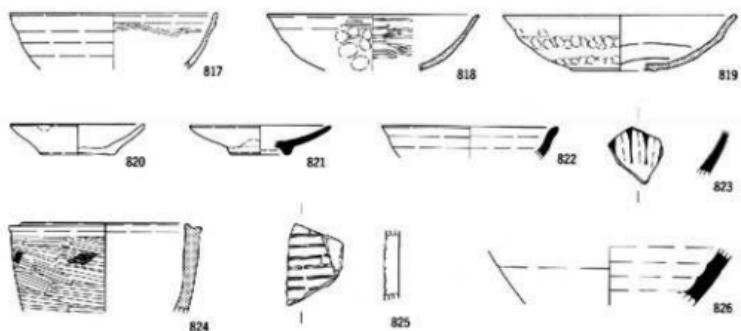
824は瓦質土器の香炉と考えられるもので、体部外面に菱形文がスタンプされている。形態的には直立する体部で、口縁内端部は上方につまみ出し受け口状に成形している。調整は外面綿密な横方向へのヘラミガキ、内面横ナデ調整である。口縁部内面にはススの付着が認められる。325は土師質土器で卸目皿と考えられる。826は備前窯壺の体部片で内面には強いヨクロナデによる凹凸が認められる。

827はいわゆる擬津型の釜で直立気味の体部の口縁部直下に断面方形状の鉗を巡らせたものである。調整は体部外面タテハケ、内面横ナデである。胎土には雲母・角閃石を含み搬入品である。

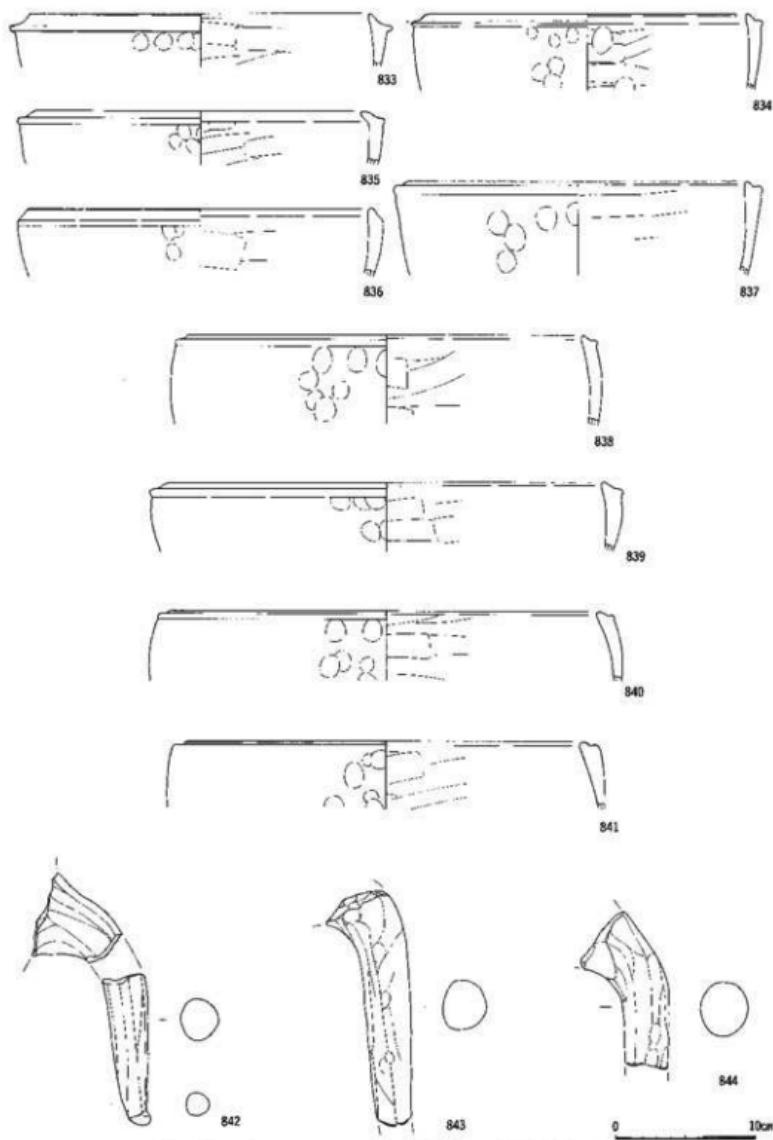
828～841は土師質土器釜である。828は内向する口縁部の外面に断面三角形の鉗を巡らせた



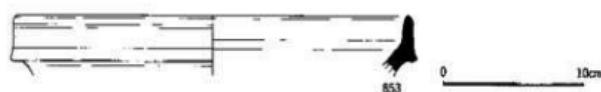
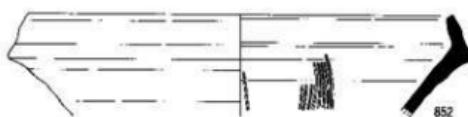
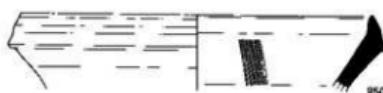
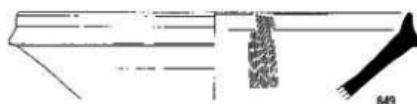
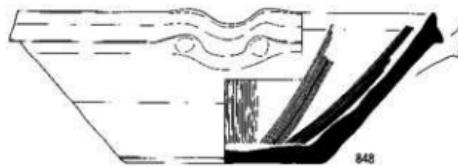
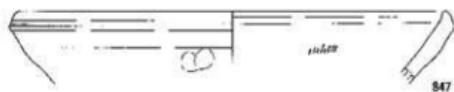
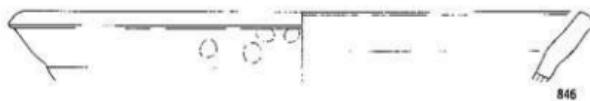
第280図 SD1004出土遺物実測図 (4)



第281図 SD1002・1003・1004合流出土遺物実測図 (1)



第282図 SD1002・1003・1004合流出土遺物実測図 (2)



第283図 SD1002・1003・1004合流出土遺物実測図 (3)

もので、体部外面には幅広の斜位の平行タタキが施されている。中島田遺跡では鍋C IIに分類されたもので、時期的には15世紀段階が考えられる。本遺跡内でも出土数は少ない。829は強く張りだした方形状の鋸が巡るタイプ、830～835・838・839は口縁部が短く立ち上がりほぼ直下に弱い鋸状の凸帯が巡るタイプである。836・837・840・841は水平方向に延びる鋸状の弱い凸帯が見られず口縁上端面部が一体化したタイプである。調整はいずれも外面ユビオサエの後ヨコナデ、内面板状のヨコナデである。842～844は土師質土器釜の脚部で、調整は縱方向への板ナデである。

845・846は土師質土器鍋で、口縁部は体部から若干屈曲するもののほぼ直線的に延び、内面の屈曲部に弱い稜を形成する。口縁端部は僅かにつまみ上げるもの845、方形状におさめるもの846である。

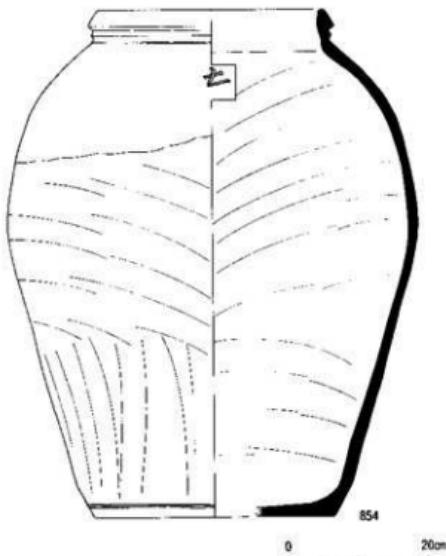
847は土師質土器の擂鉢である。口縁部は内輪気味に立ち上がり端部は上方に拡張する。胎土は白色で精良である。848～853は備前窯擂鉢で848は片口部が残存する。各時期は口縁部の形態から上下に小さく拡張し端部を尖り気味におさめるもの848～850は備前焼偏年のIV期後半、上方に大きく拡張し端部を方形状におさめるもの852・853はV期前半に属するものと考えられる。

854は備前窯甕で溝2・3・4の各覆土および自然流路1(SR1001)内の石列遺構面からも出土しており広範囲に散乱している。器高は72.0cmを測り、体部は長胴形で体部最大径を上位にもつ。口縁部は短く直立し頸部には強いナデにより弱い凸帯を巡らす。また、外端面には粘土帶を貼り付け、のち断面三角形状に成形する。肩部にはヘラ描きによる「土」が刻まれている。時期は備前焼V期、16世紀前半とと考えられる。

855・856は須恵器甕部片で、内面に同心円状の当て具の痕跡が残る。857は鋸化が著しいが小刀片の切先部とおもわれる。

858は土師質の管状土器である。

859は凝灰岩製の砥石で3面に使



第284図 SD1002・1003・1004合流出土遺物実測図 (4)

用痕が認められる。

溝5 (SD1005) (第286図)

1号屋敷地北西隅において検出した溝で、西側を溝1 (SD1001) によって切られており、東側は溝6 (SD1006) の土層断面図から南方向に屈曲するものと考えられる。検出した規模は長さ8.0m、幅1.40m~2.20mを測り、深さは0.24m前後を測る。溝内埋土は3層に分層され砂質土がレンズ状の堆積を示している。

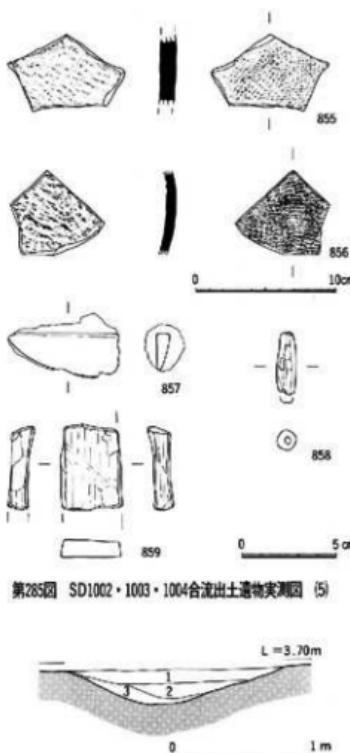
出土遺物 (第287図)

860~863は土師質土器釜で口縁部の形状は上端部の立ち上がりが弱く、また鉢状の突出も小さい。体部の調整は内外面とも板状のヨコナデで、外底面には格子目の大きい叩きが施されている。864は備前焼鉢で、口縁部の立ち上がりは比較的高く時期的には備前焼Ⅳ期末からV期前半代と考えられる。

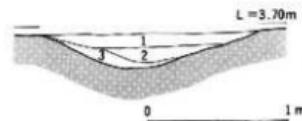
溝5は平面図上では溝1 (SD1001) に切られ、溝6 (SD1006) と合流するが、出土遺物および土層断面から見れば埋没時期は同時期と考えられる。掘削時期は後出の遺構である。

溝6 (SD1006) (第288・289図)

1号屋敷地中央部において検出されたL字状の溝で、北隅は溝1 (SD1001) と接するが切り合い関係は土層断面から明確にされなかった。また、屈曲した南側溝は東側で終息する。溝の規模は南北長21.0m、東西8.0m、深さ0.12m~0.35mを測り溝底面の高さは南側から北側に向かって約0.12m低く傾斜している。また溝幅は1.20m~2.20m前後で一定していない。土層断面図 (第288図) からは第2・4・5層が対応し、第1層は南に屈曲する溝5に対応するものと考えられる。溝内埋土は黄色系統の砂質土で當時滞水の状況は認められず、東側の掘立柱建物の区画を形成する溝と考えられる。



第286図 SD1002・1003・1004合流出土遺物実測図 (5)



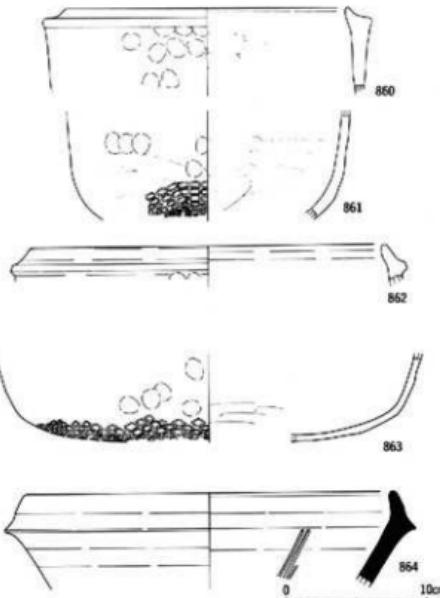
第286図 SD1005土層断面実測図

- 1 灰オリーブ色5Y5/2砂質土
- 2 黄褐色2.5Y5/4砂質土
- 3 喙灰黄褐色2.5Y5/2砂質土

出土遺物（第290～292図）

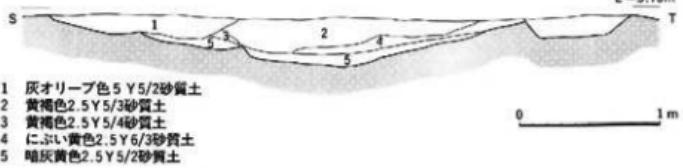
865は土師質土器杯である。口縁部は強いヨコナデにより外反気味で端部は丸くおさめる。866は土師器杯口縁部で端部は若干つまみ上げており、調整は内外面ともヨコナデである。また内外面とも赤色塗彩されている。867は緑釉陶器皿と考えられる底部片で、断面方形状の高台を貼り付けている。焼成は須恵質で、施釉は全面に施されず、内底面および高台部には及ばない。868・869は土師器の鉢で、868は内彎気味の体部から「く」の字状に屈曲した口縁部を有するもの、869は体部が内彎気味に立ち上がり、そのまま口縁部に至るもので端部は肥厚させ丸くおさめる。

870～873は土師質土器釜である



第287図 SD1005出土遺物実測図

L = 3.70m



第288図 SD1006土層断面実測図 (S-T)

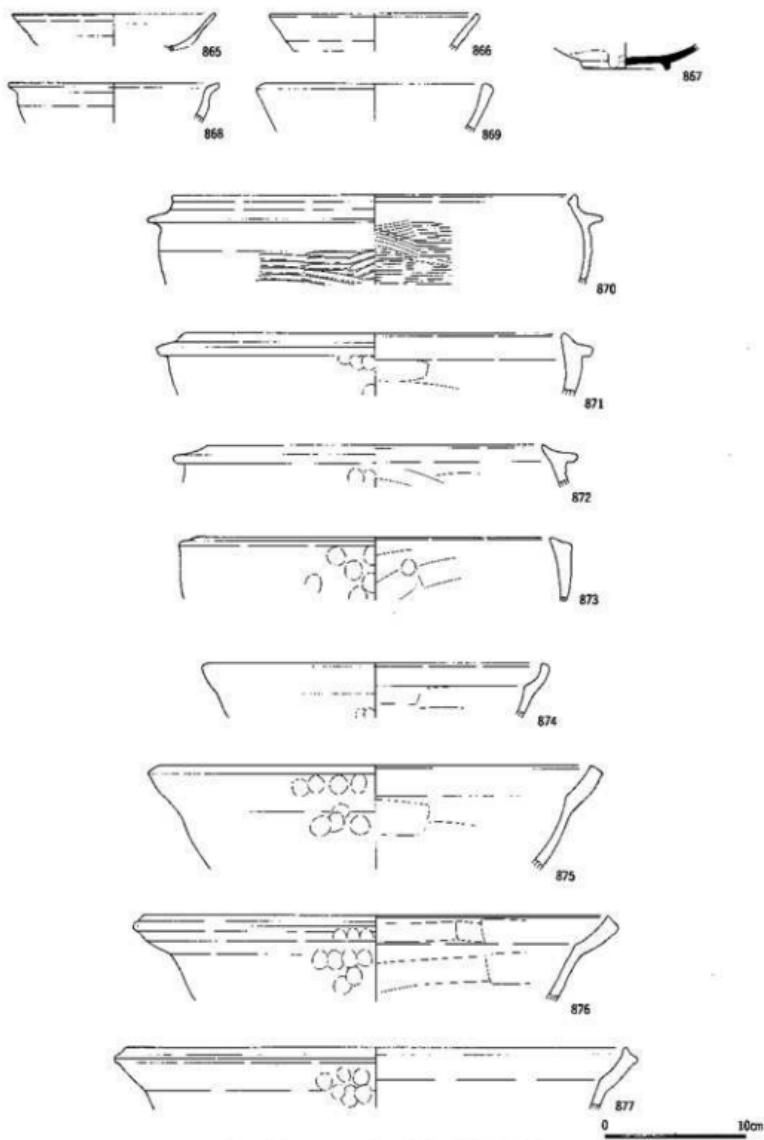
る。870は口縁部を内向させ口縁端部より若干下がった位置に断面三角形状の鉢を巡らす。調整は外面斜位の平行タタキ、内面横方向へのハケ調整である。溝2・3・4合流出土遺物828と同形態である。871・872は短く立ち上がる口縁部直下に水平方向に小さく貼りつけた鉢が巡るタイプのもの、873は明確な鉢状の凸帯が巡らないタイプである。874～877は土師質土器釜である。口縁部は体部から内彎気味に立ち上がり端部を方形状におさめるもの874・875と、端面に強いナデを

第289図 SD1006土層断面実測図 (Q-R)

L = 3.70m

0 1m

1 暗灰黄色2.5Y5/2砂質土



第290図 SD1006出土遺物実測図 (1)

施し上端部を若干つまみ上げるもの
876・877がある。調整は外面ヨコナデで
ユビオサエをとどめ、内面は板状のヨコ
ナデが施されている。878は土師質土器こ
ね鉢で、外上方に延びる体部上端部を尖
り気味におさめ口縁部を形成する。調整
は表面の剥離が著しいが、ヨコナデと考
えられる。879は土師質土器の搗鉢で口縁
端部は方形状におさめる。底部は若干突
出し、ナデ調整である。880・881は土師
質土器の搗鉢であるが焼成は非常に堅致
である。880は口縁端部を方形状におさめ
片口部をひねり出している。

882は瓦質の平瓦である。側辺部は斜辺
に成形する。883は凝灰岩製の砥石で使用
痕は4面に認められる。

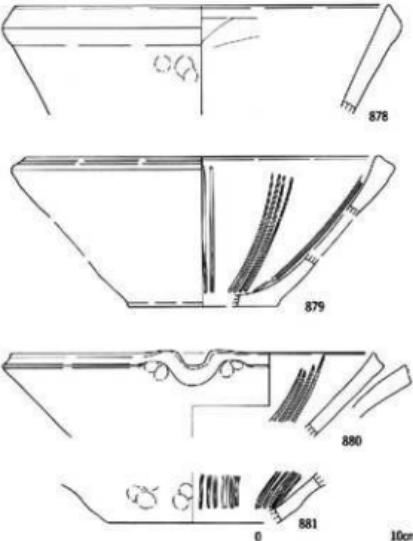
884～886は土師質土器釜の脚部で、調
整は縱方向への板ナデである。

溝10 (SD1010) (第293図)

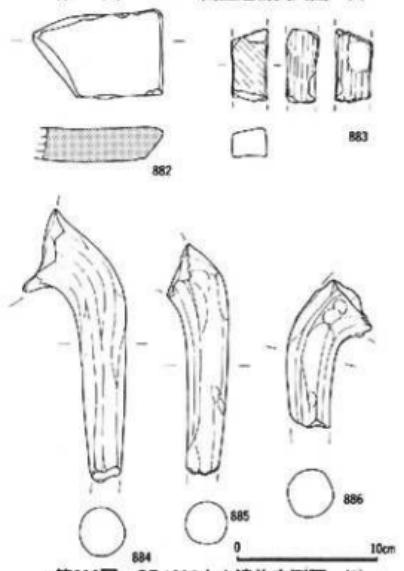
調査区中央部、溝1 (SD1001) および溝
2 (SD1002) によって両端部が切られた
南北に延びる溝である。検出した溝の規
模は長さ25.50m、幅1.60m前後、深さは
0.20mを測る。溝内埋土は褐色系統の砂
質土2層に分層され、第2層には若干の
鉄分の沈澱が見られる。溝の方向はN7°
E前後を測り、I期および区画溝とは方
向を異にし溝15 (SD1015) とほぼ平行する。

出土遺物 (第294図)

887・888は土師器杯の口縁部である。
888は口縁端部を丸くおさめ、内外面には



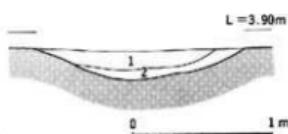
第291図 SD1006出土遺物実測図 (2)



第292図 SD1006出土遺物実測図 (3)

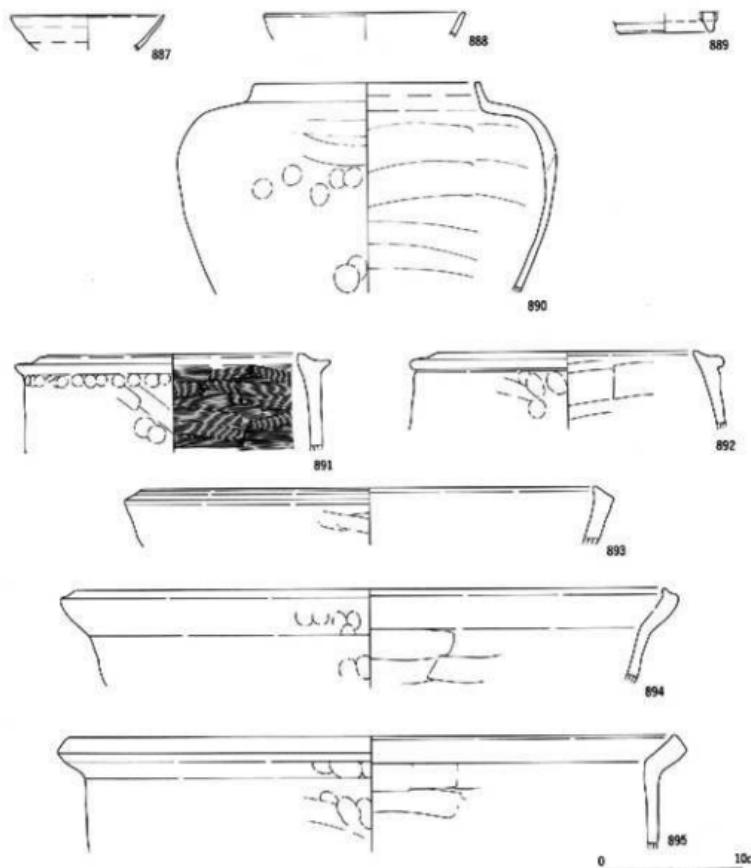
赤色塗彩が施されている。889は土師器椀の高台部で断面形状はU字状を呈する。内面に赤色塗彩が認められる。

890は土師質土器釜で体部は外上方に直線的に立ち上がり、肩部が強く張るタイプで口縁部は直立気味に短く立ち上がる。調整は内外面ともヨコナデである。891・892は短く立ち上がる口縁部に側ナデである。891・892は短く立ち上がる口縁部に側



1 黄褐色2.5Y5/4砂質土
2 オリーブ褐色2.5Y4/4砂質土(鉄分含む)

第293図 SD1010土層断面実測図



第294図 SD1010出土遺物実測図

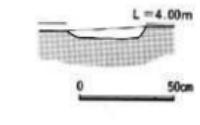
状の凸帯を巡らせたものである。調整は外面ヨコナデ、内面は891がヨコハケ、892がヨコナデである。893は土師質土器擂鉢の口縁部と考えられるので、方形状におさめ端部は若干拡張する。894・895は土師質土器釜で、894は緩やかに屈曲する口縁上端部をつまみ出したタイプのもの、895の口縁部は「く」の字状に短く屈曲し方形状におさめたタイプのものである。調整は外面はヨコナデでユビオサエの痕跡をとどめ、内面は横方向への板ナデ調整である。

溝14 (SD1014) (第295図)

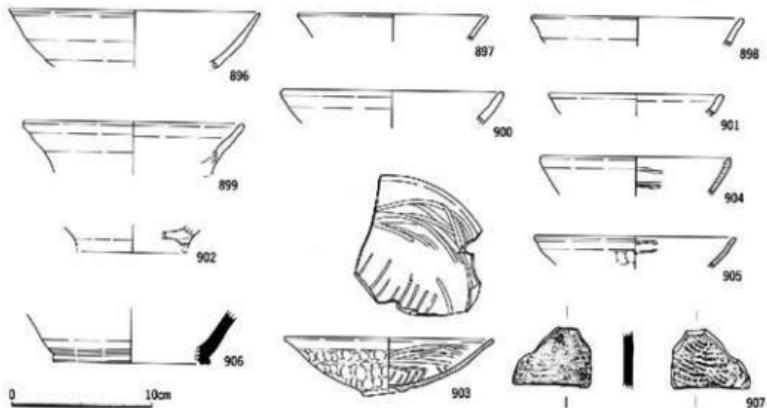
1号屋敷地南西部、掘立柱建物1 (SB1001) の北側2.50mにおいて東西方向に平行する溝で、溝13 (SD1013) を切っている。検出した溝の規模は長さ7.70m、最大幅0.80m、深さ0.08m前後の浅い掘り方を呈する。溝内埋土の土質は砂質土である。

出土遺物 (第296図)

896は土師器碗の口縁部で内彎気味に立ち上がる。上半部は強いヨコナデにより若干外反し、端部は尖り気味におさめる。内外面とも赤色塗彩されている。897～901は土師質土器で、外反する口縁部を有するもの897～899、内彎気味に立ち上がり端部を丸くおさめるもの900・901である。902は土師器碗の高台部である。903～905は和泉型瓦器碗で概ね尾上編年のIII-3段階におさまるものと考えられる。903は口縁部が外面に施されたヨコナデにより若干外反する。内面調整は横方向へのミガキと内底面には平行ミガキが施されている。904は内彎気味におさめる口縁部をもつもので、外面口縁部に



第295図 SD1014土断面実測図



第296図 SD1014出土遺物実測図

は強いヨコナデは見られない。炭素の吸着は悪く白色を呈する。905は赤褐色を呈し、2次的な焼成により炭素が消失したものと考えられる。調整は外面ユビオサエ後、口唇部ヨコナデ、内面は横方向へのヘラミガキである。906は須恵器の高台付杯で、高台部は低く、断面方形状を呈する。907は須恵器甕の体部片で内面には同心円文の当て具の痕跡が残る。

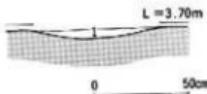
溝15 (SD1015) (第297図)

1号屋敷地中央部において検出した南北方向に延びる溝で、南端部を溝6 (SD1006) に切れ、不明遺構7 (SX1007) を切っている。検出した溝の規模は長さ約21.0m、幅は北端付近で0.60m、南端付近は1.30mで南に向かって幅広になる傾向を示す。また深さは0.10m前後を測る浅いU字状を呈する溝である。溝内埋土はオリーブ褐色砂質土1層である。

出土遺物 (第298図)

溝内から出土した遺物はごく少量で実測し得たのは1点のみである。908は土師質土器鍋で、口縁部は体部から内壇気味に外上方へ屈曲し、端部は内側に拡張する。調整は内外面ともヨコナデである。胎土には雲母が含まれ、搬入品と考えられる。

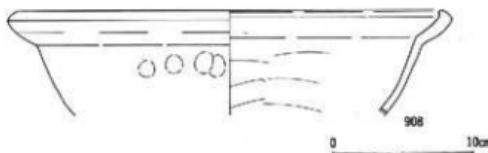
この他、土師器杯片・土師器碗片・土師質土器釜片が少量出土している。



1 オリーブ褐色2.5Y4/4砂質土
第297図 SD1015土層断面実測図

溝18 (SD1018) (第299図)

1号屋敷地南西地点において検出した小規模な溝状遺構である。溝の規模は長さ3.00m、幅0.42m、深さ0.18mを測り、方向はほぼ南北を示す。



第298図 SD1015出土遺物実測図

出土遺物 (第300図)

909～912は土師質土器の杯口縁部である。口縁部は直線的に外上方に延び、端部は丸くおさめる。調整は内外面ともヨコナデである。

溝19 (SD1019) (第301図)

1号屋敷地南西隅において検出した溝で、規模は長さ4.75m、幅0.60m、深さ0.28mを測る。溝内の埋土は2層に分層され、各層とも黄色系統の砂質土で炭化物を含んでいる。溝の

方向はほぼ南北を示す。

出土遺物（第302図）

913は和泉型瓦器椀の口縁部で、端部は丸くおさめる。内面には横方向へのヘラミガキが施されている。914は黒色土器A類椀の口縁部で、外面ヨコナデ、内面には横方向へのヘラミガキ調整が施されている。915は製塙土器体部片で、内面には布目痕が残る。胎土には石英粒・砂粒が多く含まれている。

溝20・21・22（SD1020・1021・1022）

4号屋敷地南端部において検出した東西方向に延びる溝で、屋敷地の区画溝と考えられる。検出した溝は3条確認され、上部より溝21・溝20・溝22がほぼ平行および重複している。

溝21（SD1021）（第303図）

溝21は溝20（SD1020）の北側沿いにほぼ平行する状況で検出されたもので、掘り方は北側が緩やかに落ち込むのに対し南側は直立気味の立ち上がりを呈する。規模は東西方向に約22.0m、最大幅約2.30m、深さは北側から南側に深くなり最深部では0.38mを測る。溝の東側は溝20（SD1020）と重複し、西側端は南側に屈曲し消滅する。

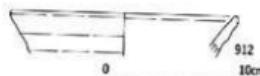
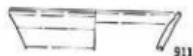
溝内埋土は7層に分層され灰色および黄色系統の砂質土で、いずれも鉄分を含んでいる。また底面にはピット状の落ち込みが検出された。

出土遺物（第304図）

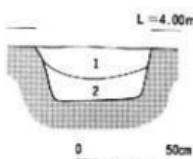
916は土師質土器小皿である。口縁部は直立気味に立ち上がり、端部は尖り気味におさめる。底部調整は不明である。917は土師器蓋で直立した口縁部直下に水平方向に延びる断面方形状の鋸が巡る。胎土には石英粒・石英・雲母を含み搬入品である。調整は外面タテハケ、内面ヨコナデである。



第299図 SD1018土層断面実測図



第300図 SD1018出土遺物実測図



- 1 暗灰黄色2.5Y5/2砂質土
(炭化物、土器片を含む)
- 2 黄褐色2.5Y5/4砂質土
(炭化物を含む)

第301図 SD1019土層断面実測図



第302図 SD1019出土遺物実測図

溝20 (SD1020) (第305図)

溝20は溝21の南側に平行して検出した東西溝で、東端は調査区外に延びる。規模は長さ34.50m、幅1.20m前後、深さ0.30m前後を測る。溝は微高地の南端斜面上に位置し、西側端は斜面に平行し終息している。また溝底の高さは東側が西端より約0.38m低くなっている。溝の方向は東西軸から南に9°偏している。

溝内埋土は6層に分層され各層とも黄褐色系統の砂質土で、第3層には若干の炭化物を含んでいる。

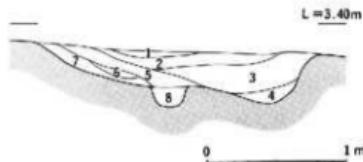
出土遺物 (第306図)

918～920は土師質土器杯口縁部である。918は口縁部の立ち上がりが低く口縁内端部にはやや強いナデが施され尖り気味におさめる。919は口縁端部を若干外反させ、920は直線的に立ち上がるるもので、端部は丸くおさめる。

921は和泉型瓦器椀と考えられる底部片で断面三角形状の低い高台を貼り付けている。922は須恵器壺の体部片である。調整は内面ケズリ状の強いヨコナデ、外面には格子状タタキが施されている。

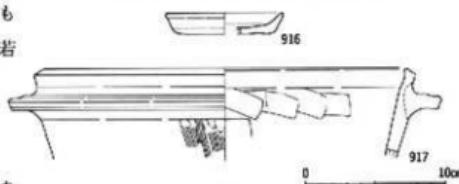
溝22 (SD1022) 出土遺物 (第307図)

溝22は溝21 (SD1021) の下層部において検出したものであるが、土層断面図では北側の落ちは確認されるものの南端側での立ち上がりが確認されない。

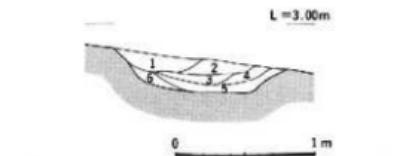


- 1 灰オリーブ色5Y6/2砂質土(鐵分・土器片を含む)
- 2 噴灰褐色2.5Y5/4砂質土(鐵分・土器片を含む)
- 3 黄褐色2.5Y6/1砂質土(鐵分・土器片を含む)
- 4 黄褐色2.5Y6/3砂質土(鐵分・土器片を含む・粘性あり)
- 5 にい黃色2.5Y6/2砂質土(鐵分・土器片を含む)
- 6 にい黃色2.5Y6/4砂質土(鐵分・土器片を含む・粘性あり)
- 7 黄灰色2.5Y5/2砂質土(鐵分・土器片を含む)
- 8 黄褐色2.5Y5/3砂質土(鐵分を含む・柱穴)

第303図 SD1021土層断面実測図

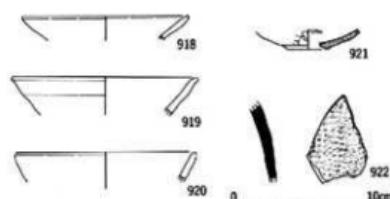


第304図 SD1021出土遺物実測図



- 1 黄褐色2.5Y5/3砂質土(噴灰褐色2.5Y5/2砂質土・土器片小量含む)
- 2 黄褐色2.5Y5/4砂質土(噴灰褐色2.5Y5/1砂質土・炭化物を含む)
- 3 オリーブ褐色2.5Y4/6砂質土(土器片・炭化物を小量含む)
- 4 黄灰色2.5Y5/4砂質土(噴灰褐色2.5Y5/2砂質土を含む)
- 5 極灰色10YRA/6砂質土(極灰色10YR5/5砂質土・4cmの大土を含む)
- 6 黄褐色10YR5/6砂質土(噴灰褐色10YR5/1砂質土を含む)

第305図 SD1020土層断面実測図

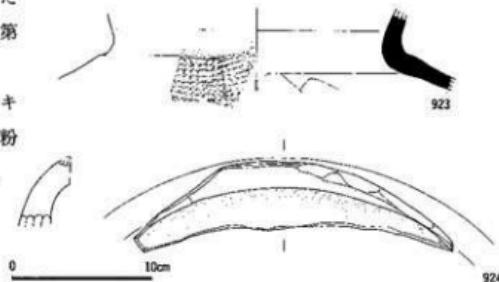


第306図 SD1020出土遺物実測図

事からテラス状の段を形成していたものと考えられる。上部堆積層は第6・7層が対応する。

堆積層は体部外面に格子状タタキをもつ須恵器壺片923と砂岩製の粉引臼の下臼片924が出土している。

土坑



土坑1・2 (SK1001・1002) (第308図)

第307図 SD1022出土遺物実測図

2号屋敷地南端 (P-10グリッド) で検出した土坑である。土坑1の形状は隅丸方形状を呈し、長軸1.54m、短軸0.85m、深さ0.16mを測る。掘り方は検出面より垂直気味に掘られ、底面は平坦面を形成する。埋土は2層に分層でき褐色系統の砂質土である。

土坑2は土坑1によって切られている。形状は方形状を呈し、規模は長軸1.80m、短軸0.90m、深さ0.24mを測る。掘り方は土坑1と同様で垂直気味に掘り込まれており、底面も平坦面を呈している。埋土もほぼ同様、褐色系統で2層に分層される。

主軸方向は南北を示す。

出土遺物 (第309・310図)

土坑1からは土師質土器杯片925、瓦器椀底部926、土師質土器鍋口縁部928、内面に同心円文の当て具の痕跡がみられる須恵器壺片927が出土している。

土坑2からは土師質土器杯片929、体部外面に平行タタキを施す須恵質土器壺片930が出土している。その他、若干の瓦器椀片も出土している。

切り合いなどから土坑1は土坑2よりも新しく捉えられるが、出土した遺物の状況からはほぼ同時期に形成されたものと考えられる。

土坑3 (SK1003) (第311図)

2号屋敷地南端 (P-11グリッド) において検出した長方形土坑である。規模は長軸1.88m、短軸0.70m、深さ0.12mを測る。掘り方は検出面より垂直気味に掘り込まれ、遺構内の埋土は2層に分層され土質は褐色系統である。主軸方向は南北を示す。

出土遺物 (第312図)

931・932は内外面ヨコナデ調整の土師質土器杯である。933は和泉型瓦器椀であり、外面に

ユビオサエ、内面はヨコヘラミガキの調整が施されている。遺構の時期は概ね13世紀代と考えられる。

土坑4 (SK1004) (第313図)

2号屋敷地南端(P-10グリッド)において検出した楕円形状の土坑である。規模は長軸1.90m、短軸0.98m、深さ0.18mを測る。掘り方は検出面より垂直気味に掘り込まれており、遺構内埋土は3層に分層される。主軸方向はほぼ南北を示す。

出土遺物 (第314図)

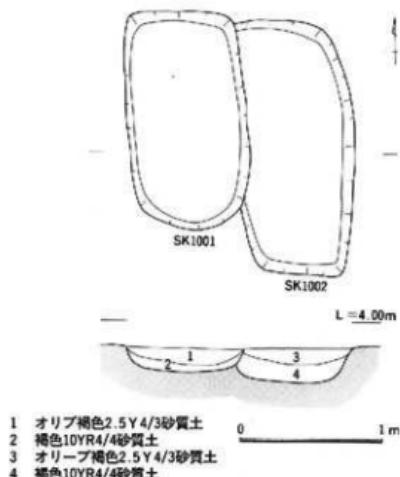
934・936は土師質土器杯で内外面ヨコナデ調整、935は内外面黒色を呈した土器杯口縁部で、外面ヨコナデ、内面にはヨコハケ調整の痕跡がみられる。937は土師質の管状土錐である。この他に土師質土器鍋片、体部外面に格子状タタキをもつ瓦質の甕片、瓦質の鍋口縁部が出土している。

土坑5 (SK1005) (第315図)

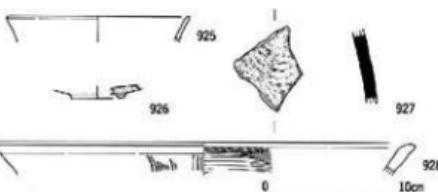
2号屋敷地南端(P-11グリッド)において検出した方形土坑である。規模は長軸1.76m、短軸0.74m、深さ0.16mを測る。掘り方は検出面から垂直気味に掘り込まれ、埋土は2層に分けられる。主軸方向は南北方向を示す。

出土遺物 (第316図)

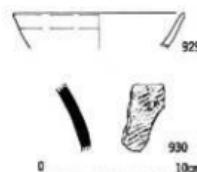
938は土師質土器杯口縁部で、内外面ともヨコナデ調整である。939は土師質の脚端部で、土蓋あるいは土鍋に装着されたものと考えられる。940は断片であり、また鋳化が激しく形状



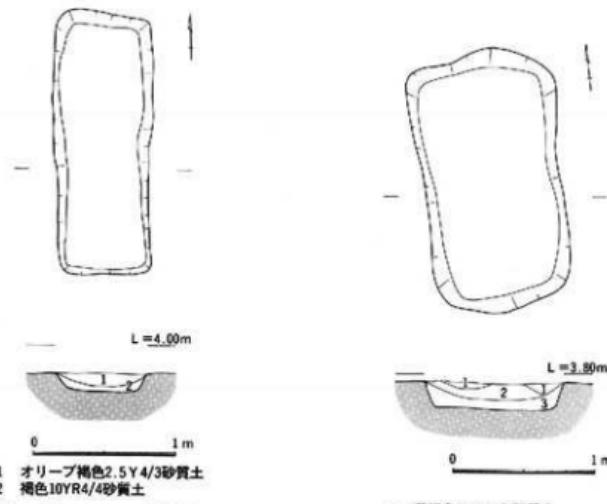
第308図 SK1001・1002実測図



第309図 SK1001出土遺物実測図



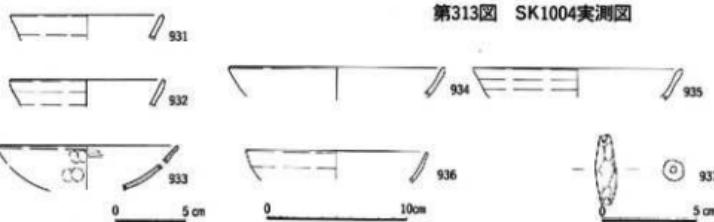
第310図 SK1002出土遺物実測図



第311図 SK1003実測図

1 黄褐色2.5Y5/3砂質土
2 オリーブ褐色2.5Y4/3砂質土
3 棕色10YR4/4砂質土

第313図 SK1004実測図



第312図 SK1003出土遺物実測図

第314図 SK1004出土遺物実測図

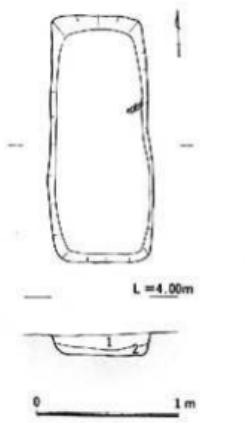
も確定できないが、断面形状から鉄製の刀子と考えられる。出土遺物はこの他に黒色土器A類似もみられるが、混入によるものと考えられる。

土坑6（SK1006）（第317図）

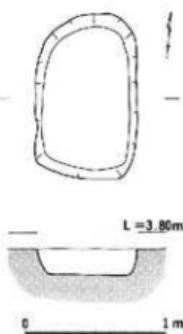
2号屋敷地南端（Q-11グリッド）において検出した不正形な隅丸方形状の土坑である。規模は長軸1.88m、短軸0.72m、深さ0.18mを測る。掘り方は土坑1から土坑5までとはほぼ同様の立ち上がりを示している。主軸方向はほぼ南北方向を示している。

出土遺物（第318図）

941は龍泉窯系の青磁碗である。内面に草花文と思われる文様を配したものと考えられる。



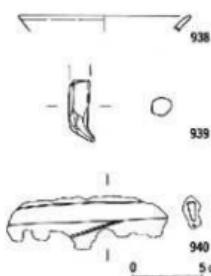
第315図 SK1005実測図



第317図 SK1006実測図



第318図 SK1006出土遺物実測図



第316図 SK1005出土遺物実測図

その他、瓦器碗片が出土している。

土坑7 (SK1007) (第319図)

1号屋敷地 (O-21グリッド) において検出した楕円形の土坑である。包含層掘り下げ時に検出したものであり、土坑の下部のみの検出にとどまった。本来の掘り方の面は検出面より若干上層にあったものと考えられる。確認した規模は長軸0.54m、短軸0.26m、深さ0.04mを測る。掘り方は浅いレンズ状を呈し、埋土はオリーブ褐色砂質土である。

出土遺物 (第320図)

土坑の掘り方最下部に土師質土器小皿を一括廻棄したものである。942～960までの土師質土器小皿は全て乳白色を呈する京都系小皿で実測可能なものは19個体である。

土師質土器小皿は口径8.5cm前後で、形態的に底部中央が内側に押し出されたいわゆるヘソ